

# 温泉地域研究

第13号

2009年 9月

## 論文

- 上杉氏領国下のもう一つの歴史的惣湯  
 —新潟県大湯温泉— ..... 石川 理夫 (1)
- 複数の温泉地を周遊する旅行者の行動  
 —江戸後期の箱根温泉郷を事例として— ..... 内田 彩 (11)
- 飯坂温泉における空間の変化と場所のイメージ ..... 井上 晶子 (21)
- 最近の和倉温泉における小規模旅館の動向 ..... 浦 達雄 (33)

## 研究ノート

- 中国人の日本温泉に対する意識調査 ..... 陳 晶・何 琳 (41)
- 海水浴・潮湯・海水温浴と温泉の類似点と入浴文化の考察Ⅱ  
 ..... 進藤 和子 (47)

## シンポジウム

- 山中温泉における共同湯を核とした町並み整備 ..... (53)

## 書評

- 日本温泉協会編：『温泉図鑑—自然編—』 ..... 長島 秀行 (57)

## 資料

- 島原半島の観光認知 ..... 池永 正人 (58)

## 温泉地情報

- 温泉と鮎とタケノコの里  
 —興津川流域の地域おこしの事例— ..... 新田 時也 (60)
- バース訪問記 ..... 赤池 勇治 (62)

- 学会記事 ..... (64)

日本温泉地域学会

# 上杉氏領国下のもう一つの歴史的惣湯

—新潟県大湯温泉—

Another Case of a Historic Community Bath “SOYU”  
under Government of Uesugi-shi  
—Ohyu Onsen in Niigata Prefecture —

石川理夫\*  
Michio ISHIKAWA

キーワード：共同湯 (community bath)・惣湯 (SOYU)・上杉氏 (Uesugi-shi)  
大湯温泉 (Ohyu spa)

## 1 はじめに

先に本学会誌第11号に掲載した拙稿「歴史的惣湯の考察—神奈川県湯河原温泉と福島県東山温泉—」の冒頭、「現在のところ、この湯河原温泉と東山温泉の事例をもって、加賀国（石川県）の温泉地に始まる歴史的共同湯『惣湯』の存在を掘り起こす個別作業は一区切りとなる」と記した。新たに見いだした新潟県魚沼市（旧湯之谷村）の大湯温泉の事例をもって、この点をまず訂正したい。

もともと新潟県（越後国）の温泉地に関しては、明治以前から開かれて今も伝統的な共同湯を保つ温泉地のどこかに歴史的惣湯が存在したのではないかと、という期待があった。というのは、これまで明治以前に歴史的惣湯の存在が確認された地域エリアを見れば、すべて東日本に限られ、それも加賀国（石川県）から北東へ北陸地方をまたいで北信地方（長野県）の野沢温泉と渋湯田中温泉郷の渋温泉・安代温泉、会津地方の東山温泉（福島県）、南東へは箱根温泉郷の6カ所の温泉と湯河原温泉（神奈川県）、と断続的ながら並んでいる。そうなると北信地方と会津地方を地理的、歴史的に結ぶ接点となる越後にも惣湯が存在したとしてもおかしくはないと思われたのである（図1）。

先の拙稿でも、「越後上杉氏が武田氏や後北条氏と並び、自治的村落共同体を直接統治しようとする領国支配で共通していたことは指摘してきた」<sup>1)</sup>と述べた。北信地方は元来越後との人的物的交流が緊密だった。戦国期に諏訪氏らと組んで信州を全面支配しようとした武田信玄に対抗して、越後上杉氏は謙信の時代に北信地方の国人、村上氏や高梨氏と結んで同地方のかなりの部分を影響下に置いており、野沢温泉一帯も例外ではなかった。また、謙信の時代に越中、能登の国、加賀の北部も勢力圏におき、京都・畿内と密に交流している（図2）。

そして越後上杉氏は謙信の養子・上杉景勝の時代、1598（慶長3）年に太閤秀吉によって東北の防波堤として会津・庄内120万石に移封され、3年間という短い期間ながら会津地方を領国下に置いた。山深い数本の峠道を通じて歴史的に結ばれていた会津地方と越後（ならびに以西）との交流、文化風俗の伝搬は常態化したものとなったわけである。とはいえ、惣湯を生むかぎは温泉地域共同体の歴史的なありようであることは、これまで述べてきたとおり。本稿でも限られた資料の中ではあるが、その形成過程を考察してみた。

\* 温泉評論家 (Critic of Hot Springs)



図1 歴史的惣湯と明治以降の総湯の分布  
 (注) 筆者作成。『温泉地域研究』第6号の図1を改訂。



図2 戦国期の上杉、武田、後北条氏の勢力分布圏  
 (注) 筆者作成。

## 2 新潟県大湯温泉の成り立ち

### (1) 湯之谷温泉郷の中心、大湯温泉

全国に「大湯温泉」という名称の温泉地は3カ所存在する。うち秋田県に2カ所、十和田湖に近い鹿角市の大湯温泉には4カ所の伝統的な共同湯があり、湯沢市の大湯温泉は小安峡温泉の奥にたたずむ山峡の一軒宿である。そして本稿で取り上げるのが、新潟県魚沼市（旧湯之谷村）にあって湯之谷温泉郷の中心となる大湯温泉である。

湯之谷温泉郷は、越後三山の一つ、標高2,003 mの越後駒ヶ岳山系に源を発して信濃川の支流・魚沼川に注ぐ佐梨川に沿った、現在は6つの温泉地からなる。駒ヶ岳を間近に仰ぐ最奥には湧出量が毎分3,000リットル近い一軒宿の駒ノ湯温泉、続いて「子宝の湯」で知られる放射能泉の湯治場・栃尾又温泉、そして最も規模が大きい大湯温泉、その下流には昭和40年代以降に誕生した折立、芋川、葦沢温泉の3温泉地が続く。

加えて、福島県との県境の只見川上流に奥只見ダムができる前は、支流に恋の岐温泉、浪拝温泉、銀山温泉など古い温泉場が点在していたが、すべて水没している。湯之谷温泉郷一帯が温泉資源に満ちていることがわかるであろう。

いつ頃から湯之谷（郷）と呼ばれるようになったのかは定かではない。土地が開かれたときからすでに温泉が存在していたためそう呼ばれるようになったのであろう。江戸後期の1815（文化12）年に越後水原の人・小田嶋允武が著した越後百科的な『越後野志』には、白峯銀山を紹介する一文中「温泉之谷郷」<sup>2)</sup>と記しているから、本来はこちらの表記から始まり、後に湯之谷となったと思われる。

大湯温泉は現在、温泉宿が10軒ある。元湯にあたる共同の泉源地と傍らに設けた共同湯、それを見守るかたちで建つ熊野神社の一帯を旅館や店舗が囲んで温泉街が形成されている。新潟県では月岡、岩室、越後湯沢温泉など一定規模を備えた温泉地同様に、近年ま

で歓楽温泉地型で成り立っていた名残を温泉街の射的場や劇場、芸妓の存在などにとどめている。

大湯温泉にも、奈良養老年間という行基開湯伝説や平家落人伝承がある。それはさておき、大湯という地名が江戸前期から使われていたことからして、歴史の古い温泉地と考えられるが、開湯の時期は明らかではない。温泉之谷（湯之谷）周辺地域は、古代には魚沼郡四郷の一つをなす荻上＝藪神と呼ばれ、貴族・大寺院が領有する荘園ではなく、本来は国衙領（公領）であった。土地の人々は公民として越後国府（現・上越市）の役人の支配下にあった<sup>3)</sup>。それが南北朝時代、関東管領家・山内上杉氏の上杉憲顕が越後の守護を兼ね、同時に国衙職を称してから、藪神郷も山内上杉氏によって事実上私領化された。

藪神郷で大湯温泉の存在が明らかになるのは、慶長年間（1596～1614）のことである。豊臣政権末期に上杉景勝が会津若松へ移った後、越後の三条城主となった堀直政と三男の六日町坂戸城主堀直寄が<sup>4)</sup>大湯温泉に入湯したことが神社の古文書に見えるという<sup>4)</sup>。そして1641（寛永18）年、温泉之谷（湯之谷）郷折立村の百姓・源蔵によって奥の銀山平に銀が発見され、上田銀山と命名した。幕府の命で高田藩により1657（明暦3）年から銀山経営が始まると、大湯温泉をはじめ湯之谷の温泉場には人が集まるようになった。

### (2) 入湯者の増加と内訌

江戸前期の正保年間（1644～47）年に幕府が作らせた『正保越後国絵図』に「大湯村、高三十五石余」と記され、元禄年間（1688～1703）の郷帳にも一村として記されているという<sup>5)</sup>。この元禄期に大湯にまつわるさまざまな話をしたためた『大湯縁起』（和泉屋文書）もできたようである。「大湯村」とは、1889（明治22）年に下流の下折立、上折立、芋川村などとともに7村合併で旧湯之谷村が誕生するまで続いた大湯温泉の地元集落である。

小出から始まり、銀山へ至る銀山街道には途中 8 ヲ所の宿駅がおかれた。その最後の一つが大湯村にでき、温泉に入る人も増えていく。ちなみに「天和 2 (1682) 年に大湯温泉の当座入湯 (適宜の入湯) 人数は 711 人であったが、元禄 2 (1689) 年には 1,317 人と二倍近くに増え、元禄 13 (1700) 年には 1,781 人を数えた」<sup>6)</sup> という。入浴者の内訳で見ると、「翌元禄 14 年では当座入湯人数は 1,255 人であったが、留湯入湯人数は 3 人、雑湯入湯人数は 194 人であった。入湯の時期は春から秋で、留湯・雑湯は 2 月 3 日から 10 月 20 日迄であったが、当座入湯はそれよりも短く、4 月 15 日から 9 月 1 日迄であった」<sup>7)</sup> (ゴシックは筆者)。

当座入湯というのは聞き慣れないが、銀山出入りの人などが立ち寄り湯をしたことをさすようである。留湯と雑湯は連続入浴で、留湯は名札を入口にかけての貸切入浴、雑湯は村人も湯治客もだれかれを問わない一般浴槽への入浴であった。3 種類の人数分けは、徴収する湯賃 (浴料) が異なるためで、1 回毎の当座入湯は「一人銭 3 文。これに対して継続入湯の留湯は一人銀 5 匁、雑湯のほうは一人銀 1 匁 3 分だった」<sup>8)</sup>。高額な留湯ができたのは裕福な商人及び身内の婦人、奉行所や銀山関係の上級武士であったかもしれない。

入浴者の詳細を把握していたのは、大湯村と温泉場の安寧と湯賃徴収の必要からである。大湯の湯元を管理する湯守役だった大湯村庄屋で宿駅の間屋を兼営していた利兵衛ならびに村役人 (村方三役) が毎日人数などを帳面に付けていた<sup>9)</sup>。近隣村人が入浴あるいは湯治に訪れるだけのひっそりしていた温泉場が銀山とともに入湯者が増えていくのは、大湯温泉の奥にある栃尾又温泉も同様であった。

江戸中期、長岡藩士・丸山元純 (1682 - 1758) が 1756 (宝暦 6) 年に著した『越後名寄』は越後に関する百科事典で、「温泉部」の一章を割いて、越後の主な 15 ヲ所の温泉

地を紹介している。大湯温泉については「大湯 魚沼郡上田郷藪神庄」として、「温泉、大湯村にあり。佐梨川の端なり。居家十二軒、尾上を町場と云う」<sup>10)</sup> と記す (以下、現代訳)。一方、栃尾又温泉のほうは、「大湯村よりなお八町ばかり山奥にて常には居家なく、人跡絶えたる所なり。深雪消えて夏の間仮居の小屋を造り、湯浴みする人の旅宿とす。戸数七軒」<sup>11)</sup> という様子であった。本史料については、次節でまた詳しくふれたい。

ところで、栃尾又温泉のほうは常住の温泉集落ではないため、大湯村からは切り離され、下流の折立村の庄屋が湯守役を務め、番小屋を維持していた。栃尾又温泉の入湯者別の人数は、1733 (享保 18) 年で留湯 15 人、雑湯 381 人、当座入湯が 148 人であった<sup>12)</sup> という。

次に、大湯温泉と栃尾又温泉の江戸後期の状況はどうであったか。1812 (文化 9) 年に出版された『北越奇談』は以下のように記述している。

「大湯は (大湯) 村中にありて百数十人を浴すべし。これ熱の湯なり。また川岸に滝の湯あり。これは冷なり。熱は疝気、頭痛、打ち身・癩氣を治し、冷は疥癬湿瘡を治す。即ち農家に入治 (湯治) の人を宿し、さらに不自由なることなし。繁花 (繁華) といふにはあられども、閑清 (閑静) にして景色俗ならず」<sup>13)</sup> (かっこ内付記は筆者)

大湯の源泉は今も自然湧出しており、少し地面を掘ると湧出してくる。それを各旅館、共同湯で浴用に供するために貯湯・配湯槽まで揚げる段階でポンプアップしているだけだが、現在の泉温は平均 48 度である。栃尾又温泉が 35 度の微温湯であり、ほかと比べて高温泉ぶりは際だった。銀山経営はその後変遷があり、そのつど多少の影響は与えたが、大湯温泉と栃尾又温泉はそれぞれの温泉の特色を生かして温泉効果をアピールし、越後の由緒ある温泉場として定着していったといえる。

なお、江戸時代を通じての定着ぶりは名湯の誉れとともにあった。幕末期の1864（元治元）年に紀興之が編んだ『越後土産』「温泉之部」では、31ヵ所の温泉を効能中心に紹介しているが、その中で唯一手放しで「治ること神のごとし」<sup>14)</sup>と絶賛されているのは大湯温泉である。次いで栃尾又温泉と「飯豊山の湯」（湯ノ平温泉のことか）が、効能を限定した上で同じ文言を記されている。

### 3 大湯温泉の共同湯と惣湯

#### (1) 共同浴舎に「惣湯」を含む3種類の湯坪

それでは大湯温泉にはどのような入浴の場が存在していたのか。このことが惣湯にかかわってくるので、わかるかぎり湯坪、浴舎の様子を明らかにしてみたい。

前に取りあげた資料で、旧湯之谷村教育委員会が中心となって2001年に編纂した『湯之谷の歩み』には、留湯と雑湯を紹介する一文中、「留湯というのは長屋造りの湯小屋の南端の一間に設けられた湯坪への入湯で、出入り際には出入り口に名前を記した板札をかけたり、外したりして順番に入ったらしい。雑湯というのは、惣湯ともいい、その北側に設けた三つの湯槽に身分を問わず、昼夜を別たずに入湯するものであったという」<sup>15)</sup>（ゴシックは筆者）と記している。

ここに「惣湯」の存在が明記されている。ただし、いつごろの状況か、また出典も明らかにしていない。しかし、この出典と考えられるのが、三番目に挙げた史料『越後名寄』ではないか。同史料には先の記述内容がすべて載っており、記述展開も同じである。ただし、「雑湯」を「惣湯」とも言う、というくだりはない。

その点はおくとして、『越後名寄』によれば、江戸中期には湯坪はすでに浴舎造りになっていたことがわかる。以下、引用（現代訳。ゴシックとカッコ内付記は筆者）は同書による。

浴舎の建造が早かったのは、「常に山嵐の

瘴気があって、下りてくると寒いことがある」山峡で雪国であったからであろう。「温室（浴室）は総長屋作り」で、内部の「南の端には一間を囲って六尺（約1.8m）四方の湯坪」があり、「座って入っても鳩尾<sup>みぞおち</sup>まで浸かれる深さ」で、湯滝（打たせ湯）も設けていた。これが貸切入浴の「留湯」である。留湯に入る人は次の「総（惣）湯」にも入浴できた。

「総（惣）湯」のほうは「六、七尺四方の湯船が三つあり、一つには湯滝」があった。入浴料は、「留湯が三百七十五銭で（入浴の日数は何日でもかまわない）のに対し、「総湯の浴料は百銅。こちらでも同じ」であったが、ただし総湯のほうは、湯治滞在の客に「油代として毎夜一人一銭ずつ、座敷代一夜百銭、木賃共に定法なり」ということで別途徴収した。入浴料の額は『湯之谷の歩み』と異なるが、時代の差なのであろうか。

先の『湯之谷の歩み』ではふれていなかったのが、総（惣）湯の後に続く『越後名寄』の記述で、総（惣）湯の北端には「三間（約5.4m）の湯坪を構えて、悪瘡のある人が入浴する所」があった。すなわち利用法が異なる3種類の湯坪が並んでいたのである。

ほかにも、佐梨川べりまで源泉を笕で流し、打たせ湯を用意していた。大湯の源泉は「熱いので加水しないと入浴できないが、水を足しても（濁らず）清らかである」と記されている。

#### (2) 惣湯を含む共同浴舎の変遷

以上の記述からまとめると、すでに大湯温泉では江戸中期に以下の状況が確立していたと考えられる。

- ① 大湯温泉に宿を兼業する所はあっても、温泉を内湯に引いた湯宿はなく、村人を含めて総長屋造りの共同浴舎を利用していた。
- ② 共同浴舎は大きく3つの用途に応じて仕切られ、南端に貸切専用の「留湯」浴槽が、北側には湯船が三つ並んで、だれもが入浴できる「雑湯」あるいは「惣湯」

があった。さらに北端には悪瘡のある人専用の湯船を設けていた。

- ③ すなわち、大きな共同浴舎の中の一つを村人、外部からの入浴者を問わず入浴させる「惣（総）湯」と呼んだ。
- ④ 共同浴舎体制は、江戸時代を通じて大きな変化はなかったように思われる。

ただし、4番目の点については、『越後名寄』以降の史料にあたっても、残念ながらほとんど『越後名寄』の記述を丸写ししたとしか考えられない有様である。状況に変化がなかったからそうしたのか、ただ現場確認ができなかったためなのか、確認したい。

たとえば、江戸後期の1815（文化12）年に出版された先の『越後野志』は、「温泉」

の部で信州に属する小谷温泉や、「土中より燃出する火で水を温めて入浴する、温泉ではない」<sup>16)</sup>温泉を除くと、計27カ所の温泉を紹介している。しかし、大湯温泉に関する記述も『越後名寄』の丸写しである。

さらに明治維新後、1906（明治36）年に北魚沼郡教育会が編さんした『北魚沼郡志』も「旧記に云」として同書にすべて依っている。なお、同書では「惣湯」と「総湯」の表記を併用している<sup>17)</sup>。

それでは絵図はどうか。

『越後名寄』と『越後野志』に絵図は付いていないが、先に挙げた1812（文化9）年刊『北越奇談』には、栃尾又温泉の絵図と並んで「大湯村 温泉」図が載っている（図3）。

図3を見ると、まさに温泉入浴の場主体で



図3 大湯温泉の共同浴舎  
(注) 1812（文化9）年刊『北越奇談』による。

描かれている。手前の佐梨川の河岸段丘にせり出すように右手下に屋根掛けした打たせ湯の浴舎があり、湯滝が数条落ちている。『越後名寄』の記述どおり、源泉を寛でここまでもってきて流したのである。

そして中央左寄りの大きな総長屋造りが共同浴舎である。浴舎の中央、開放した姿で入浴者でにぎわう内部がうかがえる広い湯坪（群）が「惣（総）湯」であろう。その左手、閉じられた一角が貸切用の「留湯」で、右手のこぢんまりした一角が「悪瘡のある人が入浴する所」と思われる。

大湯の共同湯＝共同浴舎は、湯元（泉源）近くに設けられていた。絵図では、共同浴舎の前から左上の高台に石段が続き、共同湯と湯元を見守るようにお堂が建っている。これが『越後名寄』に「薬師堂温室の上に在り、方二間」と記されている薬師堂である。薬師堂の本尊は「行基が彫った」と伝えられる薬師如来である。「村の鎮守、熊野権現」も奉っているため、今日では熊野神社の名で、同じ場所に鎮座している。

以上のように江戸後期にあっても大湯温泉の情景、惣湯をはじめ共同湯＝共同浴舎の様子に変化は見られないようであった。

次に、江戸末期の1855（安政2）年刊

あずまこうあきんどがみ  
『東講商人鑑』にも大湯温泉図がある<sup>18)</sup>（図4）。同書は東日本中心に各地を行商する商人向けの旅宿組合加盟店ガイドで、温泉場も紹介している。この大湯温泉図では、薬師堂下の同じ位置に小さく共同浴舎「大ゆ」があり、周囲に宿の屋号が並び、宿案内を兼ねた案内絵図となっている。

こうしてみると、「惣湯」の表示はないが、幕末期になっても大湯温泉の共同浴舎をはじめ基本構造は変わっていない。その中で、村人が兼業していた宿の発達により鮮明にうかがえるようになっている。

#### 4 大湯温泉を支えた地域共同体の考察

##### (1) 湯賃の湯守と村方（惣百姓）への配分

先の史料『越後名寄』には、「湯守ヲ桜井利兵衛ト云、即村ノ長ナリ、温泉ノ権與不分明（温泉の権与ははっきりしていない）」<sup>19)</sup>（ゴシックとかっこ内付記は筆者）という注目すべき一文がある。江戸時代の史料で温泉権について直接言及したものは少ないのではないか。

いずれにせよ大湯温泉の場合もというべきか、天与の温泉資源とその利用の場は特定の個人に帰属、支配されていたものではなく、



図4 幕末期の大湯温泉図  
(注) 1855（安政2）年刊『東講商人鑑』による。



温泉地域共同体である大湯村で一元的に管理していた。その際、大湯村の庄屋を務め、銀山街道宿駅の間屋も兼ねていた有力百姓の桜井利兵衛家が高田藩により代々「湯守」役を命じられ、温泉の管理責任者となって村方三役をたばねていた。

前出『湯之谷の歩み』によると、豪雪の山峡で常住集落ではなかった奥の栃尾又温泉は大湯村の下の折立村に帰属し、「1687（貞享4）年の村の年貢割付には年間の入湯者と湯賃が記され、当座一人一匁三分で一匁は上納、三分は湯守分とされ、湯船、湯小屋の修復に充てられた。また、湯守は湯賃を規定以上に取り立てないこと」<sup>20)</sup>などが決められていた。栃尾又温泉の湯守は、1743（寛保3）年に折立村が幕府直轄領（会津藩預り）と糸魚川藩領の上下二つの村に分割されてからも、幕領上折立村の庄屋が務めていた。

栃尾又の例も加えて推測すると、入浴者から徴収した湯賃（湯銭・浴料）の用途、配分先は三つ考えられた。

- ① 湯税・温泉運上金として上納する。
- ② 湯守の取り分を確保した上で村人に配分する。
- ③ 共同浴舎、湯坪などの修繕費用に充てる。

大湯温泉の場合、「湯賃銭収入の三分の一は湯守の取分で、三分の二は惣百姓によって村方が受け取るようになっていた。湯小屋や湯槽などの修繕費用は湯賃銭の収入によってすべてまかなっていたようである。温泉運上（税）は、湯守が一人で上納したこともあったが、惣百姓の高割で上納することもあったと思われる」<sup>21)</sup>と、『湯之谷の歩み』では述べられている。

この点は、注4で資料として挙げた星野徳一郎著『越後国魚沼郡藪神庄湯之谷郷』（湯之谷村、1970）に収録された、元禄時代の大湯湯賃の徴収内訳と配分を年毎に代官に報告した湯賃書上げ文書（和泉屋所蔵）から確

かめられる。

それによると、1699（元禄12）年12月付で大湯村湯守で庄屋の利兵衛、与（組）頭の喜兵衛、百姓（代）の源左衛門の村方三役連名で、同年の正月から十一月二日までに徴収した湯賃の「留湯」と「雑湯」別内訳と人数、月日別、さらに集めた湯賃の配分明細を代官へ報告している。配分は、三分の一は湯守へ、三分の二は「惣百姓請取申し候」ということで、覚書には「大湯村湯賃三分二百百姓に下され置き候分」としての金額が記されている<sup>22)</sup>。村に渡った分は、「村中人の持ち高に依じて」割り振られた。

残る運上金の納め方に関して、『越後名寄』では、こうした湯賃などの徴収によって「運上ヲ貢ス、湯ノ谷ノ村里配分シテ割取也」と述べる。この箇所を1909（明治39）年に引用した『北魚沼郡志』によると、「是をもって運上を貢ぎ、余は湯之谷の村々配分にて割取なり」と記している。集められた湯賃は、まずは定められた割合での運上金を支払ってから、村人に還元されたのであろう。

なお、本節のはじめに紹介した大湯温泉の温泉権については、大湯温泉の今日の状況が参考になると考える。

熊野神社下の主泉源地近くでは確かに少し庭を掘っただけで温泉が自然湧出する状況であり、1980（昭和55）年度の全国温泉利用状況一覧では利用源泉総数は15本である。個別に少量の自家源泉を使っている宿もある中で、歴史的な湯元、自然湧出の主泉源である0号井（毎分約20ℓ）と1号井（毎分188ℓ）を中心に毎分300ℓくらいの湧出量を持つ源泉を大湯地下資源開発組合が共同管理し、共同湯と旅館に配湯している。それ以前には元湯の共同湯を共同管理する組合があり、大湯地区を中心に旧湯之谷村民が湯株を分け合っていた。惣湯を含む江戸期の共同浴舎と温泉資源の地域共同体による共同管理の伝統は引き継がれているのである。

## (2) 惣湯を生む越後の村落社会構造

越後国を関東管領家の山内上杉氏が掌握したのは室町時代、南北朝動乱期のこと。14世紀半ばの暦応年間(1338-41)、上杉憲顕(1306-68)が足利幕府より越後守護に任ぜられて越後国に入り、従来勢力である南朝方の越後新田氏一族と傘下の国人層・中小土豪層を掌握し、一方で国衙職を任じて魚沼郡を含む越後の国衙領をも守護領国下に取り込み、在地支配を固めていった。そして承知のとおり、山内上杉氏の家宰として守護代を務めた長尾氏が実権を握り、最終的に関東管領家と山内上杉氏を継承して、上杉謙信(長尾景虎)以降(後)上杉氏と呼ばれ、越後一国の領国支配を確立した。

上杉氏の領国支配は、1598(慶長3)年に会津・庄内120万石に移封された上杉景勝が、関ヶ原の戦いが起きた1600(慶長5)年、家康の命を受けて景勝を討とうとした堀秀治に対して越後に再侵攻、越後の在郷旧臣らがこれに呼応した越後一揆をもって終焉した。しかし、加賀や能登、越中、北信濃地方まで勢力圏下におき、関東では常に後北条氏と拮抗し合った中で培われた上杉氏領国体制での、中世以来の国人層を媒介した自治的村落共同体の基本構造は、幕藩体制下での近世郷村制確立を通じて換骨奪胎されたかたちで取り込まれたと思われる。

また近年、後北条氏をはじめ戦国大名領国における村落のありようが見直され、「東国でも畿内近国の惣村にあたる村落が存在したことの指摘がなされている」<sup>23)</sup>といったことも、温泉地域史研究の面から注目したい。

本稿ではそうした考察までは至らないが、上杉氏の越後領国支配は、地域レベルに絞れば以下の基本構造を有していた。

一つは、都市法(市場法)、各種掟・制札発布による法的規制である。大湯村のような村落社会では後者が意味を持っていた。続いて、兵農未分離だった自立武装「百姓」への軍事動員令がある。これに関しては、「そも

そも上杉氏関係史料から百姓に関する記事を抜き出してみても、それはほとんど軍事動員の対象としての百姓しか視野に入っていないのではないかと思えるほど」<sup>24)</sup>という論考も見られる。

要するに、越後国では有力小領主、国人衆が数多く存在してそれぞれの村落共同体に根づき、上杉氏はそれを前提に、大名裁判権や各種統制、軍事動員命令権、新田開発、撫民令といった面から村落共同体を直接統治して領国支配を保った。上杉氏後の江戸初期の各村の検地帳から、「村殿」と呼ばれてかつて村にあった城の主や、「左京、民部・式部・兵庫・掃部」<sup>かもん</sup>などただの百姓とは思えない「殿原百姓」と呼ばれる名前が散見された<sup>25)</sup>という。この層も村役人となって村を代表し、村請、村落自治を担った。この姿は後北条氏領国下の相模国の村落共同体に近い構造であったかと思われる。

湯之谷郷の各村は惣百姓が相談の上、何事も村決めを行っていた<sup>26)</sup>。大湯村では先にみたとおり、村方三役のうち庄屋が湯守を兼ね、惣百姓に持高割で温泉収益を還元する仕組みをつくっていた。こうしたことが大湯村という温泉地域共同体成員の総意をもって、留湯、雑湯=狭義の惣湯等に分かれた共同浴舎を村持の惣有財産=広義の<惣湯>とみなす共同体意識を育むことにつながったのであろうと考える。

## 注・参考文献

- 1) 石川理夫(2008):「歴史的惣湯の考察-神奈川県湯河原温泉と福島県東山温泉」温泉地域研究、11号、11頁。
- 2) 小田嶋允武(1815):『越後野志』復刻版(歴史図書社)、巻六「山」、白峯の項。
- 3) 湯之谷のあゆみ編纂委員会(2001):『湯之谷のあゆみ』30頁。
- 4) 星野徳一郎(1970):『越後国魚沼郡藪神庄湯之谷郷』(湯之谷村)358頁。
- 5) 前掲3)7頁。
- 6) 前掲3)65頁。
- 7) 8) 9) 前掲3)65~66頁。

- 10) 11) 丸山元純 (1756):『越後名寄』卷之九「温泉部」8～9頁。
- 12) 前掲3) 66頁。
- 13) 橘茂世 (1812):『北越奇談』復刻版(野島出版) 82頁。
- 14) 紀興之編 (1864):『越後土産』温泉之部一。
- 15) 前掲3) 66頁。
- 16) 前掲2) 卷十六「温泉」148～150頁。
- 17) 北魚沼郡教育会編 (1906):『北魚沼郡志』復刻版(千秋社) 36～38頁。
- 18) 前掲3) 66頁、甲良山編 (1855):『東講商人鑑』板本(新潟県立歴史博物館所蔵)より転載。なお、復刻版(明治12年版)では絵図の説明文章に変更が見られる。
- 19) 前掲10) 8頁。
- 20) 前掲3) 7頁。
- 21) 前掲3) 66頁。
- 22) 前掲4) 374頁。
- 23) 則竹雄一 (2005):『戦国大名領国の権力構造』(吉川弘文館) 250頁。
- 24) 青木昌子「越後上杉氏における戦国家法の形成」(井上辰雄編 (1986):『古代中世の政治と地域社会』) 456頁。
- 25) 田中圭一ほか (1998):『新潟県の歴史』(山川出版社) 133頁。
- 26) 前掲3) 63頁。

# 複数の温泉地を周遊する旅行者の行動

—江戸後期の箱根温泉郷を事例として—

The Behavior of Tourists who Enjoyed Many Spas Located in One Area  
— A Case Study on Hakone Spas in the Late Edo Period —

内 田 彩 \*

Aya UCHIDA

キーワード：箱根温泉 (Hakone spas)・旅行者行動 (tourist behavior)・温泉地 (spa)  
集合型温泉地 (congregate-type spa)

## 1 はじめに

### (1) 研究の背景

日本は温泉資源に恵まれた国であり、江戸後期の『旅行用心集 (1811)』には40カ国292箇所の温泉地名と「上ハ王侯より下庶民に至迄湯治すること今に盛也<sup>1)</sup>」と記され、湯治が盛んになり多くの人々が温泉地を訪れている様子がうかがえる。こうした温泉地も近代の交通機関の発達、社会状況の変化などに伴い、湯治の形態は滞在の短期化、入湯圏の広域化、宿泊形態は自炊から食事付に、湯治客は固定客から不特定多数の客にと変化を遂げた。地域の差異はあるが多くの温泉地が療養・保養型温泉地から歓楽型(観光型)温泉地へと変貌を遂げた<sup>2)</sup>。

しかし近年の団体旅行の減少など旅行形態の変化に伴い、改めて一泊二日の宿泊ではなく、中長期滞在が可能な温泉地づくりが注目を集めている。また急激な高齢社会の本格化は、伝統的な療養・保養型温泉地への需要を高め、その存在意義が大きくなると指摘されている<sup>3)</sup>。こうしたなか各温泉地は、赤湯温泉等が取り組む温泉地内で宿泊と食を選択できる「泊食分離」、黒川温泉等が取り組んだ温泉地内の温泉を楽しむ「入湯手形」、温泉郷内を周遊して楽しむ別府温泉「オンパク」、広域的な温泉地域の連帯に取り組む東鳴子、

肘折、秋の宮の「渡り湯治」等、多様な滞在形態を模索している。

### (2) 研究目的

それでは長期滞在が一般的であり、日本型リゾートの原型<sup>4)</sup>と指摘される近世後期の温泉地ではいかなる滞在形態や行動が存在したのか。箱根温泉郷は優れた研究成果があり<sup>5)</sup>、療養型の長期滞在が主流であった近世期にも、一夜湯治や温泉入浴と周辺散策、さらに江ノ島・鎌倉めぐりがセットで行われ、江戸後期には病気療養を主目的とする「湯治場」から、「温泉観光地」に変容がみられた<sup>6)</sup>。

筆者も『立教観光学研究紀要』において、箱根温泉郷の滞在形態が短期、中期、長期と多様になるとともに、滞在期間に応じた多様な周遊形態が現れた事実を指摘し、その背景の一つとして、複数の温泉地が集合している温泉郷(「集合型温泉地」)の可能性について言及した<sup>7)</sup>。

従来の観光研究においても史料を観光行動の調査事例とする研究は進められているが<sup>8)</sup>、温泉地における滞在行動については、基礎的な研究<sup>9)</sup>以降は深められておらず、周遊型の温泉地めぐりについての研究はわずかである。本稿では上記の研究を踏まえたうえで、多様な滞在形態が模索されるなか、江戸後期の箱根温泉郷を対象に複数の温泉地が

\* 立教大学大学院 (Graduate School of Rikkyo University)

集合している温泉郷における滞在行动について、案内本、道中記類などの史料から考察を試みる。

## 2 江戸時代の箱根七湯

### (1) 江戸時代の湯治

一般的に、江戸時代は、幕府の成立による参勤交代の制度化、街道・宿場町の整備、貨幣経済の普及など、旅をするための諸条件が整備された時代である。しかし、旅の条件は整備されても庶民はもちろん、武士や町民の場合も無条件で旅行に出かけられたのではなく、「参詣」「湯治」といった名目が必要であった<sup>10)</sup>。

この時代は旅をする諸条件が整うとともに、医療の進歩や出版業の普及により、温泉に対する情報が増加して、温泉地の情報や湯治の効果が広く宣伝された。特に医療の側面では香川修徳が温泉医学書『一本堂薬選統編』(1738)を著し温泉の薬効を説いたことは、各藩が湯銭をとり藩の財政を潤すために温泉地を保護した事と相まって、全国的に温泉地の発展を促し<sup>11)</sup>、三廻(21日)の湯治が一つの形式として定着した。

また長期にわたる滞在が可能となった背景には、農閑期を持つ農民、「湯治休暇」がとれた武士など長期休暇が可能なる階層の存在、利用客の経済状況に応じた滞在生活が可能であったこと、社会的に医療手段として温泉が位置づけられていたことがあった<sup>12)</sup>。温泉地での滞在生活は主に自炊であり、宿は宿泊料のほか、鍋、釜、夜着、布団なども必要に応じ貸し出し、各々の料金を取った。また、毎日の生活に必要な燃料や調味料は宿から購入できたほか、生鮮食料品は地元の市や宿廻りの行商から購入していた。農民は米や味噌等を持参して訪れており、各人に応じた湯治生活が可能であった。

湯治の中心である入浴は、外湯型、外湯と内湯の折衷型、内湯型があったが、基本的には共同湯が中心となり、滞在者はそこに入浴

しに行った。共同湯の周辺には、有力湯宿、商店が立地しており、共同湯は空間上の核であり湯治場のシンボルであった<sup>13)</sup>。そしてこうした共同湯は、人々が日に何度も訪れる温泉地の中心であり、温泉地を訪れる多様な人々と出会える場でもあった。温泉地での宿、共同湯、市などでの様々な交流は、入浴時間以外の余暇を過ごす重要な滞在行动であった<sup>14)</sup>。

### (2) 江戸時代の箱根七湯の状態

#### ①箱根七湯とは

箱根温泉郷は神奈川県南西部、箱根山の直径約11キロのカルデラ地帯に立地する。中世に湯坂路が開かれ足柄山と並ぶ交通の要地となり、近世には東海道箱根八里が開かれ箱根宿・関所が開設された。この時代には小田原宿より箱根宿を経て三島宿(現静岡県三島市)に至る道程が「箱根八里」と呼ばれ、東海道を利用する人々で賑わう地点であった。特に箱根湯本は、東海道沿いにある最大の温泉地でもあり、江戸から二十里余(約80km)で関所の手前にあり、道も険しくないで、都下の老若男女が湯治に訪れやすいといわれるほど立地に恵まれていた。(『旅行用心集』<sup>15)</sup>)。

箱根湯本を含む箱根七湯は、早川沿いにある湯本・塔之沢・堂ヶ島・宮ノ下・底倉・木賀の六湯と、駒ヶ岳山麓にある芦之湯をあわせた江戸時代の箱根温泉地の総称である(図1、2)。そして七湯の各温泉地は相互に1



図1 箱根七湯

(注) 国土地理院 1/50000 地形図をもとに筆者作成。

～4キロ前後に位置し、規模は異なるがそれぞれが集落として形成されており、江戸時代には各温泉地に3軒から11軒の宿、寺や名所<sup>16)</sup>、共同湯が存在していた<sup>17)</sup>。

箱根七湯は、『御引渡目録』に七湯全ての湯坪(浴槽)が記されていることから江戸前期の1686年(貞享3年)頃には成立していたと考えられる<sup>18)</sup>。1644年(正保元年)には、

木賀温泉から將軍家への献上湯<sup>19)</sup>が汲み出されたことを始め、湯本・塔之沢等からも湯樽が江戸城へ送り出されるなど七湯の効能が広く流布していった。1719年(享保四年)の木賀温泉の宿帳からは、多くの江戸の人々のほかに、広範囲な地域から湯治客が訪れていたことが知られる<sup>20)</sup>。



図2 江戸時代の箱根七湯図

(注) 箱根町立郷土資料館所蔵資料(2004)を転写・加筆。

## ②一夜湯治の成立と滞在の変容

文化文政期以降になると、伊勢講・大山講などの講集団が一泊だけ湯治(宿泊)する「一夜湯治」が行われるようになる。江戸後期に講や伊勢参りが盛んになると小田原宿などの宿場に泊まらず、温泉地に一夜湯治する旅行者が増加した。『七湯枝折』には伊勢講や大山参詣の道中に七湯に宿泊して賑わう様子が記されている<sup>21)</sup>。こうした賑わいは湯治場としての箱根と街道沿いの宿場としての小田原との争いを生むことになるが、湯本村の言い分が通り一夜湯治は公的に認められた<sup>22)</sup>。

街道沿いの湯治場において、一夜だけでの宿泊が認められることにより、長期滞在者以外の滞在者も宿泊できる体制が生まれ始める。講の集団は街道沿いの湯本だけではなく、他の七湯にも宿泊しており、こうした一夜湯治の成立した結果は、新しい箱根温泉湯治の登場でもあった<sup>23)</sup>。また、この時期には既

に日帰り入浴できる湯宿や立ち寄り入浴する旅行者が存在した<sup>24)</sup>。日帰りや、一夜限りでも、心身を解放する「楽しみ」のひとつとして、温泉に入浴することがあったことは興味深く、またそうした要望に答える施設が存在していたことは注目に値する。

## ③七湯の宣伝

こうした一夜湯治に表れるような観光的な宿泊形態に対応するように、十返舎一九は『道了権現箱根権現七湯廻紀行文草』(1822)、『箱根山七温泉江ノ島鎌倉廻近草鞋』(1833)といった庶民向けの作品を書き、『七湯枝折』などの地誌を織り込んだ案内本(図2)、人気浮世絵師による浮世絵、案内図などが刊行された。また、箱根に関する道中記類も流布した。こうしたなか、注目されるのが湯宿の主人に請われて広重が描いた『七湯方角略図』である。この浮世絵は中央に湯宿福住が書かれ、湯本より七湯への道程がかかっている。つ

まり特定の宿を中心とした宣伝図でもあり<sup>25)</sup>、案内図でもあるといえよう。こうした本は後に他の湯宿主たちにより続々と作成されたが、七湯への道程、各湯治場の湯宿が記載されるとともに、箱根を宣伝する文句が存在するなど、宿主たちが共同で宣伝を担っていたこともわかる。

また箱根七湯案内で、七湯の歴史、宿、温泉効能、名所旧跡、産物などを文章と絵により記した『七湯枝折<sup>26)</sup>』(1811)は、観光的要素を含んだ温泉案内となり、宿主が客の観覧に供するために湯宿毎で書写したり、来訪者が書き取ることにより、多くの異本が生まれた<sup>27)</sup>。また、後に版本になり流布していることから、観光案内本としても利用されていたと考えられる。こうした本が旅館に多く現存していることを考慮するならば、作成や流布に温泉地側が深く関わっていた可能性がある。このように、温泉地を描いた作品は、道中記類とともに宣伝、案内にもなり、旅行者の箱根における湯治への欲求を高めたと考えられる。

#### ④箱根七湯の「観光化」

このように江戸時代後期は、滞在の短期化と七湯に関する様々な情報が流通し始めた時期である。箱根温泉湯治について、病気専念型と物見遊山型があり、後期になるにつれて後者が普及することになった<sup>28)</sup>。大和田は、箱根に関する認識の変化を、①東海道經由の人々の温泉立ち寄りが増加し、「一夜湯治」でこれが公的に認められた、②病気療養が目的の滞在者が、期間中に箱根を散策し、その観光的要因を道中記類に記したことが、箱根の物見遊山の傾向を強め、次第に遊山目的の「湯治人」が多く来訪するようになった。こうしたなか次第に「七湯廻」と呼ばれる箱根周遊観光コースが整備されたと指摘している<sup>29)</sup>。

箱根温泉郷の主な「観光化」の要因として、江戸から近く東海道という主要な街道沿いに位置していたことが挙げられる。また時代が下るにつれ、日帰りや滞在の短期化が増加し

たが、それらの要望に答えるとともに、湯治場が積極的に宣伝を行い「七湯廻り」等の箱根独特の楽しみを作り出した。また周辺の遊樂地をめぐる周遊コースが存在したことも、湯治場だけではない魅力を作り出したことがあげられる。

### 3 滞在の多様化と旅の形態

#### (1) 滞在の多様化

江戸時代箱根における湯治場の様子や滞在生活中を記した史料を調査した『「湯治の道」関係資料調査報告書<sup>30)</sup>』(箱根町立郷土資料館、1997)には、145点の資料が存在する。そのうち温泉地に滞在していたのがわかる68の資料<sup>31)</sup>をもとに、元禄期まで(1700年)、文化期まで(1804年)、明治期まで(1867年)の3区分にわけ滞在の長短を調べた。その結果、時代が下るにつれ、短期滞在、中期滞在の割合が多くなることがわかる(表1)。

本来、温泉地での「湯治」は長期間にわたり、湯治場の料金等も廻り(7日)ごとに記されている事が多い。『七湯枝折』でも「木綿夜着老廻り 百五十文」「同ふとん老廻り 百文」など、「廻り」に応じた料金体制になっている。こうした長期滞在を支えるシステムは近代になっても維持された地域が多く見られる。

しかし、江戸時代の箱根温泉は、滞在の人々が長期に過ごすことを可能にする一方で、短期宿泊者の増加にも対応していた。こうした短期宿泊者の滞在の仕方は多様であった。東海道を利用する講の復路において箱根で2泊

表1 箱根七湯滞在者の滞在期間

年代	短期 1～3日	中期 1廻程度	長期 2～3廻程度	期間不明
元禄期末まで (1700)	1	—	5	1
文化期末まで (1804)	5	1	3	1
明治期末まで (1867)	29	12	7	3

(注)『湯治の道』関係資料調査報告書』より筆者作成。

して疲れをいやす事例も複数知られており(『道程鑑：1847』)、交通の便の良さと温泉地という利点を生かした利用法がなされていた。また鎌倉行などの周遊ルートの道中として七湯を2泊3日訪れたり(『箱根温泉湯治ノ件 江ノ島・鎌倉・金沢順廻：1859』)、宿泊者ではないが「花の盛りを見んと<sup>32)</sup>」箱根に日帰りで訪れ、宮ノ下にて「湯あみして、そこそこに立出て」(『函山紀行：1832』)など入浴して帰宅する事例もあった。こうした事例は「此村内に松坂屋、鶴屋などいふ湯亭あり。松坂屋に浴して<sup>33)</sup>」(『木賀の山踏：1835』)などにも見られ、他の宿に立ち寄れるなど様々な利用形態が存在したと考えられる。このように時代が下るにつれ箱根温泉郷では宿の対応もすでに長期、短期、休憩利用に対応できる体制が整えられていった。

## (2) 道中の立ち寄り先

もともと江戸周辺に居住している人々にとっては、関所を通らず遊びに行ける江ノ島・鎌倉・金沢(相州)などが人気の遊覧地であった<sup>34)</sup>。こうした近隣の遊覧地と街道沿いの温泉地がセットになったのが、先の「箱根山七温泉江之島鎌倉廻」である。次第に箱根温泉は、湯治と江ノ島・鎌倉めぐりがセットになっていった<sup>35)</sup>。

しかし箱根の道中記などを分析すると、鎌倉などの寺社参詣以外にも、熱海、伊豆などの他地域の温泉地を訪れている場合が見られる。先述した『「湯治の道」関係資料調査報告書』で温泉地に滞在していたのがわかる68の資料を調べたところ、52件が遊覧拠点や他の温泉地にも訪れていたことが明らかになっている(表2)。

こうした湯治+物見遊山という構図は、短期、中期、長期滞在ともにみられた。また、温泉案内においても他の温泉地を紹介する事例が見られる。『道了権現箱根権現七湯廻紀行文章』では、「伊豆の温泉」という項目があり「走湯ハ小田原より五里半あり<sup>36)</sup>」という文章で始まり、熱海などについて湯宿も

表2 箱根七湯道中における立ち寄り先

場所	件数
鎌倉	11 (内3件は熱海にも滞在)
熱海	7 (内2件は伊豆にも滞在)
伊勢参り	伊勢 24 件
その他	三島・伊豆 3 件 見延・大山 2 件 関西 4 件、他 1 件

(注)『「湯治の道」関係資料調査報告書』より筆者作成。

含めて紹介している。これは一箇所の温泉地にだけ滞在するのではなく、より広範囲な温泉地を含んだ旅行形態が存在していたことを示している。

## (3) 旅の形態

以上見てきたように江戸後期の箱根における滞在者の利用は多様であり、大和田は箱根の来訪者を「旅の途中の一通過地点」、箱根以外の旅が目的の途中での「箱根温泉への立ち寄り」、湯治目的で長期滞在に訪れる「箱根温泉を目的とした滞在地点」の三つの来訪タイプを指摘している<sup>37)</sup>。これをより詳細に分類すると下記が指摘できる。

### ① 「旅の途中の一通過点」

東海道等を利用する際の通過地点であり、温泉地に滞在はしないで通過する。そのため、温泉入浴等はおこなわない。

### ② 旅の途中地点としての温泉地(「箱根温泉への立ち寄り」)

旅行者が伊勢参り、京阪に行くために東海道を利用して、箱根付近を通過する際に滞在する。その場合は宿泊を含む場合と含まない場合が存在する。

#### \* 宿泊を伴う

いわば通過地点として、宿場代わりに休む例がみられる。その最たる例は「一夜湯治」であろう。その他に伊勢参りの復路において、箱根で2泊する例も存在していることから、長い旅の疲れを癒す役割が存在した可能性がある。



#### \*休憩のみ

宿で休憩をとり入浴や食事をとることのみ行う。

#### ③ 周辺観光地コースの湯治場（「箱根温泉への立ち寄り」）

江ノ島・鎌倉・金沢などの寺社参詣は当時の遊覧スポットであり、そうした遊覧地と組み合わせた温泉地としての温泉地利用。

#### ④ 温泉郷内における周遊温泉地（「箱根温泉を目的とした滞在地点」）

近接して複数の温泉地が立地していたため、温泉郷内の各地域を周遊しながら複数の温泉地に滞在、もしくは一カ所に滞在して温泉郷内を周遊した。

#### ⑤ 広域温泉地における温泉地（「箱根温泉を目的とした滞在地点」）

伊豆・熱海を含めた広域が湯治場として利用されていた。この際は、長短の差はあるが広域的に温泉地を変えて中長期の湯治を行っていた。

## 4 集合型温泉地としての箱根温泉郷

### (1) 集合型温泉地

江戸後期の箱根温泉郷への旅の形態は多様であったが、滞在行动も多様であった。温泉地は、琴、酒宴、囲碁など華やかで都市的な遊びや、雪見、蛍狩り、釣り、名所散策などの牧歌的な遊びが存在し、それらをコンパクトに楽しむことができた。こうした魅力が長期滞在を「飽きのこない」ものとしていたとともに、温泉地を固有化し、吸引力を増すことにつながったと指摘されている<sup>39)</sup>。箱根温泉でもこうした事例は見られるが箱根温泉郷で興味深いのは、滞行者が滞在している温泉地だけではなく、『七湯廻』といわれる異なる温泉、景観、名所をもつ七湯を廻る行動であろう。

塔ノ沢に滞在していた藤本由己は、箱根の山上をみるため「塔沢をいづ坂道を右の方へ

下り手湯本に入、即温泉の地なり<sup>39)</sup>」（塔沢紀行：1694）と湯本に入り、地藏堂、曾我堂などを見学して記述している。このような温泉郷をめぐる滞在行动を助けたものの一つが、流通していた案内本等であった。『七湯枝折』が宿等で写本されて流通されていることは、そうした事情があった。また「この奈らやにて七湯の絵図商へるなれば、それを求めつゝそれより堂ヶ島にいたりあちこちと見廻りぬ」（『木賀の山踏』）と宿で案内図を購入して、七湯の名所を巡れたことも七湯廻りを容易にしていたと考えられる。

以上のように、箱根温泉郷は先述した『七湯廻』といわれる七湯を廻る人気コースが存在しており、相互1～4キロ程度に存在する温泉地が集合する温泉郷を廻る楽しみが存在していた。つまり半日程度で移動でき、名所巡りなどの日帰り散策や、宿泊が可能な温泉地が複数存在し、一つのルートを形成していたといえる。こうした温泉地は「集合型温泉地」としてとらえられる。

### (2) 集合型温泉地における滞在行动

温泉地における滞在行动を考えると、温泉地の持つ空間的な特性を無視することはできないだろう。「集合型温泉地」は、その空間構成ゆえ、事例を調査するといくつかの滞在型があることがわかる。

#### ① 拠点滞在型（一つの温泉地に滞在し、そこを起点に周辺を回遊するタイプ）

拠点滞在型において滞行者は、温泉地の一カ所に滞在するが、滞在中の折々に散策に出かけたり、遊覧を楽しんだりする滞在である。温泉入浴＋遊覧（観光）・休養行動が中心となる滞在行动である。『木賀の山踏』（1835）を記した小田原藩士江戸詰の川上文治義孝は、20日間の木賀温泉滞在中に日にちを変えて底倉、芦之湯、堂ヶ島、宮ノ下など七湯を巡っている。また湯に入るだけではなく「あすは箱根こんけん（権現）へ詣て、亦芦の湯にも入らんときのふ小山ぬしと約し置かぬ」と箱根権現のともに、芦之湯に入ることを企

画している。ほかにも石仏、小地獄、早蕨つみなどを行っている。互いに接した徒歩圏内に七つの効能の異なる温泉があり、各湯めぐり、その周辺にある名所を見て回り、宿を中心に放射状に観光していたことがわかる。このよう徒歩の回遊ルートの拠点が温泉宿になる点が共通している。滞在者は基本的に一つの宿に滞在して、各共同湯や温泉地、時には案内人を頼み周辺の名所、寺社等をめぐり、宿を起点として放射状に回遊していたのである。

② 回遊滞在型（複数の温泉地に滞在し、地域を幅広く回遊するタイプ）

これは、滞在先の温泉地を変更しながら、結果的には中、長期滞在するタイプである。つまり、滞在期間は長い、一カ所のみで滞在する型といえよう。

七湯廻りの典型としてしばしば指摘されるのは、浮世絵師の安藤広重一行が行った箱根来遊である。これには湯本の旅館で宿泊し、塔ノ沢で遊び、七湯の湯治場を廻りながら芦之湯にでて、東海道を利用して再び湯本に戻るコースであり、まさに物見遊山の旅だと指摘されている<sup>40)</sup>。こうした七湯廻りは、案内本の題名ともなり七湯廻りを行う人々のガイド本になっている。例えば『道了権現箱根権現七湯廻紀行文書』は、七湯の温泉を湯本、塔ノ沢、堂ヶ島、宮ノ下、底倉、木賀、芦之湯の順で効能、湯宿数などを記している。同じく十返舎一九『諸国道中金の草鞋』の「箱根山七温泉江之島鎌倉廻」では、箱根山権現→芦之湯・木賀→底倉・宮ノ下→堂ヶ島・塔ノ沢→湯本というルートで主人公達が箱根温泉をめぐる。実際に清水浜臣は芦の湯から帰宅する際に、「宮城のへて、木賀・底倉・宮之下、堂ヶ島、塔のさわのいて湯ともめぐりする<sup>41)</sup>」と芦の湯を出発し湯本（宿泊）に到着するまで七湯を廻っている（函嶺日記：1814）。

七湯をめぐる複数のルートは、温泉地における「遊興」の一つのコースであった<sup>42)</sup>。

そのため宿泊箇所を変更しながらコースを回る場合も存在する。湯本（往路1泊、復路3泊の計4泊）、芦の湯（9日泊）、宮ノ下（7日泊）と温泉郷内の宿泊地を変更しながら各地の名所を巡る事例も見られる（箱根之日記：1853）。

これらのほかに箱根以外の温泉地と組み合わせられる場合も存在する。こうした旅行者の一人として、沼田藩士の原があげられる（玉匣両温泉路記：1839）。江戸詰の原は、主人から30日の暇をもらい4月14日江戸を出発してから、翌5月9日に帰京するまで熱海（9泊）、箱根（9泊）、鎌倉等（4泊）をかけて周遊している（表3）。少々長いが紀行文の冒頭の言葉を引用してみよう。「おのれ気のぼる病ありて、頭いたみ目を煩ふこと年久し。」と病気に悩んでいたところ、知人に病に効くと熱海の湯と箱根の湯を勧められた事が湯治の発端で有ると記している。原の旅は、病を治したいという長年の願いを叶

表3 『玉匣両温泉路記』（1839）にみる原の行程

日にち	入浴以外の主な行動
4月14日	江戸発
15日	藤沢で西行庵などを見学
16日	熱海着、宿の決定
17日	湯もとの間欠泉を見学
18日	物売りがくる、宿主に飲用の問答
19日	一日中湯浴み
20日	伊豆権現参詣・走り湯の滝湯に入浴
21日	案内を頼み湯前明神参詣
22日	長歌を詠む
23日	綱引と紙すきを見学
24日	宿主に明日箱根に発つとつげる
25日	名所・旧跡を見学しながら木賀に到着
26日	宮ノ下に宿を代える
27日	挽物細工、果物売る女が折々訪問
28日	役人が宗門改めに来る
29日	近隣の社に参詣、土産屋に立ち寄る
5月朔日	堂ヶ島に行く・連れは釣りに
2日	案内を頼み三里離れた最乗寺を見学
3日	湯治に来ていた美人が話題になる
4日	帰宅を決心し、宿主等に告げる
5日	出発、湯本で早雲寺を見学
6日	江ノ島にて名所旧跡を見学
7日	鎌倉にて名所旧跡を見学
8日	金沢八景にて案内をたのみ見学
9日	江戸に帰京

（注）『玉匣両温泉路記』により筆者作成。

えたものだが、温泉地滞在中の活動の様子に驚かされる。原は表に記載された以外に折々に温泉入浴し、その効能を書き留めるなど湯治について無関心ではない。こうした原の活動的な様子から、病はさほど重傷ではなく、旅に出ること自体が一種の転地療養であったともいわれるが<sup>44)</sup>、当時の「湯治」の滞在行动の幅の広さを感じさせる。

以上のように回遊型において滞在者は、一つの滞在地で過ごすのではなく、複数の滞在型温泉地において、「拠点滞在型」の過ごし方をしながら滞在中。その場合温泉郷内における滞在型と、より広域的な温泉地域のなかにおける滞在型が存在した。

### ③ 一点滞在型（宿のなかで療養タイプ）

一点滞在型は特定の温泉地が生活の中心であり、滞在中は周辺の名所なども見て回るが、基本的には入浴と宿での休息を中心として過ごす。温泉入浴＋療養・保養が滞在行动の中心である（『懐堂日暦：1833<sup>45)</sup>』）。こうしたタイプにおいて滞在中は、体調が悪く外出できない場合に宿の主人から書物を借りる（『懐堂日暦：1833』）、人々との交流を持つなどをして過ごすことがみられる。また将棋を打つ場面が見られたり（『七湯枝折』）、様々な人が<sup>46)</sup> 部屋を訪ねてきたりと、室内で過ごす仕組みが存在していた。これは体調が悪い場合のみならず悪天候の時にもみられる。

温泉地は、元来種々の話が耳に入る情報交換の場の場であり<sup>47)</sup>、長期にわたり同じ空間に滞在する滞在中にとり、情報交換は楽しい時間であったようだ。こうした情報交換を示す史料として先述した先述した『七湯枝折』等の「書物」が存在する。堂ヶ島の大和屋では、主人等から書物を借りた滞在中者が書き写した『堂ヶ島温泉由来：1833』、『温泉場逗留中の記：1854』が、各地へ持ち帰られている。また後者を記した武蔵国入間郡赤尾村名主の林信海<sup>48)</sup>は、当時の大事件であるペリー来航、ジョン万次郎の物語に書かれた珍しい外国の名前や、風俗などを書き写している（表4）。このように多様な地域から人々が集まり、情報を話す機会の多い温泉地では、当時の新しい情報も得ることができた。特に東海道の位置した箱根には多くの情報が集積しやすかった可能性がある。こうした多様な情報が宿で収集できたほか、『七湯枝折』に将棋指す場面、本を読む人、貸し本屋が存在したことは<sup>49)</sup>、外出せずとも室内で過ごせる仕組みが存在したといえよう。滞在中において、その拠点となる宿は大きな意味を持つことになる。また、滞在中は天候や体調によっては入浴以外の時間を宿で過ごすことも多いため、宿でのいかに時間を過ごすかが重要となろう。

表4 林信海『温泉場逗留中の記』嘉永七（1854）年に記述された主な内容

事項	滞在中生活	温泉地の歴史	時事・他地域の出来事	湯治の出来事
滞在中に写筆筆録した内容	温泉効能 入浴方法	堂ヶ島の歴史 名所の説明 宿主の来歴（聞き書） 豊臣秀吉禁制等（底倉） 二宮金次郎の伝記 （塔ノ沢逗留時の提言）	ペリー来航（1853） ジョン万次郎物語 雨降神社の震災被害（1853） 小田原藩の地震被害（1853） 小田原藩の御触書（1818） 円通寺村の状況（聞き書）	地図（筆記） 箱根迄の里数 滞在中の悪天候

（注）『温泉場逗留中の記上』（1854）：狭山古文書勉強会（2004）より筆者作成。

## 5 むすび

箱根温泉郷は、名所見学などの日帰りや宿泊が可能な温泉地が近接して七つ存在し、そ

れらを訪問することが温泉地の楽しみとして存在していた。各温泉地を周遊するコースなどが存在するなど、複数の温泉地が一つの枠

組みの中で受け止められていた温泉地は「集合型温泉地」であった。

こうした集合型温泉地における滞在行動としては、①拠点滞在型（一つの温泉地に滞在し、そこを起点に他の温泉地を含めた周辺を回遊するタイプ）、②回遊滞在型（複数の温泉地に滞在し、地域を幅広く回遊するタイプ）、③一点滞在型（宿のなかで療養タイプ）が存在した。なかでも②の回遊滞在型は、温泉郷内を回遊するものと、広域的温泉地域を回遊するものが存在していた。

箱根温泉郷のような、複数の温泉地が集合している温泉地は、温泉地としては多数派ではない。しかし、多様な滞在型が求められる今日において、温泉地の特徴を生かした温泉郷内の回遊性は注目し値する。また今日の交通の発展を生かし、温泉郷内にとどまらない他の温泉地域も含めた広域的な回遊滞在型は示唆的であろう。

#### 注・参考文献

- 1) 八隅蘆庵が旅行の心得を書いた書物。桜井正信監訳（1993）：『旅行用心集』八坂書房、253頁。  
以後『旅行用心集』はすべてこの本による。
- 2) 山村順次（1998）：『日本の温泉地—その発達・現状とあり方』日本温泉協会、234頁。
- 3) 小堀貴晃（2006）：「保養温泉地の地域的展開」山村順次編、『地域社会の構築』同文館出版、49～68頁。
- 4) 武井裕之・渡辺貴介・安島博幸・天野光一（1989）：「江戸・明治期における温泉地の長期滞在の構造に関する研究」都市計画論文集、24、385～390頁。  
下村彰男（1993）：「わが国における温泉地の空間構成に関する研究（1）—近世後期から明治にかけての温泉地の空間構成」東大農学部演習林報告、90、23～95頁。  
リゾートは「暇を過ごすために繰り返し訪れる長期滞在に適した空間、レクリエーションの機会や豊かな自然環境に恵まれた上で、日常生活を支える都市的機能も備わった場所」（安島博幸ほか：1990）であり、長期滞在ができる環境、仕組みが存在した近世後期の温泉地はリゾートの原型と指摘。
- 5) 石川理夫（2008）：「箱根七湯」における歴史的「惣湯」について」温泉地域研究、10号、29～41頁。
- 伊藤潤（1999）：「講座・生活文化史 温泉の歴史—近世江戸時代の箱根温泉」。
- 岩崎宗純（1979）：『箱根七湯・歴史とその文化』有隣堂、199頁。
- 岩崎宗純（2002）：『箱根路歴史叢策』夢工房、129頁。
- 大和田公一（1999）：「道中記類資料に見る近世箱根の遊覧について」地方史研究協議会編、『都市・近郊の信仰と遊山・観光』237～257頁。
- 6) 前掲5) 大和田（1999）、237～257頁。  
布山（2009）は江戸時代の温泉地は地域差があるが、比較的著名な温泉地の大部分は湯治あるいは保養と歓楽の併存型であったと指摘している。  
布山（2009）：『温泉観光の実証的研究』お茶の水書房、3～7頁。
- 7) 内田彩（2009）：「近世の箱根七湯における観光化と観光者の行動についての一考察」立教大学観光学科紀要、11号、23～30頁。
- 8) 史料を観光行動の調査事例として、旅の行動特性を明らかにした橋本（1997）など。橋本俊哉（1997）：『観光回遊論—観光行動の社会工学的研究—』風間書房、361頁。
- 9) 前掲4) 武井ほか（1989）385～390頁。
- 10) 新城常三（1973）：『庶民と旅の歴史』NHKブックス、213頁。
- 11) 山村順次（2007）：『日本における温泉地の発達と温泉地域社会の構築』地理、17頁。
- 12) 前掲4) 武井ほか（1989）、385～390頁。
- 13) 前掲4) 下村（1993）、57～61頁。
- 14) 内田彩（2007）：「江戸時代後期の湯治場における交流」第13回観光に関する研究論文、財団法人アジア太平洋観光交流センター、49～50頁。
- 15) 「箱根の温泉は江戸より二十余里にして、御閑所手前なれば、格別道路の險阻もなく、都下の老若男女湯治するにむつかしき事もなく」、前掲1) 204頁。
- 16) 箱根温泉の案内書『七湯枝折』（1811）には、湯本11軒、塔之沢4軒、堂ヶ島5軒、宮ノ下5軒、底倉4軒、木賀3軒、芦之湯6軒と記載されている。箱根町立郷土資料館（2004）：『七湯枝折』箱根町郷土資料館、115頁。以後『七湯枝折』はすべてこの本による。
- 17) 七湯すべてに「惣湯」が存在していた。前掲4) 石川（2008）、32～37頁。
- 18) 1653年～81年に5回記事が見える 前掲5)

- 伊藤 (1999)、42～43 頁。
- 19) 江戸時代の献上湯は計 7 回確認 前掲 5) 伊藤 (1999)、44 頁。
- 20) 相模・武蔵・房総と南関東一円、さらに郡内 (山梨)、三島等。前掲 5) 岩崎 (1979)、69～71 頁。
- 21) 「伊勢講のむれ五十・六十つどい来りてきそひウ宿り」、32 頁。
- 22) 一夜湯治には前掲 5) 岩崎 (1979) 108～118 頁、前掲 5) 伊藤 (1999)、48～49 頁に詳しい。
- 23) 前掲 5) 岩崎 (1979)、118 頁。
- 24) 前掲 5) 岩崎 (2002)、76～78 頁。
- 25) 前掲 5) 岩崎 (1979)、138 頁。
- 26) 文窓、弄花が、温泉が遊興目的になっていることに憤りを感じ、湯治としての本来の温泉利用の手引きとするために記したが実際には観光的要素を含んだ温泉地案内の側面が大きかった。
- 27) 箱根町立郷土資料館 (1997) : 『「湯治の道」関係資料調査報告書』(株) アルファ、120 頁
- 28) 病気に専念する型、物見遊山を目的とする型。前掲 5) 岩崎 (1979)、120～121 頁。
- 29) 前掲 5) 大和田 (1999)、252～254 頁。  
なお大和田によると天和 4 年 (1618) には後の「七湯廻」に類似した周遊が行われていた。246 頁。
- 30) 『湯治の道』関係資料調査報告書』は、江戸時代を中心に 145 点の箱根の温泉に関する資料を収集し、書名、著者、年代、内容の要約を記載。
- 31) 江戸時代の箱根温泉郷に 1 泊以上滞在、入浴した事例のみ取り扱った。なお、年代不明や同じ箱根でも宿場である「箱根宿」は温泉もなく、宿場という機能を持った場所であるため対象としなかった。また、同一資料のなかで時期を変え、複数箱根に訪れた場合も数えている。
- 32) 小田原藩家老大久保又右衛門が花の盛りを見に出発し、芦の湯で東光庵主を訪問、復路は底倉を経由して宮ノ下で入浴後帰宅している。神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会編 (1969) : 『神奈川県郷土資料集成』、6、紀行編相模国紀行文集、429～433 頁。
- 33) 「此村内に入ると硫黄の匂ひ殊に強くして難儀なり。ここにも亀屋、松坂屋、紀伊国や其外にも湯亭四五けん有。予は亀やにて暫し足を休め」412 頁。  
神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会編 (1969) : 『神奈川県郷土資料集成』、6、紀行編相模国紀行文集、399～428 頁。以後の『木賀の山踏』はすべてこの本による。
- 34) 今野信雄 (1986) : 『江戸の旅』岩波書店、98～102 頁。
- 35) 箱根町立郷土資料館 (1997) : 「湯治の道」関係資料調査報告書。(株) アルファ、120 頁。
- 36) 神奈川県図書館協会郷土資料委員会 (1972) : 『相模国紀行文集』、250～256 頁。
- 37) 前掲 5) 大和田 (1999) 240～243 頁。
- 38) 前掲 4) 武井ほか (1989) 385～390 頁。
- 39) 神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会編 (1969) : 『神奈川県郷土資料集成』、6、紀行編相模国紀行文集、363～375 頁。以後の『塔沢紀行』はすべてこの本による。
- 40) 前掲 5) 伊藤 (1999)、51 頁。
- 41) 箱根町立郷土資料館 (2002) : 「清水浜臣『函嶺 (箱根) 日記』校注』館報、18 号、19～20 頁。
- 42) 前掲 5) 大和田 (1999)、240～243 頁。
- 43) 板坂耀子編 (1987) : 『江戸温泉紀行』平凡社、127～228 頁。以後の『玉匣両温泉路記』はすべてこの本による。なお、原は本文中の和歌より 50 才近いことが推測されている (板坂 : 1993)。
- 44) 神崎宜武 (2004) : 『江戸の旅文化』岩波書店、212 頁。
- 45) 儒学者松崎慊堂は、計 5 回箱根温泉に湯治に来訪している。4 回目の 1833 年 (天保 4 年) では、体調不良のため宿の主人から古文書などを借りながら 1 週間ほど宿で過ごし、体長回復後に堂ヶ島に遊び旅立っている。山田琢校注 (1970) : 『慊堂日曆 3 巻』、平凡社、331 頁。
- 46) 原自体は周遊型観光であるが、滞在中に「挽物細工うる女、もちひ・くだものなどうる女、をりをりと (訪) ふばかりにて、けふもくれぬ」等、宿に商人や地元の人々が訪ねてきたと記している。
- 47) 板坂耀子 (1993) : 『江戸の旅と文学』ペリカン社、317 頁。
- 48) 林は、長女の病気療養のため木賀温泉に 2 泊した後、堂ヶ島にて 37 泊過ごしている。滞在中は芦の湖や箱根権現を訪問したほか、作歌、朝から夜まで書籍など熱心に写筆筆録を行っている。水野恵子 (2006) : 「林信海の箱根旅行記について」言語と交流、9 巻、1～10 頁。
- 49) 前掲 5) 岩崎 (1979)、129 頁。

# 飯坂温泉における空間の変化と場所のイメージ

## On the Changes of the Space and the Image of the Place in Iizaka Spa, Fukushima Prefecture

井上 晶子\*  
Akiko INOUE

キーワード：飯坂温泉 (Iizaka spa)・中心性 (centricity)・イメージ (image)  
魅力 (attraction)・観光客 (tourist)

### 1 はじめに

#### (1) 研究の背景

最近の観光地選択についての調査結果では、「行ってみたい観光地のタイプ」の1位が温泉旅行 49.2%<sup>1)</sup> (1999年 54.3%)<sup>2)</sup> であり、「宿泊観光の旅先での行動」は、1996年以來「温泉浴」が1位を占めている (2008年 50.9%)<sup>3)</sup>。温泉地数は年々増加し (1963年 1,518、2004年 3,114)<sup>4)</sup>、観光客の温泉志向には根強いものがある。

このように観光客にとって目的地選択に当たっての温泉地の位置づけは高く、又観光地にとっても温泉は重要な観光資源であるが、温泉利用の延べ宿泊者数は、1996年の1億4,316万人をピークに2004年は1億3,586万人と漸減傾向にある<sup>5)</sup>。

宿泊者数の減少は、いわゆる「歓楽温泉地」と称される温泉地に多く見られ、その要因として、道路交通網の整備により立ち寄り地あるいは日帰り地化、観光客の形態の変化、大型化した旅館の顧客対応のあり方などがあげられている<sup>6) 7) 8)</sup>。

男性を中心とする団体客が押し寄せた歓楽温泉地の実態とイメージは、女性客や小グループ客から敬遠され、1980年代の半ばからの温泉ブームでは、露天風呂、懐石料理、高級和風旅館が、続く「秘湯ブーム」<sup>9)</sup>では鄙びた場所が求められるといった温泉観光客

動行の変化につながったといえよう<sup>10) 11)</sup>。

高度経済成長期、バブル経済期の温泉施設の増加、大型化、従来温泉街が持っていた諸機能の内部取り込みなどによって温泉地の空間構造の変化が生じ<sup>12)</sup>、さらに、バブル崩壊によって経営難に陥る旅館が続出したことで、なお温泉街の賑わいが失われるといった経緯も見られる。

観光客は、様々なメディアを通し予め訪問地に対するイメージを持っているが、これらは外から与えられたいわば社会的に記号化された場所のイメージである。

温泉地の魅力は、絶対的な価値を持つ温泉資源に加え、観光客が訪れた場所の状況からどのような意味を読み取るかによって作られる個人イメージによるものと考えられる。観光客現象の変化に直面した各温泉地では、再生に向けての努力がなされ、地域の個性と特徴を生かすことで成功している場所も多くあるが、数々のイベントを試みても集客に結びつかず苦戦している温泉地もある。

こうしたところでは、変化の過程で生じた現象が、観光客にはどのような意味を伴った姿として捉えられることになるのか、観光客の視点に立ち、「この場所」の持つ意味を明らかにすることからの対応が求められているのではないかと考える。

\* 立教大学大学院 (Graduate School of Rikkyo University)

## (2) 研究の目的と方法

本研究は、温泉地の観光地化と盛衰に関する研究の一環として行うものであり、湯治場から歓楽温泉地となり、近年では観光客が減少し続けている福島県飯坂温泉を研究対象地とした。

時代の変化に伴う社会的、経済的要因が盛衰と深く関連することを踏まえた上で、当該地が観光客にどのような「場所の意味」を伝えているのかとの観点から、魅力が失われる要因を明らかにすることを目的とする。

方法としては、温泉地観光地の空間を構成する諸要素のうち、主たる要素の一つである旅館立地に関する変化の特徴を明らかにし、この変化が、他の要因と関連して、観光客にはどのような空間として捉えられるかの分析を行う。合わせて、現在行われている再生の取り組みが内包する意味について考察する。

資料としては、過去の資料や統計的資料が十分に入手できなかったことから、数値的なものも含めて、主として、明治、大正、昭和に発行された飯坂温泉関係の案内書等を資料として使用した。また、関係機関、関係組織、関係者への聞き取り調査、現地観察によって、実情・実態の把握を行った。

## 2 飯坂温泉の変遷と現況

### (1) 歴史

飯坂町は、1955（昭和30）年、伊達郡湯野村と信夫郡飯坂町が合併して誕生し、1964年に、福島市と合併して現在に至る。旧飯坂町は2009年現在の人口は22,654人であり、面積は福島市の約40%を占める広範な区域である。

飯坂温泉は摺上川が福島盆地に出る谷口の河岸段丘上に位置し、右岸の飯坂地区、左岸の湯野地区、2km上流の穴原（左岸）・天王寺地区（右岸）を総称して飯坂温泉と呼ぶ。

福島駅から、飯坂線で約20分の位置にあり、東北三大温泉の一つとされている。

### ①江戸時代（湯治場）

温泉の開湯時期は不詳であるが、鯖湖湯には日本武尊が東征の折に入湯したとの伝承が残され、古い歴史を持つ。

1689（元禄2）年、松雄芭蕉がこの地を訪れ『奥の細道』に記録が残されている。1703（元禄16）年の定書では、「遊女一切抱置申間敷事」「湯治之者不及申博奕諸勝負一切仕間敷事」「宿賃多取も申間敷事」などが記されており<sup>13)</sup>、湯治場としての賑わいがうかがえる。

江戸時代には鯖湖湯（西暦110年頃）、透達湯、箱湯（789年の説）、滝の湯（1340年頃）、赤川湯（1812年）、信濃湯（1812年）、小坂湯、金滝湯（1817年）など多くの湯があったとされている。

### ②明治期（療養・保養と慰安・遊楽）

1876（明治9）年福島に県庁が置かれ、福島市の奥座敷として、にわか旅館が繁盛し、外湯を利用して木賃宿も次第に内湯旅館へと変化した。

1888年、町の大部分を消失する飯坂大火に見舞われ、再建に当たっては、鯖湖周辺にあった遊郭を現在の若葉町に移し、以後若葉町周辺が「高楼空中にそびえ管弦の声洋洋として耳底に達するは……」と表現されるような賑わいを見せた<sup>14)</sup>。

摺上川兩岸に面した三層、四層の建物が醸し出す風情、四季を通しての自然の美しさ、川遊び、魚釣り、舟遊びなど多くの浴客が訪れる温泉地であった。また「劇場・割烹店・写真師・遊戯場……」などを点綴して、市街の一局は一種特別なる温泉の繁華の側面を示し……<sup>15)</sup>の遊興の側面と同時に、「日露の役第二師団この地を相し傷病兵転地療養地に指定するや我兵士の来て病を養う者数千……」と記される<sup>16)</sup>医療・療養の地でもあった<sup>17)</sup>。森鷗外（1882年来訪）、正岡子規（1893年）、与謝野晶子夫妻（1911年）をはじめ、大正・昭和の時代には、竹久夢二、若山牧水、佐藤春夫、泉鏡花、宮本百合子<sup>18)</sup>、さらにはへ

レンケラー、吉田首相、皇族など、多くの文人、著名人もこの地を訪れている。

### ③大正期・戦前（歓楽・享楽温泉地<sup>19)</sup>）

大正初期に当地を訪れた田山花袋の「温泉めぐり」には、遊楽に富んだ温泉地であることが記されており<sup>20)</sup>、昭和初期の旅行情報誌からも<sup>21)</sup> 福島市の奥座敷として、また遠隔地からの湯客により歓楽温泉街として賑わっていたことが伺える。

1907年、福島と湯野間に軽便蒸気軌道が敷かれ、1924（大正13）年には福島と飯坂（花水坂）間に電車開通、上野からは10時間足らずとなった。

1915年、伊達郡湯野村と信夫郡飯坂町を結び飯坂の大動脈となる十綱橋が竣工、現存する大正期の鋼アーチ橋で最も古いものの1つとして知られている。

明治末の河川洪水に端を発する温泉の枯渇問題は昭和30年代末まで続く。各旅館の自掘の増加は問題を深刻化させ、湯野・飯坂地区間、旅館間に多くの抗争を引き起こした。

### ④戦後（観光温泉地・宿泊基地と歓楽<sup>22)</sup>）

1944（昭和19）年、湯野から始まり対岸にまで広がった大火のあと、それぞれの旅館は防火中心の建物に切り替えた。現在の形態の始まりである。

1959年の吾妻磐梯スカイライン開通、1960の東北本線上野福島間の電化、1982年の、東北新幹線開通など、相次ぐ交通の変化に伴い団体観光客が急増した。

これら観光客への対応として旅館数が増加するとともに、7階、8階建てのビルに変身し、バス・トイレ付、冷暖房完備、駐車場・娯楽設備完備の近代化された旅館やホテルを名乗る旅館になっていった。

大型バス到着の都度、花火が各旅館で上げられ、町の通りは人の混雑で歩けないほどの最盛期を迎えた。当時は300人を超す芸妓がいたという。

1967年には飯坂の代表的老舗旅館の跡地に外部資本のチェーン旅館が進出し、派手な

テレビCMで話題を呼ぶ。

金・土曜日の仕事を終えてから東京やその周辺を発ち、夕方宿に着くと大宴会を行い、翌日はスカイラインの景色や周辺観光地を回って帰るパターンで、温泉のある観光地の感が強い状況となった。

バブル経済の崩壊と共に次第に客足が遠のき、廃業の旅館や土産物店が増え始める<sup>23)</sup>。

## (2) 現況

飯坂温泉は、『湯治場でありながら通俗的な意味での「観光」が絡み合い、次第に歓楽を志向した観光温泉地として発展していくようになる』経過をたどった典型的な温泉地であり、『人々が集まるようになり、温泉の医薬的効果や保養という面にあわせて歓楽という面においても発達した……旅館に「湯女」が存在し……』<sup>24)</sup>と表現し得る温泉地でもある。

現況は「飯坂町地域再生計画（2005）」に「……観光客、宿泊客は減少してきており、昭和40年代の最盛期には……活況を呈してきたものですが、現在は往時の面影は薄れ、廃業などによる空き旅館が点在し、2003年には旅館数64軒と激減し、観光客は101万人まで減少してきており、これらの後退状況に対し、歯止めをかけるには至っていない状況にあります」と記されている。観光客の減少、旅館の減少、及びこれらへの対応の面から、「衰退の経過」をたどっている観光温泉地といえる。

現在は、鯖湖を始め8カ所の共同湯を持ち（別の1カ所は、現在再建中）、市管理下にある鯖湖湯を除く7カ所が財産区管理となっている。日帰り客に加えて、地域住民に多く利用されているが、管理・資金面の問題を抱えている。

### ①観光客数の変化

観光客数の変化と、各時代の特徴的な出来事を図1に示す。

観光客数は、1959年の吾妻磐梯スカイラ



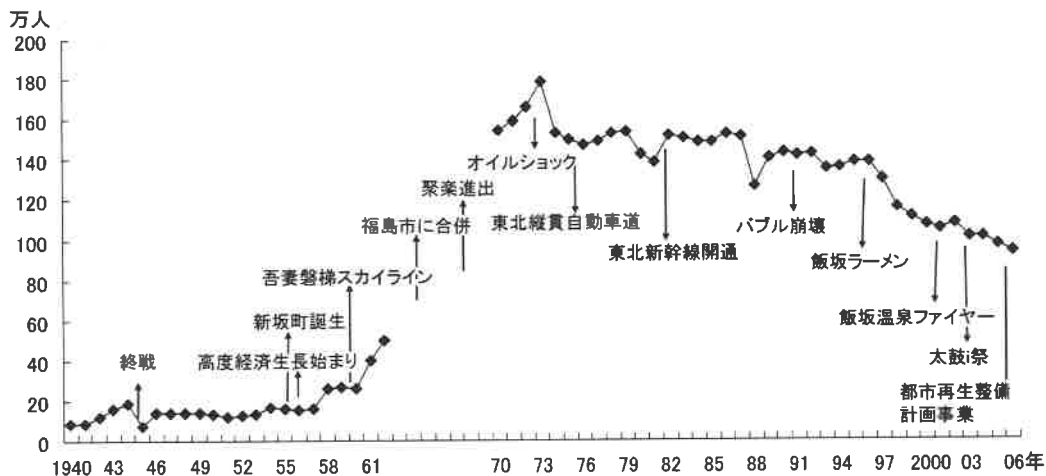


図1 飯坂温泉の観光客数の変化(1940～2006年)

(注) 1940～1961年は大鳥城記余録による内湯利用者数。1970～2006年は飯坂温泉観光協会資料より筆者作成。

イン開通を境に急増し、1973年をピークに減少傾向となり、1985年からは減少の一途をたどる。

2006年の観光客数は、ピーク時の約52%となっている。また、減少が始まるのはオイルショック(1973年)、およびバブル崩壊時期(1990年代初頭)とほぼ一致し、増減の背景には交通網の変化、社会経済的な変化があることが伺える。

宿泊者数は、2001年の90万人から2006年77万2,000人へと減少の一途にある。

様々なイベントが行われているが、外からの観光客数の増加にはつながらない。

#### ②旅館数、土産物店の減少

図2に旅館数の変化、表1に土産物店な

どの変化を示す。

旅館数は、年々減少傾向をたどり、現在は、ピーク時(120軒以上とも150軒以上とも言われている)の約50%以下である。廃業したままに残されている建物の様子は、飯坂温泉の景観を大きく損なっている。

観光客にとっての観光資源の一つでもある土産物店・菓子屋共に大幅な減少している。特に土産物店は現在2軒であるが実際上の営業とは異なっており、温泉街には商店としての土産物店は皆無とのことである。

飯坂温泉は湯治場であったことから菓子店数が多かったが<sup>25)</sup>、土産物店と同様に大幅に減少している。

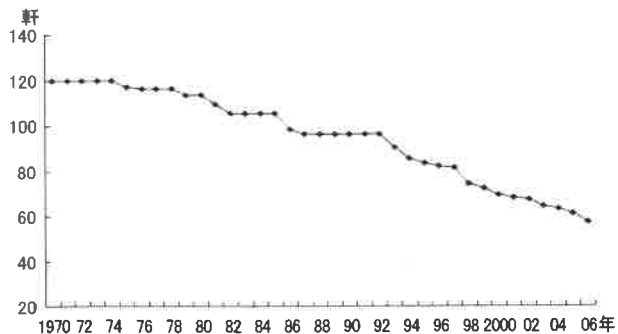


図2 旅館数(組合加入)の変化(1970～2006年)

(注) 飯坂温泉観光協会資料より筆者作成。

表1 土産物店・菓子店軒数の変化(1969～2009年)

区分	年次	1969	1984	1991	2001	2009
土産物店		18	15	8	4	2
菓子店		31	38	20	16	11

(注) 飯坂町商工会資料より筆者作成。

### 3 温泉地空間の変化

対象物とそこにある自分、対象物と自分を取り巻く環境によって構成された空間によって作られるイメージが、その場所のイメージである。

したがって、観光客の動きの変化や旅館数の半減、土産物店の消失や廃業旅館の増加といった空間を構成する対象物の有り様の変化は、温泉観光地としての空間構造を変えるとともに、そこから観光客が何かの意味を読み取ることによって、空間が場所として浮かびあがり、場所のイメージを作り上げていくことになる<sup>26)</sup>。

そこで、温泉地の観光施設として中核をな

す旅館の立地の変化から、空間構造の変化した姿とそれがもたらす意味を明らかにすることによって、観光客にとって変化した空間がどのような場所となるのかを捉える。

明治から現在までに刊行された資料<sup>27)</sup>に記された旅館の住所をもとに、立地場所を明らかにし、9つのエリアに分類、その変化を見た(図3飯坂地区のみの変化)(表2)。エリア区分名は、現在の町名を使用し、分類に当たっては道路を主とし、また共同湯の場所を参考にして<sup>28)</sup>。

各エリアの分割を地図上に示したものが図4である。

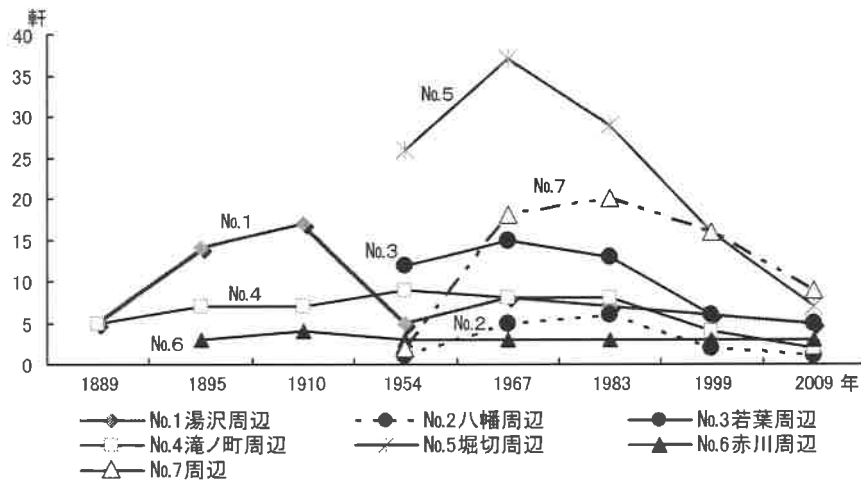


図3 地域別旅館数の変化 (1889～2009年)  
(注) 天王寺穴原地区、湯野地区を除く。

表2 地域別・年代別旅館軒数 (1889～2009年)

年次	No.1 湯沢周辺	No.2 八幡周辺	No.3 若葉周辺	No.4 滝ノ町周辺	No.5 堀切周辺	No.6 赤川周辺	No.7 周辺	No.8 天王寺穴原	No.9 湯野
1889	5			5					
1895	14		1	7		3		1	
1910	17			7		4		1	
1954	5	1	12	9	26	3	2	5	18
1967	8	5	15	8	37	3	18	6	22
1983	7	6	13	8	29	3	20	5	18
1999	6	2	6	4	16	3	16	5	14
2009	5	1	5	2	7	3	9	6	12

(注) 文末注28)の資料により筆者作成。

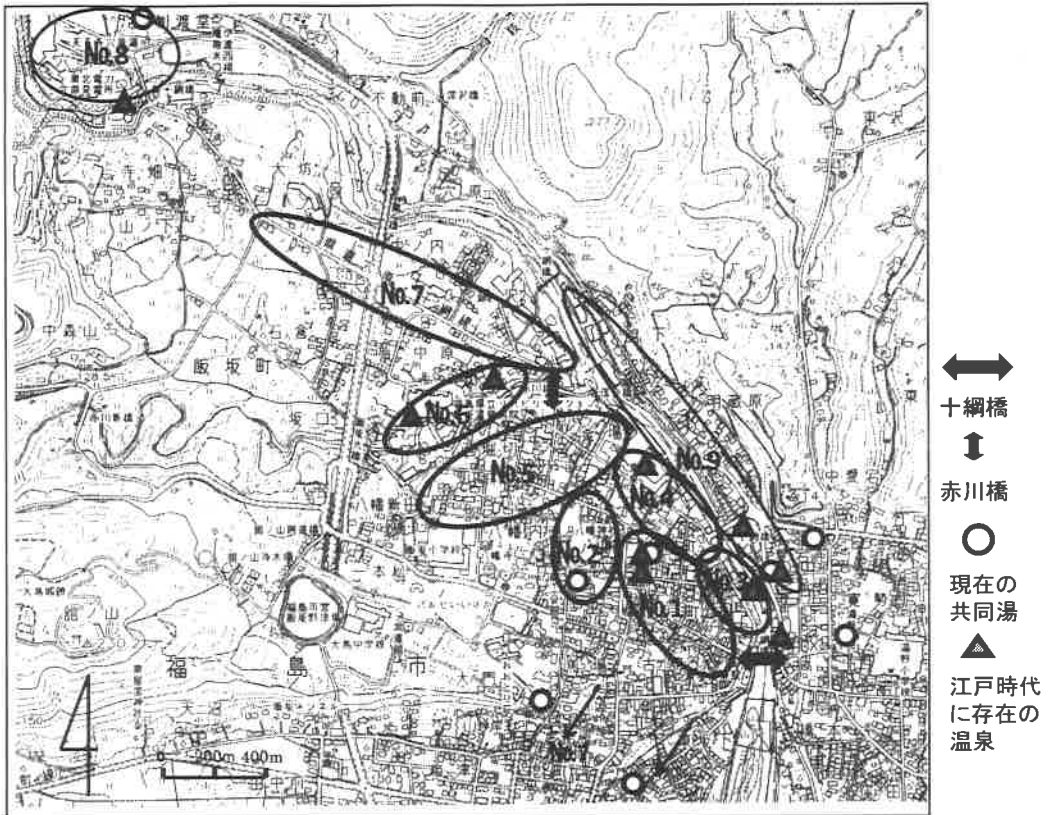


図4 飯坂温泉の旅館の広がり  
(注) 筆者作成。

#### (1) 飯坂地区の旅館立地の状況

明治の時代は、「鯖湖湯」「透達湯」のある湯沢地域No.1、「滝の湯」を中心とする地域No.4、「赤川温泉」を中心とする赤川沿いNo.6が主たる旅館の立地場所であった。

No.1は外湯による湯治旅館が中心であり、No.4は早くから内湯を持ち保養・遊楽の客を中心とする旅館である。

No.1、No.4、No.6共に近年及び現在まで続く老舗旅館があり、それぞれに核・中心となる温泉と旅館を持っていた。

No.1には、国登録文化財の蔵造りの旅館が残っており、No.4は飯坂3大老舗旅館があった場所である<sup>29)</sup>。とりわけ、K旅館の名は、飯坂を代表する中心的存在として広く知られ、多くの著名人や皇室の宿となっていた<sup>30)</sup>。

No.3の若葉エリアは1888(明治21)年、

178戸を消失した大火を機に整備された場所である。No.1にあった遊郭部分をここに移転し、また1906年12月の町議会において散在する貸座敷をNo.3一括移転することが決定されている。遊郭と周辺の様々な遊興施設で賑わい、1958(昭和33)年、売春防止法施行以降は旅館への転向が見られる。

No.5(No.4とNo.6の間に位置する)堀切のエリアは、明治、大正の資料には、旅館の存在が記されていない。戦後急激に旅館数が増加し、最盛期には最も旅館数の多い地域となる。数は激減したものの、現在も旅館の集積する地域で、飯坂温泉の歓楽街として雑誌等に取り上げられるのは主にこのエリアの道筋である。

No.5とNo.6の接点辺りに立地するのが、1967年に進出した外部資本の大手チェーン旅館であり、現在飯坂温泉の最大手・中心的

存在となっている。

1959年の吾妻磐梯スカイライン開通により、飯坂温泉は最盛期を迎え(図1)、宿泊客がどこも満員となり、大広間も宿泊客で溢れる程の状況であった。経験の無い多くの人々が旅館業に参入し旅館数が急増した。No.2の八幡周辺の旅館数の増加もその流れの中での現象と考えられる。

団体宿泊客の大型バスや車利用者のための駐車場が必要とされたが、町内では土地の確保が困難であり、道路沿いに周辺部地域No.7へと広がり、他のエリアより多くの軒数が広い範囲に散在している状況となる。

今回分析対象としていないが、湯野地区No.9は飯坂地区No.4、No.5の対岸に位置し、信夫郡飯坂、伊達郡湯野と行政区が別であった時代から摺上側を挟んで、両者一体の温泉地、景観として捉えられて来たエリアである。

## (2) 拡散の方向

温泉地の発達、観光地化の過程において、温泉地空間が拡大されていく経緯が、数多くの研究によって明らかにされているが<sup>31)</sup>、飯坂温泉も、時代と共に旅館の広がりによる温泉地空間の拡大が認められる。

①歴史上最初に登場するのは鯖湖の湯No.1である。

②明治の頃の中心は、湯治場としてのNo.1地区と、遊楽・保養の場としての摺上川沿いのNo.4地区、そして赤川沿いNo.6の地区であった。

③大正から昭和にかけてNo.5地区、No.3地区、対岸の湯野No.8地区に旅館が増え始める。

福島市の発展にともない福島市の奥座敷として歓楽温泉地化していったこと、鉄道整備により福島・東京からの時間距離短縮が成されたことを背景に、湯治中心のNo.1湯沢地区から川沿いの温泉街に中心が移っていったと考えられる。

④戦後の高度経済成長期、吾妻磐梯スカイラインの開通を機に、多くの団体観光客が大

型観光バスで押し寄せ、町中に入る道路の大渋滞、町の通りは観光客で混雑といった有様となる。観光客の増加に対応して、旅館の広がり、No.5町中に進み、温泉を持たない町屋が旅館に変化し、また駐車場確保の必要性から、飯坂町中心から外れた場所や、赤川橋を越えて県道に沿った場所No.7等の周辺へと広がっていった。

このような旅館の散在、旅館立地場所の広がり、中心のあいまい化は、拡散の方向への変化であり、温泉地空間の拡散といえる。

## (3) 拡散と中心性の変化

飯坂における中心性が拡散していく様は、旅館の立地の変化だけではない。この空間的現象とも深く関連しながら、地域の社会的な側面においても拡散・中心性の変化が見られる。それは、多くの温泉地に見られるのと同様、商店街、温泉街などその土地らしさ・場所の持つ意味を曖昧なものにしていくことにつながる要因ともなる。

①地域の核となる老舗旅館を中心に、多くの旅館が系列化され相互扶助のもと機能していた地域において、組織化されない旅館の増加や核となる旅館の変貌<sup>32)</sup>などは、空間的な拡散だけではなく、次第にコミュニティの中心性となりの弱体化につながり、地域の人々の暮らしの拡散となる。

②外部からの進出旅館や大型旅館による新たな流通経路の導入や<sup>33)</sup>、各旅館が、従来温泉街が持っていた飲食や、娯楽、土産物などの諸機能を内に取り込むことによって、地元商店と旅館のつながりを変化させるとともに、地元商店の経営に影響を与えるようになり、商店街の活気が失われていった。そして温泉街から人が消え、温泉街としての風情が失われていく経緯が見られる<sup>34)</sup>(写真1)(写真2)。

③観光客滞在の旅館が民家と混在する広がり(湯治場の鯖湖周辺は元々民家との混在が見られる場所であったが)、日常生活部分と、観光客が求める非日常の境界を曖昧にす

る。民家と隣接する廃業旅館（中には民家と見分けがつかない廃業旅館の姿もある）の姿は、日常性とは異なるものを求める観光客の前に、単にマイナス要素を伴った非日常性だけでなく、日常性もマイナスの意味を伴う場所として立ち現れる（写真3）。

④また、旅館が温泉街や、町の中心から離れた場所に散在することで、観光客は、飯坂温泉風景の特徴でもある広い川幅を持つ摺上川と兩岸の旅館の連なり、温泉地独特の共同場・歓楽街などとは全く異なる「温泉地らしさ」の乏しい風景の中に置かれる事になる。



写真1 閉店の多い商店  
（注）筆者撮影。



写真2 温泉街の閉店土産店  
（注）筆者撮影。



写真3 民家の中の廃業旅館  
（注）筆者撮影。

以上に述べたように、旅館の拡散と中心性が曖昧になる経緯において生じるまちの姿の変化は、外から訪れる観光客にとっては、飯坂らしさを感じ取る手掛かりを失わせ、温泉そのものの根強い魅力があったとしても、それだけでは、「よそ」との違いを体感することは出来ず、何処にもある場所となってしまう。

また、拡散と地域の中心性の曖昧さは、空間の曖昧さとなり、その結果、来訪者にとっては、特徴や個性のない地域の姿として映し出され、記憶として留める場所のイメージを明確に持つことが出来ないことにつながる。

場所の構造の明確さと個性の鮮明さが都市のイメージを作りやすいものにするが、飯坂温泉の拡散、中心性の分散は、くっきりとしたイメージを産み出す完全にまとまりのある背景とはならず、安定した調和の取れた関係を作り出すことを困難にし、不安定感をもたらすものになってしまう<sup>35)</sup>。環境と自己との関係を構築し得ない安定感を欠いたものは、魅力とはならない。見る者にとって、まとまった場所に見えることで、イメージ構成の要因となるその場所の意味を読み取ることができるものと考え、イメージ化する力

の弱さはその場所の魅力を引き出さない。

また、非日常性を求める観光客にとって、異日常性と日常性が混在する中での、廃業旅館が連なる街並みや人通りが絶えている通り、営業していない商店の姿などの負の要因は、空間全体を負の意味を伴う場所に変え、それが町全体のイメージにつながると考えられる。

## 6 再生事業にみる魅力の創出

### (1) 再生の経緯

現在「飯坂地区都市再生整備計画事業」が進められている。図5は、再生事業の経緯について組織を軸に捉えたものである。飯坂温泉再生の最初の動きは1980年代の末に始まった「飯坂温泉の21世紀を考える会」である。観光客の減少、廃業旅館の増加、温泉街の活気の低下など地域の活気が失われていくことに対する危惧感から若い世代の有志によって始まった。旅館、農業、商業等異業種の集まりは、旅館関係者がまちを動かしてきたそれまでとは異なった組織であり、現在につながる、大きな転機となっている<sup>36)</sup>。

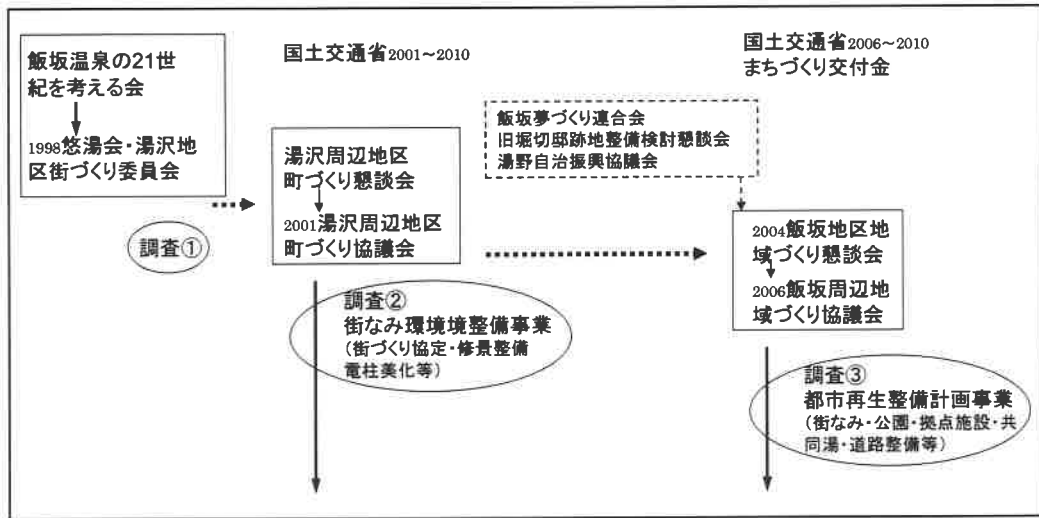


図5 飯坂温泉の再生事業の流れ  
 (注) 聞き取りにより筆者作成。

会員を広げた「悠湯会・湯沢地区町づくり委員会」となり、湯沢通りと鯖湖湯（No. 1のエリア）を中心としたまちづくり計画を作成した。

さらにこれを引き継ぐ形で、「湯沢周辺地区町づくり懇談会」、名称変更した「湯沢周辺地区街なみ環境整備協議会」が国・市の補助制度により計画実現に当たった。

計画は、湯沢地区の一部が対象となった鯖湖湯の改修、和風を基調とした街なみづくりのための住民協定締結、道路に面した家屋・商店の修景整備、電柱・道路の美装など街並み整備が中心事業であった。

2004年、湯野地区も含めた広いエリアを対象とし（No. 1 No. 3 No. 4、No. 9の一部）、町内会、女性団体、関係組織の各代表者によって構成される「飯坂地区地域づくり懇談会」が発足、2006年にはメンバーを広げた「飯坂周辺地域づくり協議会」に変更し、まちづくり交付金制度により、「都市再生整備計画事業」に取り組んでいる。

事業の主なもの、飯坂温泉市街地エリアでは旧若喜旅館跡地<sup>37)</sup>の公園整備、共同湯「波来湯」の再建、旧掘切邸を交流拠点施設として整備<sup>38)</sup>、道路・電柱の美装、建築物・

駅舎修景などで、県・市の関係部署、住民が一体となった取り組みが進められている。

## (2) 中心性回復の取り組み

1996年の湯沢地区（No. 1）に関する地区内外の住民アンケート調査では、住民にとっての「湯沢地区イメージ」は湯治場より「商店街のイメージ」が優先している。一方、飯坂で大切なのは「飯坂温泉のイメージ」、湯沢地区においては「鯖湖湯」であり、これらは、住民の地域イメージ（地域アイデンティティ）ともいえる<sup>39)</sup>。

この調査に基づく再生計画は、『鯖湖湯を「湯治という信仰の場」に、湯沢通りをそこに続く「参道」と見立て、集まる人の交流の場、商売の場所、それを支える人たちの生活の場をつくり出すことをイメージとして描いた』ものであった<sup>40)</sup>。

湯治場時代の中心である「鯖湖の湯」と、湯治客、温泉地を支える職人・商店が多く集まり、温泉地ならではの商業が営まれていた湯沢通り商店街が対象となった計画のコンセプトは、湯沢地区だけではなく飯坂の中心性を明確にし、それを再生する試みといえる。

1999年のアンケート調査では、湯沢地区のイメージや大切なものは前回調査と同じ傾

向を示すが、特徴的なのは、「大切にしたいもの」として「日常生活」のポイントが増加し、「まち」や「まちなみ」について否定的な評価が肯定的な評価を大幅に上回っていることである<sup>41)</sup>。

自由記述においても安上がりの建物、老朽化、空き店舗、空家、旅館の焼け跡放置、暗い道路など負の要素・課題が住民により多くあげられている。

日常と非日常が混在することから、観光客の目に触れやすい日常性が、住民の視点からも課題のあるものとして捉えられ、魅力を失ったものになっているといえる。そして、住民が日常として捉える場所の持つ否定的な状況が、日常生活を大切なものしていきたいとの住民の視点につながっていると考えられる<sup>42)</sup>。

2006年からの「都市再生整備計画事業」において、旅館の焼け跡を公園に変えることが進められており、これまで飯坂の歴史の負の部分象徴する存在であった場所が持っていた意味の転換を図ることにつながる。かつて摺上川兩岸にそびえていた三層四層の旅館を彷彿とさせる3層建て共同湯・波来湯の建設や、まちの中心存在であった堀切邸を観光客・住民の交流拠点とする拠点にすることも、飯坂温泉の歴史と文化、くらしの文脈が保たれた中心性の回復であり、拡散した状況に対して、場所の統一感をもたらすものとなる。

## 5 まとめ

本研究は、現在も観光客が減少し続ける福島県飯坂温泉を対象地とし、高度経済成長期を境として生じた変化の姿と現況を明らかにし、温泉地をはじめとする観光地に人が来なくなる現象の背景にある要因を、観光客の側から捉えた。その結果、以下の点が明らかになった。

①湯治場から歓楽温泉地、観光温泉地への変化をたどる経緯において、1960年代から70年代の半ばにかけての観光客の急増に伴

い、旅館立地の拡散が生じた。

②拡散は、温泉地としての中心性の曖昧さをもたらすとともに、日常性と非日常性の混在を広げた。

③役割や機能において中心性を持っていた特定旅館が中心性を薄れさせていくに伴い、商店街や、温泉街の衰退現象が生じた。

これらの空間変化は、観光客が訪れた場所に対して持つ魅力とどのように結びつくかの考察を行った。

④空間の拡散と中心性が曖昧になることは、観光客にとってその場所のイメージを曖昧なものにし、安定性の無い場所、個性や特徴をもたない場所として温泉地の魅力を失わせることにつながる。

⑤日常性と非日常性が混在するなかでの負の要因を持つ非日常性の存在は、日常性の部分まで波及し、その場所全体が負の意味を伴うものとして捉えられる。

⑥こうしたなかでの地域再生の取り組みについてその経緯・内容を見ると、住民の視点からは負の要因を捉えた再生の取り組みであり、歴史・文化の文脈での中心性回復の試み、日常性の中の負の部分の除去、負を象徴する場所の意味を転換する試みがなされているのである。

現在、様々な組織が参加し、在住歴の新しい人々が地域再生に取り組んでいることは、選ばれている新たな構造での住民主体の再生、負の方向に固定的化されているとも思われる飯坂温泉のイメージの転換、新たな地域の魅力創出につながる可能性を持つ要因となるのではないかと考えられる。

## 注・参考文献

- 1) 財団法人日本交通公社 (2008) : 『旅行者動向 2008 国内・海外旅行者の意識と行動』67 頁。
- 2) 財団法人日本交通公社 (2000) : 『旅行者動向 2000 国内・海外旅行者の意識と行動』30 頁。
- 3) 財団法人日本観光協会 (2009) : 『平成 20 年度版 観光の実態と志向旅行者動向』67 頁。
- 4) 環境省「温泉利用状況経年変化表」環境省自然環境局資料より。

- 5) 同上温泉利用状況データより。
- 6) 山村順次 (1990) : 『観光地域論—地域形成と環境保全』古今書院、334頁。25～61頁参照。
- 7) 山村順次 (1995) : 『新観光地理学』。大明堂発行、270頁。92～106頁参照。
- 8) 社団法人日本温泉協会 (2006) : 『温泉 自然と文化』「温泉の利活用」、71頁。48～59参照。
- 9) ジャーナリズムが作り上げたものでブームではないとの説もある。
- 10) 山村順次 (1980) : 「日本温泉観光地の入湯客の地域的・季節的特性」地理科学 33、1～13頁。
- 11) 布山裕一 (2009) : 『温泉観光の実証的研究』御茶の水書房、339頁。47～48頁参照。
- 12) 下村彰男 (1993) : 「近代における温泉空間構造の変遷に関する考察」造園雑誌、56 (5)、241～246頁。
- 13) 福島市史編纂委員会 (1999) : 『福島市史資料叢書—温泉掎角論 飯坂湯野温泉史』福島市教育委員会、130頁。14頁参照。「温泉掎角論」は安永9年に第五世「奇獄泰運」によって記されたもの。
- 14) 竹内久助 (1902) : 『岩代飯坂温泉』、35頁。6頁参照。
- 15) 信夫郡出版協会 (1908) : 『信夫郡案内』(福島県信夫郡役所)、162p。54頁参照。
- 16) 福島県教育会編 (1912) : 『福島県名勝踪跡抄』西澤商店、86頁。63頁参照。
- 17) 1905 (M38) 年日露戦役傷病兵療養所設置。
- 18) 飯坂温泉が舞台の小説に、宮本百合子の「禰宜様宮田」、西条八十の「みちのくの恋」などがある。
- 19) 菅野円蔵 (1977) : 『大鳥城記余録』飯坂町史跡保存会、430頁。52ページ参照。
- 20) 「この付近で一番世にも聞こえ、設備も完備していいのは・・・飯坂温泉である」と評価しながらも、「・・・一面溫柔郷らしい空気が漲っていて・・・」「あまり静かな温泉場というわけにはいかなかった。三味線と、鼓と、・・・一種みだらな気分と・・・厭であった」と雰囲気については好ましくない印象を持つ。
- 21) 雑誌『旅』1928年1号、41～44頁「飯坂と穴原温泉」。1929年1号、62～65頁「飯坂温泉から」。1930年9号、113～114頁「飯坂ちょっとのぞ記」。1933年3号、98～100頁「飯坂温泉ユーモア」。
- 22) これらの分類は、前掲7) 92～100頁を参考とした。
- 23) 福島大学行政政策学類社会調査論研究室 (2007) : 「地方都市における地域空間の構造転換とコミュニティによる再生の可能性—福島市飯坂地区を事例に」。
- 24) 前掲11) 20～23頁。
- 25) 老舗菓子製造業主からの聞き取りによる。
- 26) 石見良太郎 (1996) : 『居住空間の再生と都市計画—場所と場の視点から、鈴木清・中嶋明子編、講座現代居住』東京大学出版会。259～280頁。
- 27) 永沢廣吉 (1889) : 飯坂温泉四季之友。香味才助(1895) : 飯坂温泉案内。大浜六郎(1910) 避暑案内。日本交通公社 (1954) : 全国名勝と温泉の旅行案内。飯坂温泉観光協会資料 (1967、1983、1999、2008年)。
- 28) 住民の感覚にあうかどうかについては、古くから旅館を営む旅館主数名に確認を行った。
- 29) 中野吉平 (1924) : 『飯坂湯野温泉史』彩進堂書籍部、172頁。
- 30) 2007年廃業。
- 31) 浦達雄 (1998) : 『観光地の成り立ち—温泉・高原・都市』古今書院、190頁。21～50頁参照。
- 下村彰男 (1993) : 「近代における温泉地空間構造の変遷に関する考察」造園雑誌、56 (5)、241～246頁。
- 32) 昭和40年代、観光客が急増した頃は、核となる旅館が中心となって客のさばきをしていたが、旅行代理店と各旅館とが直接交渉をするようになったことや、客数が次第に減少する経緯において相互の関係が変化し、核となる旅館の中心性が変化していった。
- 33) 食材の仕入れ、クリーニング。建築関係など流通の経路や方式が変化することによって、地元商店や職人などの関係が変化した。湯沢の通りNo.1は多くの職人のいる商店街であったが次第に需要がなくなり現在は、畳屋、三味線やなどわずかに残るのみである。
- 34) 聞き取り調査において様に述べられるのは、浴衣姿の宿泊客で通りがいっぱいになり、街に響いていた下駄の音が懐かしいと言葉である。
- 35) Kevin Lynch (1960) 1960 『THE IMAGE OF THE CITY』(= 丹下健三・富田玲子訳 (2007) 『都市のイメージ』岩波書店 286p。5～6頁、151～152頁、263～264頁参照。
- 36) 「その後に起こることの教師でもあり、反面教師でもあった」と現在のリーダーは評価する。
- 37) 十綱橋のふもとに位置し、飯坂温泉繁栄の象徴でもあった若喜旅館は、1994年多数の死者を出す大火の後、12年間そのままの姿で



放置されていた。メディアにもしばしば取り上げられ、住民にとっては、飯坂温泉が抱える問題の象徴であり、十綱橋から温泉地を眺める観光客のまなざしは、そこから町全体の負のイメージを描かせるものである。

38) 飯坂の中心に位置し、水利事業、土地開墾を行ったほか、豪農、豪商として代々飯坂の発展に寄与した旧家。東京市長、衆議院議長、イタリア大使など日本の政治にも大きくかかわった。

39) 悠湯会湯沢地区町づくり委員会（1996）：『鯖湖湯を中心とした町づくり調査報告書』湯沢地区のイメージ：①商店街 53%（地区内 49% 地区外 59%）②湯治場 33%（内 38%、外 27%）。

湯沢地区で大切なもの：①鯖湖湯 27%（内 28%、外 27%）②堀切邸 14%③商店街 11%（内 12%、外 10%）。旅館関係者の飯坂の中心性 21%、商店関係者の商店街

28%。

飯坂温泉の大切なもの：①飯坂温泉イメージ 30%（内 31%、外 29%）②歴史・文化 19%④温泉機能 17%。

今後の展開留意点：①町並みの再生 19%。旅館関係者 26%、観光関係者 32%に対し商店関係者は駐車場拡充をトップにあげ（19%）、町並み整備は 15%と少ない。

40) 前掲 39)

41) 湯沢周辺まちづくり懇話会（1999）：『湯野町探検撮影写真傾向検討書及びアンケートの結果と分析』。湯沢地区で大切なもの：日常生活が 14%（調査① 6%）、飯坂の大切なもの：日常の生活 13%（6%）。

湯沢地区の街並み：良い 14%、悪い 35%、「まち」について：好ましくない 46%、好ましい 30%。

42) 趣旨として「古きよき個性、特徴を再認識し…地域住民がゆとりと潤いのある良好な環境を…」と記されている。

# 最近の和倉温泉における小規模旅館の動向

## Current Business Trends of Small Sized Ryokan (Japanese Inn) in Wakura Spa Region, Ishikawa Prefecture

浦 達 雄\*  
Tatsuo URA

キーワード: 和倉 (Wakura)・温泉地 (spa region)・小規模旅館 (small sized ryokan・  
Japanese inn)・経営動向 (business trends)

### 1 はじめに

#### (1) 研究の背景

近年、一部の温泉観光地において、旅館再生企業が経営する新たな形態の温泉旅館が登場している。従来の温泉旅館経営とは、相反する格安の料金体系で消費者の心を巧みにつかみ、一大グループを形成する勢いである<sup>1)</sup>。

筆者は、常日頃から温泉旅館、特に小規模旅館は日本文化の最後の砦と主張しており、温泉旅館の持続的な発展を心から願っている<sup>2)</sup>。従来の地域システムを破壊するような価格体系を持ち込む旅館再生企業とは一線を画す上でも、小規模旅館の今後のあり方を真剣に模索している。ところが、2008年秋のリーマンショックを契機として、温泉旅館の経営はかなり厳しくなり、さらには新型インフルエンザの影響で、客足が減少する温泉旅館が急増したことは記憶に新しい。

高度経済成長下においては、大規模旅館を主体として、順調な伸びを示した温泉旅館だが、1973年の石油危機、平成期のバブル経済の崩壊などで経営危機が顕在化することになった。これまで温泉ブームを支えてきた秘湯系や癒し系の温泉地でさえ、入込客数が停滞・減少傾向を示しており<sup>3)</sup>、その対応策が課題となってきた。

#### (2) 研究の目的と方法

研究の目的は、石川県七尾市の和倉温泉を

対象として、小規模旅館の動向を把握し、その将来方向を明らかにすることである。北陸の温泉観光地では、前述の旅館再生企業が進出し、色々と問題点を投げかけている<sup>4)</sup>。しかし、和倉温泉は表面的には、こうした現象は現れていない。筆者は10年ほど前に和倉温泉の小規模旅館の調査をしたが、今回は2軒の小規模旅館を取り上げ、おおよその経営数値の把握、企画商品や経営方針などを分析することで、その実態を考察したい。

研究の方法は、経営者に対する詳細な聞き取り調査、和倉温泉観光協会など関係機関における聞き取り調査である。なお、ここで言う小規模旅館とは29室未満の旅館を示す<sup>5)</sup>。

#### (3) 従来の研究成果

従来の研究成果は、観光地理学に限れば、得てして実態の把握に終始しており、経営者サイドの要望である今後のあり方や方向性について、応え切れない部分がままあったと思われる。本稿では、実態把握と共に今後の方向性についても明示し、経営者の要望に応えるべく努力をしたい。

なお、筆者はこれまで温泉地を主体にして小規模旅館の経営動向に関して研究をすすめてきた<sup>6)</sup>。その調査手法は旅館経営者に対する聞き取り調査に主眼を置くもので、細かなデータ分析ではなく、趨勢の把握を意図したものである。和倉温泉に関しては、すでに

\* 大阪観光大学 (Osaka University of Tourism)

1997年に報告したが、時代的な背景は当時と異なり、現在の方がその経営環境は厳しい。

## 2 和倉温泉の旅館規模と動向

### (1) 旅館規模

和倉温泉観光協会の資料によれば、2009年4月現在、旅館組合には26軒の旅館が加盟し、収容人員は7,903人を数える。規模別に分類すると、「～29室」13軒・「30～79室」6軒・「80室以上」7軒となる(表1)。

表2は旅館規模の推移を示したものである。

表1 和倉温泉における旅館規模(2009年)

客室規模	軒数	総収容人員	平均(人)
～29室	13	858	66.0
30～79室	6	2,019	336.5
80室以上	7	5,026	718.0
合計	26	7,903	304.0

(注) 和倉温泉観光協会の資料による。

表2 和倉温泉における旅館規模の推移(1996～2009年)

年度	軒数	総収容人員	平均(人)	備考
1996	31	8,002	258	
1997	30	8,039	268	総湯新築。茶寮の宿あえの風開業
2000	29	8,355	288	
2001	28	8,428	301	総湯の足湯完成
2002	27	8,378	310	
2003	28	8,418	301	能登空港開港
2004				
2005	27	8,313	308	のと鉄道能登線廃止
2006				
2007	27	8,026	297	3月25日能登半島地震
2008				能登の旨美フェスタ開催
2009	26	7,903	304	

(注1) 和倉温泉観光協会の資料による。

(注2) 空欄はデータなし。

これによると、小規模旅館の軒数は50%を占めている。和倉温泉といえば加賀屋が最大の旅館規模を誇り、232室、1,274人収容の大規模旅館となる。さらに加賀屋は、姉妹館として、茶寮の宿あえの風(129室、711人収容)を運営し、和倉温泉の収容人員の内25%を占めることになる。その他の宿泊施設として、市町村共済組合保養所1軒・民宿1軒・ビジネスホテル2軒が成立している。

浦(1997)によると、1996年現在、日本観光旅館連盟加盟旅館は29軒を数えたが、2009年4月現在では22軒に留まっている。

石油ショック以降、和倉温泉の旅館は2軒の中規模旅館が廃業しただけで、1996年まで推移したが、その後は小規模旅館を主として減少傾向が続いている。旅館数は、平成期では1996年の31軒をピークとし、近年、廃業した事例としては後継者問題(1軒)、地震被害(1軒)がある。

### (2) 最近の動向

2007年3月25日の能登半島地震で、少なからず被害をこうむった和倉温泉であるが、観光施設の整備が進んだ。かんぼの宿和倉の跡地の一角を利用して、2007年4月27

日には、湯っ足りパーク内に、足湯・妻恋舟（つまごいぶね）の湯がオープンした。和倉では、2001年8月、総湯で足湯を整備しており、相乗効果が期待される。

2008年3月1日から23日まで、能登の旨美フェスタを開催した。場所は石川県七尾市と富山県氷見市で、和倉温泉も会場となった。別府八湯温泉泊覧会<sup>7)</sup>のノウハウを活用したイベントで、今後の展開が楽しみである。

一方、2009年になって、2軒の旅館が旅館再生企業として、加賀市山代温泉に進出した。宝仙閣は6月9日までに加賀屋宝生亭の土地・建物を取得し、傘下の旅館として営業を引き継いだ。経営不振に陥った旅館を県外資本に頼らずに、県内同業者が再生に乗り出すことになった。宝仙閣は1963（昭和38）年に創業し、旅館宝仙閣（23室、100人収容）、渡月庵（11室、40人収容）を経営している<sup>8)</sup>。

続いて、2009年6月末、のと楽は大寿苑の全株式を取得し、グループ傘下に収めた。のと楽は大寿苑の営業を継続しながら、内装などの改修を実施し、グループ旅館として2009年秋の本格的なオープンを目指している。

のと楽は1976（昭和51）年に創業し、旅館のと楽（114室、550人収容）、ガーデン能登屋（35室、80人収容）、ホテル能登倶楽部（36室、96人収容）をはじめ、和倉以外では、滝亭（金沢犀川温泉）（35室、70人収容）、望洋楼（坂井市三国温泉）（10室、20人収容）を営し、多店舗展開を行っている<sup>9)</sup>。

### 3 A旅館の事例

A旅館の概要は表3に示す通りである。小規模旅館ながら、客室や料理のレベル、温泉施設などは上位のクラスに属し、和倉温泉では注目を集める温泉旅館の1軒である。

A旅館の創業は1933年で、1970年には旅荘はまなすとして屋号を変更し、従来の平凡な温泉宿を克服した。続いて1994年には

スクラップ&ビルドを行い、「旅荘」を「旅亭」に改め、温泉旅館としての風格を重んじ、さらには高品位旅館を目指すことになった。新築に際してのテーマは、現代和風・高品位・自分の目が届く範囲の温泉旅館である。客室は12室で、収容人員60人を示す。

年商は新築前が8,000万円程度で、新築後は1億3,000万円を売り上げたが、現在は9,600万円に留まっている。送客の内訳は直50%・ネットエージェント30%・エージェント20%で、ネットエージェントの割合が高まっている。エージェントの扱いは1992年の40%と比べると、半減している。年商の内訳は宿泊90%・日帰り10%で、オンシーズンは8・10・9月など、夏から秋にかけての月が忙しい。これに対して、オフシーズンは2・3月などで、冬場と早春がやや暇になる。宿泊客の市場構成は石川県内40%・石川県外60%で、県外では関東・関西方面が目立つ。客層は同伴50%・家族30%・グループ15%・団体4%・1人1%の割合で、新築後は観光系の宿泊というよりは、料理&温泉派の宿泊が多い。

スタッフは家族3人（夫妻・子息）・正社員4人・パート3人・アルバイト1人の構成となる。正社員の内訳は板長1人・客室係2人・雑役1人を示す。料理は会席料理で、部屋出しに拘りがある。これには自らの宿泊体験が活かされており、気兼ねなく食事を楽しみたいという願望がルーツとなっている。メニューは七尾湾や日本海でとれた魚介類がメインディッシュとなる。

セールスポイントは、個室としての魅力を全面に出し、静かな雰囲気と環境のもと、漁師宿・網元の温泉宿としての看板を掲げている。料理は部屋出しに拘り、海鮮料理・会席料理の専門店となる。温泉にも神経を使い、塩化物泉の源泉掛け流しを売りとしている。経営方針は、自分の宿泊体験を生かした旅館づくりであり、自分の目が届く範囲の温泉旅館を目指している。

表3 A旅館の動向

<p>(1) 旅館の歩み</p> <p>1933年 くろかわ旅館として創業。湯治客主体。</p> <p>1970年 旅荘はまなす(新装)。平凡な温泉宿を克服。観光客主体。</p> <p>1994年 8月1日。旅亭はまなす(新築)。料理と温泉を楽しむノンビリ派主体。</p> <p>2007年 3月25日。能登半島地震。1週間ほど休業。</p>
<p>(2) 客室と付帯施設</p> <p>①建物：鉄骨2階建、現代和風の建物</p> <p>②面積：敷地面積660㎡、延床面積1320㎡</p> <p>④客室：客室12室(和室)、収容人員60人。10畳間、12畳間の部屋を増やす。 新築前は14室、収容人員60人。</p> <p>⑤付帯施設：売店・ラウンジ・大広間1室(55畳間)</p> <p>⑥温泉施設：男女別浴場(露天風呂付帯)。源泉掛け流し。</p>
<p>(3) 1人当たりの宿泊料金(1泊2食。2人で1部屋利用)</p> <p>①平日の宿泊料金：1万円～2万円</p> <p>②平日の標準料金：1.8万円</p> <p>③週末料金：1.5万円～2.8万円</p> <p>④週末の標準料金：2万円</p>
<p>(4) 年商と客層</p> <p>①今期の年商：9,600万円</p> <p>②平均単価：宿泊単価1.3万円、消費単価1.5万円。</p> <p>③年商の内訳：宿泊90%、日帰り10%、</p> <p>④シーズン：オンシーズン8・10・9月、オフシーズン2・3月。 日帰りは10・12・1月。</p> <p>⑤宿泊客の市場構成：石川県内40%、石川県外60%。県外では関東・関西方面。</p> <p>⑥送客実績：直50%・ネットエージェント30%・エージェント20%。</p> <p>⑦同行者：同伴50%・家族30%・グループ15%・団体4%・1人1%。</p> <p>⑧目的：観光系の宿泊というよりは料理&amp;温泉派の宿泊が多い。 漁船を所持し、釣り客も多い。</p>
<p>(5) スタッフと料理</p> <p>①スタッフ：家族3人(黒川夫妻・子息)・正社員4人・パート3人・アルバイト1人。</p> <p>②正社員の内訳：板長1人・客室係2人・雑役1人。</p> <p>③会席料理：旬の地魚料理づくし。部屋だし。</p> <p>④名物料理：鍋料理(秋から冬、そして春先)(イシル鍋・牡蠣鍋など)。 夏はアワビのステーキ。黒鯛(さし網)など、蛸(蛸壺)など。</p>
<p>(6) その他</p> <p>①セールスポイント：漁師宿・網元の温泉宿。海鮮料理主体の専門店。</p> <p>②経営方針：個室・現代和風・高品位・自分の目が届く範囲の温泉旅館を目指す。 自分の宿泊体験を生かした旅館づくり。</p>

(注) 聞き取りにより筆者作成。

#### 4 B旅館の事例

B旅館の概要は表4に示す通りである。和倉温泉の小規模旅館の中で、中レベルの旅館である。敷地に余裕がなく、施設・設備をゆとりある空間として整備することが今後の課題となっている。

B旅館の開業は1962年で、その後1989

年にスクラップ&ビルドを行い、屋号を変更した。設備投資額は1億3,000万円、コンセプトは花をイメージとした現代和風とした。ちなみに旧屋号はきたむら旅荘で、古臭くなった屋号の克服が第一歩となった。現在の客室数は10室、収容人員は45人を示す。

年商はバブル経済のピーク時には1億

表4 B旅館の動向

<p>1) 旅館の歩み</p> <p>1962年：きたむら旅荘として創業。客室は6室。</p> <p>1989年：花ごよみ（新築）。花をモチーフにして古臭いイメージから脱皮。投資額は1億3,000万円。</p> <p>1992年：年商は1億5,000万円。（ピーク時）</p> <p>2003年：貸切風呂の制度導入。1時間1,000円。</p> <p>2005年：年商は8000万円。</p> <p>2007年：3月25日。能登半島地震。休業せず。</p> <p>2007年：3室改装。</p>
<p>2) 客室と付帯施設</p> <p>①建物：鉄骨3階建、現代和風の建物</p> <p>②面積：敷地面積429㎡、延床面積740㎡</p> <p>④客室：客室10室（和室）、収容人員45人。</p> <p>⑤付帯施設：売店・ラウンジ（昼は喫茶店）・宴会場1室（35畳間）。</p> <p>⑥温泉施設：男女別浴場。源泉掛け流し。</p>
<p>(3) 1人当たりの宿泊料金（1泊2食。2人で1部屋利用）</p> <p>①平日の宿泊料金 オフ：7,350円、9,450円、1万1,550円 ピーク：9,450円、1万1,550円、1万3,650円</p> <p>②平日の標準料金 オフ：9,450円 ピーク：1万1,550円</p> <p>③週末料金 オフ：1万1,550円、1万3,650円、1万5,750円 ピーク：1万3,650円、1万5,750円、1万7,850円</p> <p>④週末の標準料金 オフ：1万3,650円 ピーク：1万5,750円</p>
<p>4) 年商と客層</p> <p>①今期の年商：7,000万円</p> <p>②平均単価：宿泊単価1.1万円、消費単価1.2万円。日帰りは6,000円。</p> <p>③年商の内訳：宿泊80%、日帰り20%（宴会利用5%）。</p> <p>④シーズン：オンシーズン8・10・11・1・5月、オフシーズン6・7・2・9・4・2・3月。日帰りは1・2・3・11・12月。</p> <p>⑤宿泊客の市場構成：石川県内40%・石川県外60%で、県外では関東方面が多い。</p> <p>⑥送客実績：直30%・ネットエージェント60%・エージェント10%。</p> <p>⑦同行者：同伴50%・家族20%・団体5%・その他15%</p> <p>⑧目的：観光70%・宴会15%・商用10%・その他5%。</p>
<p>(5) スタッフと料理</p> <p>①スタッフ：家族4人・正社員2人・パート7人・アルバイト1人。</p> <p>②正社員の内訳：客室係2人。</p> <p>③会席料理：海鮮会席料理。地の食材を活用した料理。部屋だし。</p> <p>④名物料理：各種アワビ料理。キーワードは新鮮・手作り・ボリューム感・値頃感。</p>
<p>(6) その他</p> <p>①セールスポイント：オーナーシェフによる手づくり料理。明確な料金体系（梅竹松）。</p> <p>②経営方針：小さな旅館の大きなサービス。各種サービスでは、夕食時のソフトドリンク又は地酒の1本サービス、ラウンジでのカラオケ無料サービス、総湯の入浴券プレゼント、自館売店商品の1割引サービスなど。</p>

(注) 聞き取りにより筆者作成。

5,000万円を売り上げたが、その後は減少傾向を示し、現在、7,000万円に留まっている。景気の悪化、大規模旅館による安売り路線、小規模旅館の増改築・建て直しによる顧客の分散化、主な顧客であった地元公務員の利用減少などがその要因である。送客の内訳は直30%・ネットエージェント60%・エージェント10%で、ネットエージェントの割合が高まっている。年商の内訳は宿泊80%・日帰り20%で、日帰り部門は宴会利用が5%を占める。市場構成は石川県内40%・石川県外60%で、県外では関東方面が多い。オンシーズンは8・10・11・1・5月、オフシーズンは6・7・2・9・4月となる。日帰りは1・2・3・11・12月が多い。

温泉浴室は顧客の要望に応じて、2003年から貸切風呂の制度を導入した。空いている時間帯であれば貸切入浴が可能で、現在では貴重なセールスポイントとなっている。日帰り入浴も認めて、日中は1,000円で開放している。

スタッフは家族4人・正社員2人・パート7人・アルバイト1人である。正社員は客室係となる。料理は主人が担当する。2003年までは調理師を正社員にしていたが、退職したこともあって、無理に補充はせず、オーナーシェフとなった。看板料理は海鮮会席料理となる。地の食材を活用した料理で、自慢料理は各種アワビ料理となる。新鮮・手作り・ボリューム感・値頃感などが料理のキーワードである。

セールスポイントは、各種サービスの充実である。具体的には、夕食時のソフトドリンク又は地酒の1本サービス、さらにはラウンジでのカラオケ無料サービスなどを実施する。明確な料金体系もセールスポイントであり、宿泊料金はシーズン、料理のランク(梅・竹・松)で変えている。

経営方針は、創業以来のモットーである小さな旅館の大きなサービスとなる。前述のサービスの他には、総湯の入浴券プレゼント、

自館売店商品の1割引サービスなどを実施している。

## 5 まとめ

本稿では2軒の小規模旅館を事例として論を展開した。その結果は、次の通りである。

- ①施設設備の老朽化に伴って、スクラップ&ビルドを行い、古臭い屋号を今風に改め、建物も現代和風としている。
- ②しかし、年商はバブル経済期がピークで、その後、減少傾向にある。景気の変動、大規模旅館の安売り販売、消費者の価格志向などが影響している。
- ③旅館料理・温泉施設などで旅館のセールスポイントを明確にし、集客に努めている。
- ④施設・設備として、ラウンジを付帯していることも特色である。昼は喫茶、夜はスナックとして機能し、外来からのウオークインにも対応している。
- ⑤送客はネットエージェントの割合が増加傾向にある。
- ⑥個室・和風旅館・専門店として活路をみいだし、日本文化の拠点として機能している。和倉温泉の将来方向について、和倉温泉観光協会の考え方は、次の通りである。
  - ①体験型宿泊(乗馬、魚釣り、サイクリングなど)の推進
  - ②合宿誘致
  - ③インバウンドの強化筆者は、各種データ分析、聞き取り調査をもとに次の点を提案し、本稿のまとめとした。
  - ①ロングステイ観光  
和倉温泉は、今後、連泊型の観光を推進すべきである。欧州の保養温泉地を参考にした上で、長期滞在者に優しい温泉観光地を目指すべきである。そのためには、まずリーズナブルな宿泊料金システムを導入し、長期滞在に応えるべきであろう。
  - ②滞在メニューの作成  
ロングステイ観光のためには、滞在メ

ニューの作成が必要となろう。観光資源や施設を単に羅列するだけでなく、具体的に、時間、行き先、食事の仕方などを明示すべきである。一考としてオンパク（温泉泊覧会）的な思考が求められる。地元の人材、地域資源を活用する手法で、毎日、ミニイベントを開催すれば、豊富な滞在メニューの作成が可能となろう。

### ③ネットワーク観光

ロングステイの場合、和倉温泉で完結するケースは難しいと思われるので、周辺の観光地を取り込む必要がある。つまり、和倉温泉に宿泊しながら、奥能登・金沢・氷見などを訪問するパターンである。周遊型の広域観光を克服する観光がネットワーク型観光と言えよう。

### ④的確な情報発信

観光資源、施設に恵まれても、タイムリーな情報発信が行われなければ、何にもならない。HPやブログの充実を図ることで、的確できめ細かな情報発信を行うべきである。

### ⑤個宿としてのイメージアップ

伝統的な温泉地はさかのぼれば外湯を中心とした個宿の集合体である。小規模旅館は個宿としての特性と魅力を発揮することによって、持続可能な温泉地としての再生は可能と思われる。

## 付記

本研究は、日本温泉地域学会第13回研究発表大会（山中温泉）（2009年5月25日）において口頭発表した内容に加筆したものである。調査に当たって、和倉温泉観光協会、旅館関係者に対してご協力を頂いた。ここに記して謝意を表します。

## 注・参考文献

- 1) 異業種から進出した旅館再生企業として、湯快リゾート、伊東園ホテル（スタディ）グループ、大江戸温泉物語などがある。
- 2) 浦達雄(2003):「新たな温泉旅館経営のあり方」（総合観光学会編：『観光の新たな潮流』同文館出版、所収）で、詳細を述べた。
- 3) 癒し系の温泉地の代表といわれる熊本県黒川温泉の宿泊者数は、2002(平成14)年度に39万6,720人を数えて、ピークを迎えたが、その後、減少傾向を示し、2008(平成20)年度は31万3,422人に留まっている。
- 4) 北国新聞「北陸の経済ニュース」2008年8月20日付ネット配信で、次の記事が掲載された。「北陸の温泉地で、県外資本による旅館取得が再び活発化してきた。加賀温泉郷で旅館再生を手掛けてきた湯快リゾート（京都市）は今月、新たに福井県芦原温泉で休業旅館の経営を引き継いだ。大江戸温泉物語（東京）の投資も目立つ中、今度は芦原に進出した新たな県外資本が加賀へ北上するといううわさも駆けめぐる。加賀を舞台としてきた県外資本の主戦場が、石川と福井の県境を越えて広がってきた。湯快リゾートが経営を引き継いだのは、芦原温泉の「芦原パストラル 青雲閣」。旅館は6月末で営業を休止していたが、8月11日に運営会社の株式を取得し、100%子会社化した。再生の方針や具体的なスケジュールなどは今後詰める。湯快リゾートは、2004年から加賀温泉郷へ進出し、現在、山代、山中、片山津、粟津の4つの温泉地で5旅館を経営する。今回、芦原に新拠点を置いたことで、南加賀方面の空白地はすべて埋めたことになる。（以下、略）」
- 5) 筆者は、これまで、小規模旅館（～29室）、中規模旅館（30室～79室）、大規模旅館（80室～）と分類して、調査を進めており、今回も前例に従った。国際観光旅館連盟の各種調査では、小旅館30室以下、中旅館31室以上99室以下、大旅館100室以上としている。
- 6) 代表的な論文は次の通りである。  
浦達雄(1992):「温泉観光地における小規模旅館の経営動向」日本観光学会研究報告24、31～38頁。  
浦達雄(1996):「奥能登における観光旅館業の経営動向」日本観光学会誌28、94～100頁。  
浦達雄(1997):「和倉温泉における小規模旅館の経営動向」日本観光学会誌30、53～



- 58 頁。
- 浦達雄(1998):「別府温泉郷における旅館経営の動向」日本地理学会発表要旨集 53、248～249 頁。
- 浦達雄(2000):「21 世紀における温泉旅館経営のあり方」地域社会研究(別府大学地域社会研究センター) 2、18～27 頁。
- 浦達雄(2000):「湯布院温泉における小規模旅館の経営動向」大阪明浄大学紀要開学記念特別号、9～16 頁。
- 浦達雄(2001):「山間温泉地における小規模旅館の経営動向」大阪明浄大学紀要 1、1～10 頁。
- 浦達雄(2002):「泉佐野市犬鳴山温泉における小規模旅館の経営動向」大阪明浄大学紀要 2、9～16 頁。
- 浦達雄(2003):「南紀白浜温泉における小規模旅館の経営動向」大阪明浄大学紀要 3、7～15 頁。
- 浦達雄(2004):「黒川温泉における小規模旅館の経営動向」大阪明浄大学紀要 4、1～9 頁。
- 浦達雄(2006):「温泉観光地における個宿の経営動向」大阪明浄大学紀要 6、9～18 頁。
- 浦達雄(2006):「別府市鉄輪温泉における和風旅館の経営動向」総合観光研究 5、87～94 頁。
- 浦達雄(2008):「別府温泉における小規模旅館の経営動向」大阪観光大学紀要 8、1～8 頁。
- 浦達雄(2009):「城崎温泉における小規模旅館の経営動向」大阪観光大学紀要 9、1～9 頁。
- 7) 浦達雄(2007):「温泉観光地のまちづくり」地理(古今書院)2007 年 6 月号、36～43 頁。
- 8) 北国新聞「北陸の経済ニュース」2009 年 6 月 10 日付ネット配信による。
- 9) 北国新聞「北陸の経済ニュース」2009 年 7 月 29 日付ネット配信による。

# 中国人の日本温泉に対する意識調査

## Consciousness Survey on Chinese Views of Japanese Hot Spring

陳 晶 \* 何 琳 \*\*  
Jing Chen Lin He

キーワード：山東天沐温泉渡假村 (Shandong Tianmu spa resort)・従業員 (employee)・  
管理職 (administrative post)・富裕層 (wealth)・  
海外旅行 (travel abroad)

### 1 はじめに

#### (1) 研究の背景

中国が豊かになり、中国人観光客は驚異的に増えている。1995年には海外旅行に出かける中国人は年間450万人ほどであったが、2005年には3,100万人に増加した。2010年までには年間5,000万人、2020年には1億人が海外旅行をすると予想されている<sup>1)</sup>。

近年、中国経済は高い成長率を継続してきた結果、国民の生活は豊かになってきている。年収が日本円で億を越す富裕層の人口が5,000万人に達した。そのために、中国では年間所得5,000ドルで海外旅行が射程に入り、同1万ドルで当たり前のレジャーになると言われている<sup>2)</sup>。

国民生活が豊かになったことによって、富裕層の生活スタイルは次第に変わり始め、高価な食材（鱻、つばめの巣、鮑など）で作る高級料理を食べるのが人生の幸せだと思ふ人々が増えている。また、海外旅行の解禁によって、数多くの富裕層が諸外国を観光する一方で外国式の休養を体験するようになってきた。その結果、これまでのように食生活だけで満足するという生活だけでなく、健康面への関心も高まりつつある<sup>3)</sup>。

外国への旅行経験がある富裕層たちを中心に、最近では中国国内で外国と同じような余暇が楽しめる施設の需要が増え出した。特に、

中国人の国民性から伝統的に豪華な生活を追求する心を満足させるために、全国各地では高級な温泉娯楽施設、休養・保養施設の建設が始まった<sup>4)</sup>。しかし、経済的に裕福となった国民の多くは、温泉に対する本物志向への欲求は強く、世界有数の温泉国である日本への旅行熱は高まり、中国人海外旅行希望者の中でも多数存在しているのが現実である<sup>5)</sup>。

中国では1990年代中ごろから、中国の各地で温泉観光地が数多く建設されてきた。その施設の多くが富裕層の集中地域や大都市に集中している<sup>6)</sup>。中国の大型温泉観光リゾートのほとんどには、日本風の露天風呂に似せた「日本風呂」があるが、多くの中国人にとっては、外国の温泉特に本物の日本温泉を体験したいという気持ちが次第に高まってきている<sup>7)</sup>。

表1に示したように、1997年に訪日した中国人の観光動向調査によると、温泉はまだ9位だったが、2006年には2位に上昇している。経済発展によって、中国国内都市の近代化が進んでおり、日本国内での大都市を観光する訪日旅行動機から一転して、健康への関心が高まるにつれて、訪日旅行動機は温泉を重要な選択肢の一つになってきている。

中国人の海外旅行者数は2007年の時点で、年間4,000万人以上に達した。一方、日本国内への渡航者数は2005年からの団体訪日の

\* フェリス女学院大 (Ferris University) \*\* 中国鄭州大学 (Zhengzhou University, China)

表1 中国人の訪日旅行動機の変化（1997～2006年）

年次	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位
1997	買い物	日本料理	大都市	寺社	景勝地	テーマパーク	小都市	ショールーム
1999	自然景観	大都市	買い物	寺社	景勝地	小都市	温泉	—
2001	日本料理	大都市	買い物	寺社	景勝地	小都市	温泉	—
2006	日本料理	温泉	自然景観	ショッピング	伝統文化	—	—	—

(注)『世界と日本の国際観光交流の動向』(JNTO) 1999年～2006年により作成。

全面解禁によって年々増え続けている。2008年には、ついに100万人に達したが、日本政府は2010年に訪日外国人1,000万人、2020年の訪日外国人者数2,000万人の目標を達成するためにも、中国人訪日客を現在の100万人から600万人にしたいとしている。そのためには、訪日外国人の3分の2を占める中国人・中国系の観光客に対する旅行動機や観光需要を把握することは、今後のインバウンドを大きく左右すると言えるであろう(図1.2)。

## (2) 研究の目的

本報告は、2008年9月26日に中国山東省威海文登天沐温泉渡假村で行われた「日中韓口国際温泉シンポジウム」に参加した、中国で働く管理職(富裕層)と職員(一般層)合わせて150人を対象に、日本の温泉についてアンケートを実施した結果をもとに、中国人の日本観光に対する意識をまとめたものである。

この調査データに基づいて、中国での高級娯楽・休養型の代表的な温泉観光地の実態、中国人の日本の観光目的地の希望、温泉志向、観光動機などを分析し、最後にインバウンド政策のアンケート調査に対応すべき方策を提案した。本論文が、訪日中国人観光を増加させることに少しでも貢献できることを願っている。

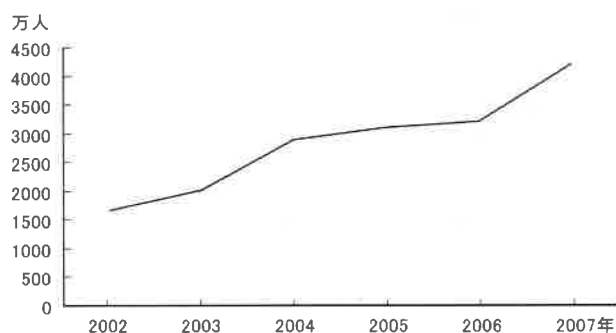


図1 中国人海外渡航客数の推移(2002年～2007年)  
(注)『世界と日本の国際観光交流の動向』(JNTO)より作成。

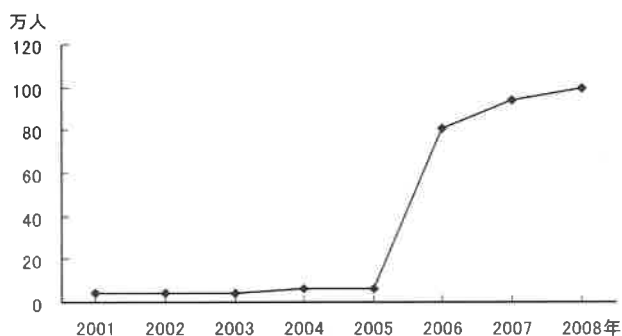


図2 訪日中国人客の推移(2001年～2008年)  
(注)『世界と日本の国際観光交流の動向』(JNTO)。

## (3) 調査の方法と内容

日本に旅行した経験のある富裕層の調査も重要であるが、日本へ行きたくても、現在は収入の面から行けない若者への意識調査も重要である。なぜなら、若者は将来において日本を観光する主役となるからである。

今回、中国山東省威海に新しく建設された温泉観光リゾート地、文登天沐温泉渡假村での「日中韓日露四ヵ国国際温泉シンポジウム」には、日本からの参加者の一人として特

別招待を受けて現地に行くことができた。そこで現地の温泉や源泉、施設の衛生管理、料理、もてなしなどを観察し、中国側の主催者並びに現地政府の責任者、さらに従業員にも聞き取り調査を行った。その結果、中国国内の温泉開発の実態が把握でき、中国の温泉観光地の誘致政策を明らかにすることができた。

中国は社会主義国家であるため、現地でのアンケート意識調査実施には制約があり日本より相当難しい面もあったが、今回は現地主催側の友人の多大な協力によって実現したものである。アンケート調査は、収入、地位、年齢が違う対象への意識調査であることから、その回答の違いによって、中国人の日本温泉に対するイメージ及び需要の違いを初めて把握することができた。

調査項目は、①日本へ行ったことがあるか、②日本の温泉を知っているか、③日本の料理について何が好きか、④日本の温泉地で食べたい料理は何か、⑤日本の温泉地でなにを体験したいか、⑥日本の温泉へ行く場合は誰と同行したいか、など12項目を設定した。今回の報告では、そのうちの6項目について分析した結果を紹介する。

## 2 山東省威海文登天沐温泉渡假村

アンケート調査を行った山東省威海文登天沐温泉渡假村は、自然の亀の形の龜山の上の温泉施設であり、敷地面積は8万平方メートル、珠海天沐グループが文登市張家鎮で日本円にして30億円を投資して建設した高級温泉リゾート地である。2008年8月28日に仮営業を始め、従業員数は400人<sup>8)</sup>、源泉は3キロ離れた湯村という源泉所在地から引湯し、一日の湧出量は2,000立方メートルである。泉質はナトリウム、珪酸、ヨード、セシウムを含むことが判明し、温度は65度（地下からの湧出温度）で、送湯パイプを通して温泉リゾート地内の大浴場、露天風呂などに引き入れている。源泉地から天沐温泉渡假村のパイプ引湯であるため、各浴場に到着する時

には源泉の温泉は35度前後に下がっている<sup>9)</sup>。

建物の外にはプール、効用の違う露天風呂が66ヶ所あり、室内には温泉プール（25m×12.5m）と1,500人が同時に入浴できる大浴場もある。全部で219室ある五つ星ホテルを敷地内に建設、このうち敷地内の湖が見える部屋が119室、庭園が見える部屋100室がある。800人が同時に食事できる宴会場もあり<sup>10)</sup>、海外市場を意識してか、日本と韓国客人のために、日本料理と韓国料理の専用レストランもある。また食品の安全面では、料理に使用する材料をすべて無農薬栽培のものに限っている。

中国国内市場を主に政府及び企業の会議に期待しているため、400人の席数がある大型会議室があり、国際会議にも利用できるように同時通訳の設備もある<sup>11)</sup>。利用客の温泉入浴後のサービス施設としてはマッサージ室、ヨガ館、囲碁・将棋室、理容・美容室、ネットカフェ、カラオケ、健康センター（ジム）、ゴルフ練習場、テニス場などの設備もある。この温泉施設では、周辺の省及び市の富裕層の利用を期待し、日帰りコース（入浴だけ）1人188元や一泊1,000元（約1万5,000円）を推薦している<sup>12)</sup>。

温泉施設は、あくまでも富裕層が利用するために建設されているため入浴料は高い。従って現地周辺住民はあまり利用しない。市民は、文登市内にある一人あたり5元（約75円）の大衆温泉浴場をよく利用している<sup>13)</sup>。



写真1 山東威海文登天沐温泉渡假村の全景  
(注) 2008年パンフレットから転写。

### 3 アンケート調査の分析

調査場所：山東省威海文登天沐温泉渡假村
調査時間：2008年9月26日
調査方法：選択記入式アンケート
調査対象と人数：企業管理職(年齢20代～50代)(50人配り回収率は48%)
ホテル従業員(年齢10代～20代)(100部配り回収率は32%)

アンケート調査による分析結果は以下のとおりである。

#### 【質問1】 日本に行ったことがありますか

調査の結果、管理職の人たちの約7割は日本に行ったことがあるのに対して、ホテル従業員は全員が日本へ行ったことがない。管理職の人たちは業務および観光目的で日本へ行った経験があり、海外へ行く場合には日本を選択する人が多いことが明らかになった。近隣の先進国日本は、中国人の管理職や富裕層にとっては海外の旅行先としては最も理想的な国と考えられる。

若年層の人たちは、現時点で全員が経済的及び業務のチャンスに恵まれず、いまだに日本へ行ったことがないことが分かった。その理由は明確でアンケートに回答した従業員たちの経済的理由によるものである。

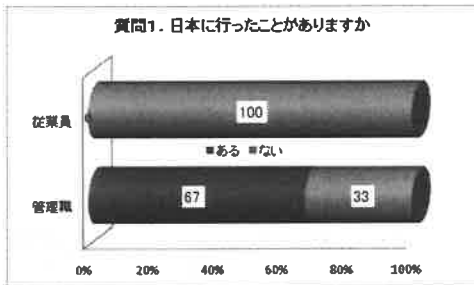


図3 アンケート調査の結果(1)

#### 【質問2】 日本の温泉を知っていますか?

日本の温泉についてのアンケート結果によると、中国人の管理職つまり富裕層はほとんど知っていると言った。中国の富裕層は日本の温泉に対して、真正であり世界一の温泉利用国というイメージがある。しかし、温泉に興味をもつ若い世代の場合は、大半の若者が日本の温泉

をあまり知らないのが実情である。

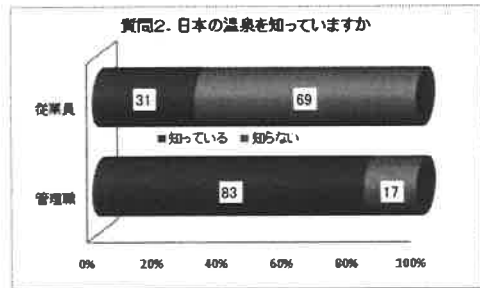


図4 アンケート調査の結果(2)

#### 【質問3】 日本の料理では何が好きですか?

日本料理のなかで、管理職の人たちは新鮮で比較的高価な刺身を食いたいと答えているが、若年層の人たちは中国でも寿司を売っているコンビニがあるため、食べたことがない刺身よりも寿司を選んだ人が多かった。来日経験がある管理層の人たちは、日本のラーメンは中国料理の味と調理法が類似しているため、中国人にとって受け入れやすい日本料理だと考えられる。

日本に来た経験のない若年層がラーメンよりも、味噌汁を選んだ人が大勢いる。味噌汁は中国でも食べる習慣があり、例えば中華料理の麻婆豆腐の中には中華味噌のトーバンジャンを使っている。さらに、味噌汁は温かいスープというイメージなので、中国人は温かい料理を食べる習慣があるため、生ものや冷たい日本料理も体験したいものの心理的に多少抵抗があるようだ。

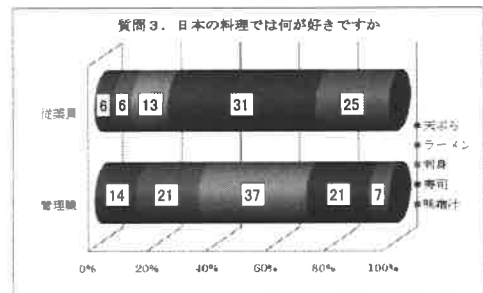


図5 アンケート調査の結果(3)

【質問4】 日本の温泉地で食べたい料理は？

管理職では、両方ともを選択する人が多い。日本に来た場合、毎日が日本料理というのは好まず、かといって毎日が中華料理でも困るというのである。つまり、日本料理と中華料理の両方を適切に調整することが肝要であろう。

中国人は海外へ行く前、当然ながらほとんど毎日中華料理を食べている。日本人のように洋食といった外国の料理を常に食べられるわけではない。そのために、中華料理以外の外国料理には慣れていないのである。どの国に行っても、一日三食が外国料理ではストレスが溜まるのである。しかし、せつかくの海外旅行なので、外国料理を食べないと外国に来たという実感もわからず、やはり好奇心やチャレンジ精神で外国料理を食べてみたいと思うのが心情である。ただ、中華料理は主に調理済みの熱い料理が基本なので、生が多く冷たい日本料理は中国人客には好まれない料理であろう。従って、来日する中国人客のために温かい日本の鍋料理、うなぎ丼、ふぐ鍋、天麩羅などを調理した料理を提供することを薦めたい。

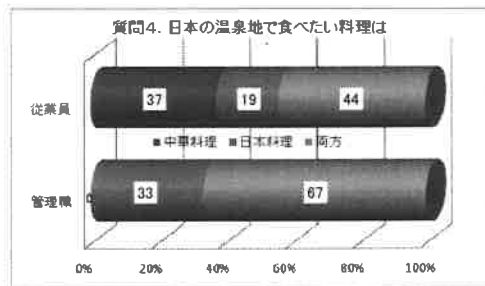


図6 アンケート調査の結果(4)

【質問5】 日本の温泉地で何を体験したいですか？

管理職の人たちは露天風呂に特に興味を持っている。これは、日本の露天風呂を体験したことがあるからである。そのため、典型的な日本風の露天風呂は、中国への宣伝効果が高い。日本の露天風呂と中国で体験した「日

本風露天風呂」とを比較してみると、やはり日本の露天風呂はすばらしいと思ひ、本物の日本の露天風呂をもう一度体験したいという気持ちが強いようである。その感情を満足させるためには、日本の露天風呂の外見やスタイルだけではなく、日本の室内風呂から露天風呂へのアクセス、あるいは露天風呂の衛生を保つためにろ過した温泉水を24時間流し続ける特徴などを中国本土で宣伝する必要がある。中国の温泉観光地の露天風呂は24時間のかけ流しではなく、一日に1回水を入れ替えることが多い。清潔面では日本の温泉と比べるとまだ不十分である。

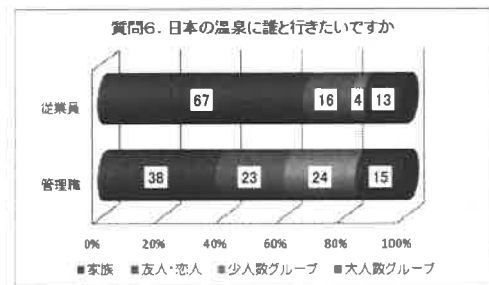


図7 アンケート調査の結果(5)

【質問6】 日本の温泉へ行く場合は誰と行きたいですか？

中国人が日本の温泉を訪問する際には、やはり家族と一緒にいくという回答が圧倒的であった。中国人にとって、血が繋がっている関係が一番親しい関係である。昔から、家族がなによりも大事だとの意識が強く、夢の海外旅行は家族と一緒にいきたいというのは当然である。

管理職の人にとっては、家族揃っての海外旅行は周囲に自慢でき、事業の成功あるいは仕事の成功をアピールする一つの基準となっている。それだけに家族と水入らずの少人数海外旅行を選ぶ人は多い。それに比べると若年齢層たちは、家族は別にして少人数の旅行よりも賑やかな集団、あるいは友達同士での旅行を選んでいるのが注目される。若者の志向を考えると、温泉地に娯楽施設や歓楽的な

ものが必要となってくる。

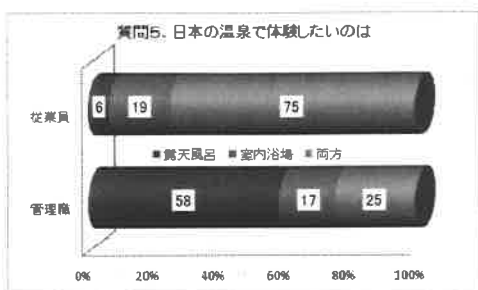


図8 アンケート調査の結果(6)

#### 4 むすび

中国人の訪日客数は、2005年の中国全土への日本観光解禁以後、毎年着実に増加している。2007年夏以降、アメリカ発金融危機の影響で、日本を訪問する外国人数が急激に減少し、特に1位を占めている韓国人の入国者数が大きく減っている。しかし、日本のインバウンドにおける12の重点国・地域のうち、中国人訪日者数だけ増加している。

中国人の海外旅行者はすでに世界の観光市場で注目され、インバウンド観光の振興は中国人旅行者の増加によるものとして期待が大きい。中国人の海外旅行はまだ初期の段階で、団体旅行を中心としているのが特徴の一つである。中国人の海外旅行はまだ完全に自由化されてはいないが今後、中国の経済成長で国民の収入がさらに増えることによって、海外旅行者数は大幅に増え世界有数の旅行大国となることが予想されている。残念ながら現在はまだ、訪日中国人の嗜好および動機などについての研究が不十分である。

日本国観光庁は2010年までに訪日外国人2,000万人の目標を掲げたが、その目標を達成するために最も期待されているのが訪日中国人であり、年間600万人にまで増加させるべきだと明言している。それを実現させるためには、訪日中国人が体験したい日本の観光スポット、慣習、文化などを再検討する必要がある。さらに、年々人気上昇する日本

の温泉観光地では、中国語に対応できる仲居や従業員の育成、中国人の好みに合う和中華料理の提供、風呂の入浴法、夜の娯楽の用意など、様々な面で日本のホスピタリティが感じられるように積極的に工夫すべきであると考えられる。

#### 注・参考文献

- 1) 読売新聞「歓迎 中国人観光客様…20年には1億人に」という記事を掲載(2007年06月04日付け)。
- 2) R15(アールジュウゴ)で「中国の“富裕層”すでに一億人を超えた」と記事を掲載(2007年5月24日号)。
- 3) 沈才彬(2005)「日中双方ビジネス—急激に変化する中国の共創関係作り」『RELATION』5月号。
- 4) 陳晶(2008)「中国の北京市と広東省における温泉施設の一考察」『温泉地域研究』、10号、86～90頁。
- 5) 孟昭勇(2006)「温泉旅游熱起来」御温泉『中国旅遊知網』。
- 6) 前掲4)。
- 7) 若水(2006)「温泉旅游期待文化創新」『中国旅遊報』。
- 8) 山東省威海文登天沐温泉渡假村の支配人唐軍成氏からの聞き取りによる。
- 9) 前掲8)。
- 10) 文登市の資料による。
- 11) 前掲10)。
- 12) 山東省威海文登天沐温泉渡假村の人事部責任者劉氏の聞き取りによる。
- 13) 山東省文登市投資促進局の李霞氏の聞き取りによる。

#### その他参考文献

- 山村順次(2004)：『世界の温泉地 発達と現状(新版)』日本温泉協会、215～240頁。
- 前田 勇(2007)：『現代観光とホスピタリティ サービス理論からのアプローチ』学文社、113～120頁。
- JNTO『国際観光白書』『世界と日本の国際観光交流の動向』2001年版～2007年版など。

# 海水浴・潮湯・海水温浴と温泉の類似点と入浴文化の考察Ⅱ

## Consideration of Similarity and Bathing Culture between Sea Bathing, Sea Water Hot Bathing and Hot Spring, II

進藤和子\*  
Kazuko SHINDO

キーワード：潮湯 (sea bathing) ・海水温浴 (sea water hot bathing) ・温泉 (hot spring) ・  
海洋深層水 (deep ocean water) ・タラソテラピー (thalassotherapy) ・石  
室 (stone hut) ・潮溜まり (tide pool)

### 1 はじめに

筆者は、「温泉地域研究第11号」において潮湯についての発表した。その内容は古来の潮湯、西洋医学の導入期である明治期の潮湯に関して、塩化物泉と海水の比較考察を行ったものである。今回は、前回に引き続き潮湯についての調査研究として、潮湯の成り立ち、加温方法などを具体的な例を挙げて、常人が潮湯とどう親しんできたかを述べることにしたい。

### 2 研究の目的と方法

研究目的は潮湯文化の歴史を詳らかにし、塩化物泉と同様の潮湯効果を実証することである。その方法の一特徴として、明確にしておきたい点に風呂と湯の区別がある。

現在は風呂というと、浴槽に溜めた適温の湯の中に浸かる入浴方法と解釈されるが、入浴習慣の記録が始まる奈良時代には、「風呂」は蒸し風呂、「湯」は温かい湯や温泉に入浴する事であった。

『風土記日本・中国・四国篇』では、「浴場を関西ではお風呂とよび、関東ではお湯と一般によんでいる。風呂は室むろと同義のことばであり、もと熱気あつのこもった部屋にはいってそこで汗をながし、心身をさわやかにするのであり、湯は温かい水のことで、そこにつ

かってからだのよごれを取り去ることを目的としたものである。つまり齋いとおなじ語で物忌みの意味をもっている」<sup>1)</sup>とその違いを記述している。潮湯では、この入浴法の違いを現在でも名称で区別することができるのが特徴といえる。そこで筆者は、「湯」である海水を浴槽に溜めて温めて浸かる潮湯（海水温浴）と、「風呂」である海水や海藻を使用する蒸し風呂の石風呂の両者とも潮湯とみなし、調査・研究を行った。

### 3 潮湯入浴の意義

海水を入浴に使用した動機については、海辺で生活する常民の生活の知恵として自然発生的に偶然で行われたと推察できる。その生活記録はとて少ないが、潮湯を調査していくうちに多彩な面を持つことが分った。ここでは4項目に分け、文献や現地調査の例をあげて潮湯入浴の動機について考察する。

#### (1) 海水のもつ効能

江戸時代の記録として、茨城県鮎川浜（日立市）に明治期に建てられた鮎川浴潮湯碑の碑文<sup>2)</sup>がある。概略は「黒沢翁善右という者有り。身体孱弱にして痔患有り、病間に鮎川の海浜を逍遙し、潮水、礁間に湛えて沸いて湯と為る者を見る。衣を脱いで之に浴す。居ること数旬、痔患全く除いて身体強健、殆

\* 雑誌ライター (Magazine Writer)



んど別人の如きなり、実に天保年間に係る事と云う」(筆者抜粋)とある。浜辺で温まっていた潮溜まりに偶然浸かって病が治ったので、潮湯の効能を広めたいと潮湯の入浴施設を造った経緯が書かれている。

また、同じ鮎川浜に「安政年間此の地に潮炊小屋あり、関丑次郎なるもの(中略)胃病に効果ありと確かめ(中略)海水を沸かし入浴するに至る」という記述も残っている<sup>3)</sup>。ここには、明治中期に6軒の潮湯旅館が造られ、昭和30年代まで潮湯に入浴できる旅館もあった(写真1)。



写真1 鮎川浜にあった潮湯旅館

明治期になると、西洋医学が海水浴だけでなく海水を温めて入浴する疾病治療法を明確に謳ったために、民間療法であった潮湯が医学的に裏づけられて全国的に急速に広まった<sup>4)</sup>。この療養のための海水浴場は、医師松本順の提唱で1885(明治18)年に神奈川県大磯町に開かれたのが嚆矢とされ、その後鉄道の発達とともに全国に多数開設された。潮湯(海水温浴場)が海辺の旅館に内湯として完備され、温泉が近くにない地域では夏場だけではなく、湯治場として1年中営業する例も多く見られた。また、海洋・海水療法を主眼とした高級療養施設である「海浜院」も、1887(明治20)年に医師長与専斎の提唱で神奈川県鎌倉に設立され、続いて大阪府浜寺・天保山、千葉県稲毛などに開設されている。

現在では、フランスやドイツで盛んな海水、海洋療法のタラソテラピーが注目され、現代

病や美容に効能があるという点で各地に海水温浴場を持つタラソテラピー施設・健康増進施設などが造られている。タラソテラピー施設は、2009年8月現在で北海道から沖縄まで25ヵ所ある。その内容は海水をリラックス効果が高いとされる33℃~36℃の不感温度に温めたプールや、38℃くらいのジャグジー、入浴適温の40℃~42℃ほどの潮湯などがあり、入浴するだけでなく、温めた海水中で運動を機能障害のリハビリや、腰痛・ストレス・高血圧・糖尿病などの現代病予防、美容効果など多目的に活用されている。実際に潮湯・海水温浴施設を調査してみると「温まる、足腰の痛みが和らいだ、アトピーが治った」などの声を利用者から聞くことができ<sup>5)</sup>、「あせもがよくなる、風邪がひきにくくなる、胃腸病が改善される」など、以前から民間に言い伝えられていた潮湯の効能と重ね合わせることができる。以上の事柄から、海水を使った潮湯入浴の効能に注目して潮湯が造られたことが推察できる。温泉の効能と比べてみると、皮膚病・アトピーも・胃腸病・冷え性などに効能がある、塩化物泉と同様な効能が多い点にも注目したい。

## (2) 真水が得られない地域

地形的に水を得られない地域で、海水を利用して入浴していたという潮湯が昭和の後半までであった。最初は必要に迫られ海水を使用していた潮湯も、入浴するうちに健康増進効能などを実感し、水道が完備されても温泉のない地域で温泉の代わりとして続いたという特徴もある。

広島県の「旧しおゆ住田」の4代目住田孟談によると、「広島市南区日宇奈地区は、今は埋め立てられているが海岸線に沿った地域であった。真水の井戸や水道が無くて入浴には海水を沸かして使用しており、個人宅でも海水を沸かしている家があった」という。「旧しおゆ住田」は、蒸し風呂である石風呂も併設されていて、1897(明治30)年頃から2006(平成18)年まで100年以上営業し

ていた。この日宇奈と近隣の丹那にも、2003年まで石風呂と潮湯を持つ「丹那石風呂」があった。

鹿児島県の西之表市でも、水が潤沢で無いことから潮湯が長期間利用されていた。南種子町文化課の石堂和博談によれば、「鹿児島県種子島（西之表市・中種子町・南種子町）にはセプロと呼ばれる潮湯が多数あった地域である。そのうち、西之表市では昭和頃まで井戸を掘っても涸れてしまい、真水は山からの湧水を利用して貴重であった。それで海辺にあるツボキと呼ぶ天然の岩穴に干満の差を利用して海水を溜めて、潮湯として入浴していた」という。

また、船舶の浴槽にも海水が使用されている。現在でも多人数が乗り組む航海練習船では、清水の供給が間に合わないので大浴槽には海水を使い、上がり湯だけ清水を使用している<sup>6)</sup>。船舶の浴槽の海水使用の歴史ははっきりとした記録がないが、かつては遠洋航海船でも海水を使用していた証言もある<sup>7)</sup>。

水道が完備されても利用者の多かった潮湯は、各家庭に風呂が出来、近くに温泉センターが設置されたり、ボイラーや施設の老朽化など、時の流れで衰退していく。

### (3) 井戸から海水が湧出

海辺の地域では、海水が混じる井戸があり、温泉も塩化物泉が多いのは周知のことである。大阪府堺市には、伝説と史実を併せ持つ海水が湧出した井戸があり、潮湯として使用されていた記録がある。旧塩風呂小路（現堺市大町大町の西六間筋）にある旭蓮社（現大弥陀経寺）に伝わる海水が湧く井戸がそれで、文献の書き下し文を次に提示する。

「1300年ほど前に行基菩薩此地に井戸を掘り、自ら造った石仏の薬師像をその中に納めたところ、この井戸が海辺より程遠いにもかかわらず塩水が湧き出た。この井戸水でわかした風呂に浴すると、諸病必ず平癒するという評判が立ち、遠近よりこの風呂に浴するために集ったということである。（中略）天

正年間太閤秀吉公も有馬入湯の帰りに、毘沙門堂（旭蓮社境内）に参詣し、この塩風呂に浴すると噂の如く病気にきいた<sup>8)</sup>。その効能により、秀吉は入浴規定を作らせ、塩風呂諸役免除として厚遇した。この朱印状は現存し（写真2）、伝説と史実を併せ持つ興味深い潮湯といえる。

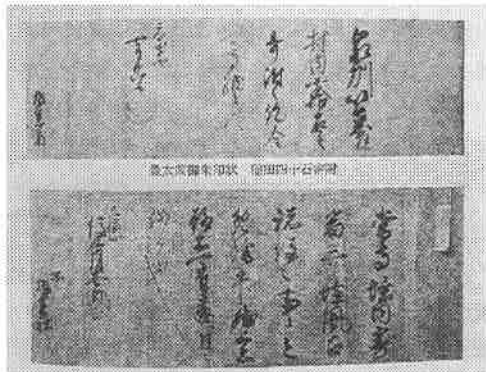


写真2 旭蓮社に残る秀吉の朱印状

最近造られた潮湯にも、近くの海底に井戸を掘り海水を揚げて使用する施設が各地で見られる。鹿児島県志布志湾にある「大黒リゾートホテル」では、「街が整備される昭和25年以前に井戸を掘って生活していた民家では、次第に海水が混ざり井戸水を入浴に使うことになった。すると、皮膚病が治るなどの効能がわかり、塩風呂を沸かす風呂屋が出来ていった」という記録から、海水の井戸水を使った潮湯をホテルの特徴として売り出している。

その他にも、静岡県「初島アイランドリゾート島の湯」、長崎県佐世保市「魚魚の宿」、愛媛県「上島町弓削・海水温浴施設潮湯」、大分県の「佐伯市鶴見パゴパゴ村」など、井戸を掘って海水を揚げて潮湯に用いている。前回の報告で示したように、海水と塩化物泉の成分は類似しており<sup>9)</sup>、ボーリングなどで揚水した場合、塩化物泉（冷泉）となりうるのではないかという成分上の温泉認定の基準判断は難しいが、この比較検討については別の機会に論じたい。

#### (4) 海洋深層水利用

海洋深層水とは、水深 200 m 以深の海水を示す。光合成で行われる有機物が生産されないという清浄性を特徴に、食品、肥料、入浴用海水、発電など多方面に活用できる資源として 1970 年代に開発が始まった事業である。現在、取水施設は全国で 10 カ所である。海洋深層水が海水温浴施設で使用されているのは、室戸・滑川・能登・久米島・焼津・赤沢の 6 カ所で、うち多数の施設に供給しているのは、能登が 5 施設、滑川が 2 施設、室戸が 3 施設である。タラソ施設での利用は、全国 20 施設のうち 5 施設が海洋深層水を利用している。

これらは海に囲まれていて取水は容易であるが、自治体などからの補助を受けていない運営は安易ではないといわれる。2009 年 3 月、神奈川県三浦市にあった三浦海洋深層水取事業が 8 年目で撤退した。公的資金を導入しない初の民間事業であったが、海洋深層水利用事業は難しい点もあるといえる。

### 4 潮湯の加温方法

海水を利用した入浴法は、潮湯(海水温浴)、石風呂(蒸し風呂)、海水浴がある。3 者とも、民間療法、骨休め、娯乐的などという点で、温泉利用と同様な使われ方をしている。海水浴を除き、入浴するには加温が必要である。海水を使用するということもあり、加温方法には工夫も見られるので、潮湯と石風呂両者の加温方法を述べることにする。

#### (1) 潮湯(海水温浴)の加温

湯船などに海水を溜めて温めた海水の中に浸かる入浴法であるが、大きく分けると①自然に温まった潮溜まりに浸かる、②人工的に加温するの 2 方法になる。

①自然に温まった潮溜まりに浸かる。

きわめて自然発生的で、海水浴や磯遊びの際に経験できるので実感しやすい。実際に、入浴できる温度について計測してみた。その結果、夏季の正午前後であれば、心地よい入

浴温度になりうることが分った(表 1・表 2)。

表 1 外気温と海水温度の変化

時刻	気温	海水温度
10 : 30	32℃	28℃
11 : 30	33℃	32℃
12 : 30	35℃	34℃
13 : 30	31℃	34℃
14 : 30	31℃	32℃
15 : 30	31℃	32℃

(注) 器 30×27×17cm 20l の海水

表 2 外気温 34℃時の潮溜まり温度

海辺よりの距離	潮溜まり温度
1 m	32.5℃
2 m	34 ℃
3 m	36 ℃

文献に見られる例としては、1893(明治 26)年に平磯海水浴場誌に「天然にして高磯と称するところに大畧一町四方余海中に突出し東南北は巖石の為め圍繞せられ底も同じく石よりなり浅き所は寸位深き所と雖も能く四尺を出て時々洋中より織波(洋中に関門の如く突出する石の為激波碎けて其余波)来り坐臥行歩自由に浴するを得可き所あり日中は非常の温度を有し間々百度以上に至る事あり宜なり医学博士佐藤進先生此の地を當町黒澤源七郎氏を志て此微温浴場を(中略)如此浴場は一番二番三番と稱す五六ヶ所あり」<sup>10)</sup>とある。

この一文から、茨城県ひたちなか市(旧那珂湊市平磯町)の平磯海岸にある自然の岩でできた潮溜まりが、温浴場となっていたということが分る。文中の百度というのは、当時使われていた華氏であり、摂氏になおすと約 37.8℃である。筆者が計測した海岸潮溜まりの温度とほとんど変わりなく、これくらいの温度の潮湯に入浴していたことが分る。他にも同じ地区に残る昭和初期の絵葉書には「姥ノ懐天然浴場」と書かれた大きな岩の窪みに浸かる人々の様子、「阿字ヶ浦天然万人風呂」

と岩に大きく書かれた文字を読むことが出来る<sup>11)</sup>。前出した同じ茨城県内鮎川の潮湯の参考文献にも、温まった潮溜まりに入浴したと記されている。

また、和歌山県田辺市の三壺崎では甕が3つあって、そこに海水を入れて浸かった。広島県田尻町では、藩主が病気を治すために浸かったといわれる場所がある。これらの資料から、天然潮湯は自然発生的には岩で囲まれた潮溜まりであるといえよう。偶然に海水が溜まる大きな器があることなど、その背景に条件と地域性があると思われるので、さらに調査を続けたい。

## ②人工的に加温する。

現在では、ボイラーで加温するのが一般的になっているが、海水を使用するので地形的な問題、塩害の問題などを解決するための工夫がなされている。

### A 焼き石で温める。

原始的な湯を沸かす方法が塩湯に用いられていた。方法は浴槽に海水を運び込むか、海水が自然に溜まる磯の岩の湯船に、焚き火で焼くなどした拳より少し大きめの石を投げ込んで潮湯を温める方法である。茨城県・日立市鮎川浜、鹿児島県・種子島などで昭和中頃まで行われており、実際に潮湯に入浴した体験者がいる。焚き火で石を焼く場合は、熱で弾けない砂岩を使用したらしいが、前出の鮎川浜での聞き取りによると、青い石を使い石の焼き方にも工夫が見られる。「青い石については、硬い丸平形でこれの大きさは20センチ位のものを使用した。石を焼く炉は70センチ角で高さは1メートル位煉瓦や粘土で造ったもの（自家製）で、この中に20個位の石を入れ、薪と石炭で1時間半ほど真赤になるまで焼き、海水を入れた風呂に鍛冶屋で使用する大型の火箸で挟み投入して沸かした<sup>12)</sup>と記録されている。

### B ボイラーで温める。

一番多い方法であるが、釜が傷むという欠点がある。燃料も薪、重油、ガスなど様々で

ある。潮湯の良さを伝え守りたいと、鹿児島県針原潮湯温泉ではステンレス製のボイラーを薪で焚くように、設計改良を重ねて造ったという例もある（写真3・4）。

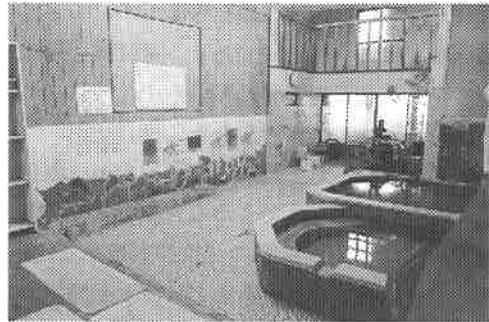


写真3 針原潮湯温泉の浴槽



写真4 改良したボイラー

筆者が行った現在営業中の潮湯へのアンケートでは、回答があった30施設のうち、ボイラー使用は18施設であった。

### C 熱交換で温める。

風呂釜の傷みを防ぐために、熱交換で温めている施設もある。通常は暖かい湯の中に海水の通るパイプを通して海水温を上げるが、次に珍しい方法で行っている例を提示する。広島県忠海で現在も行われているのものは、石風呂（蒸し風呂）の石室の壁に海水を入れたドラム缶を並べ、中で焚き火をして石風呂を仕立てる際の熱を利用して浴槽に配湯する海水を温めている。近年造られた施設に関しては、前出のアンケートでは熱交換は30の施設のうち9施設であった。

### D 蒸気を吹き込む。

海水に熱い蒸気を吹き込むことで温度を上

げの方法で、現在でも行われているのは、航海練習船の潮湯である。かつて行っていたのは広島県の「旧しお湯住田」で、ボイラーで沸かす前は蒸気を使用していた期間もある。これと似ている例は、富山県滑川市にある塩湯（現在は真水銭湯）であり、電気棒を使用していたことが報告されている。

E 湯を沸かし海水でうめる。

安易な方法として行われているのが、湯を熱めに沸かして海水でうめる方法である。調査現段階では、愛媛県の「桜井石風呂」、福岡県の「汐湯の里」があるが、海水と湯の割合は不明である。

## (2) 蒸し風呂としての入浴

まず、蒸し風呂である石風呂を簡単に説明すると、石風呂というのはイシブロ、イワブロ、イワナなどと呼ばれ、岩を削り貫いたり、岩や石版を組むなどして石室を造り、その中で焚き木を燃やし、内部を 100℃ 近くに上昇させるものである。焚き物が燃え尽きた後に灰をかき出し、箆に海水や真水をかけたり、アマモなどの海草や、香草の石菖などを敷いて、塩分を含んだ蒸気をたてて利用する蒸し風呂である。発祥年代は、はっきりしないが、江戸時代から明治にかけて盛んであり、昭和半ばまで瀬戸内海地方、大分県、熊本県、鹿児島県（主に種子島）に多く見られた。現在は遺構となった石風呂がほとんどであるが、営業している石風呂もある。また、石風呂に潮湯が併設されている場合もあることに注目したい（写真5）。

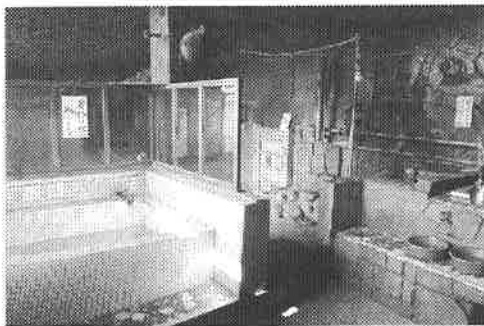


写真5 忠海の石風呂と潮湯（広島県）

その他、現在は行われていないが、上記の方法とは違って海水を大きな釜で沸かし（焼き石の場合もある）、その上にスノコを敷いて蒸気をたて蒸し風呂にする方法もある。石風呂に関しては地域的偏在があり、外来の風呂文化の伝播、国内での分布など興味深い。これらに関しては重要で緻密な研究報告もなされているので<sup>13)</sup>、筆者は今後とも石風呂に併設されていた潮湯に関して調査研究を進めていきたい。

## 5 まとめ

今回の報告では、潮湯の実際の入り心地などに触れることは出来なかったが、簡単に述べると「べたつきはほとんど無く、温まる」という利用者の意見が多く聞かれた。このような潮湯の現地調査をしてみると、発達、地域性、入浴文化、伝承、施設など多岐にわたる歴史的資料や証言があることがわかった。今後、これらの集成を行い、研究を進めたい。

## 注・参考文献

- 1) 宮本常一等編集：1960（昭和35）年平凡社、240頁。
- 2) 日立の碑：34～35頁。
- 3) 島崎健一（1999）：『耕人』139頁。
- 4) 進藤和子（2008）：『海水浴・潮湯・海水温浴と温泉の類似点と入浴文化の考察』温泉地域研究、第11号、23～25頁。
- 5) 筆者調査（2008年）による。
- 6) 海洋開発機構：広報課
- 7) 78歳の遠洋航海乗組員男性の話による。
- 8) 「堺市史」・（1991）「旭蓮社」17頁。
- 9) 前掲4)
- 10) 平磯海水浴場誌：1893（明治26）年9頁。
- 11) 平磯の懐かしい時代（ホームページ）
- 12) 島崎健一（1999）：『耕人』139頁。
- 13) 民俗学者宮本常一、愛知大学の印南敏秀、筑波大学の小口千明各氏の各著書論文参照。

## シンポジウム

### 山中温泉における共同湯を核とした町並み整備

コーディネーター：石川理夫（温泉評論家）

パネリスト：鹿野恭弘（医王寺住職）

〃：桜井比呂之（ゆげ街道協議会長・山中商工会副会長）

〃：吉本加代子（お花見久兵衛代表取締役・山中温泉女将の会ぼたん会）

〃：上口昌徳（山中温泉観光協会会長・かよう亭代表取締役）

#### 1 はじめに

2009（平成21）年5月24日（日）・25日（月）の2日間、石川県加賀市の山中温泉で開催された日本温泉地域学会第13回研究発表大会の最終日午後、「山中温泉における共同湯を核とした町並み整備」をテーマにシンポジウムが行われた。山中温泉は「開湯千三百年」といわれる歴史の古い温泉地で、中世には蓮如上人が入湯し、江戸元禄年間には『奥の細道』紀行の松尾芭蕉が滞在して、源泉の魅力、持ち味をすどくつかみとった句「山中や 菊もたお（手折）らじ 湯の匂」を詠んでいる。近隣の山代温泉、粟津温泉、片山津温泉と共に加賀温泉郷を形成し、いずれも「総（惣）湯」と呼ばれる温泉地域共同体のシンボルである伝統的な共同湯を核に温泉町を形成してきたことでも、日本の温泉地域史に大きな意義を持つ温泉地である。

山中温泉では地域の活性化へ向けて、この総湯「菊の湯」広場の施設整備に続き、総湯広場から山中温泉再興に寄与したとされる長谷部信連を奉る長谷部神社方向へ延びる「ゆげ街道」と呼ばれる通りの道路拡幅に伴う町並み整備に地元が共同で取り組んできた。

また、訪れる客に温泉街を散策してもらおうと、観光協会が「おすすめ散策コース」を3コース設定。温泉街を1周40分で1日10周巡るオリジナルデザインのバス「お散歩号」を走らせ、旅館の女将や店主をはじめ地元の「まち人ガイド」が案内したり、伝統文化である山中節のコンクール、温泉街に沿って流

れる名勝・鶴仙溪で「川床」セットを振る舞うなど、さまざまな温泉街活性化の取り組みを行っている。そうした取り組みの経過及び意義を共有するために、パネリストの方々とシンポジウムを行った内容の要旨を報告する。

#### 2 共同湯「総（惣）湯」を通じた交流

最初に、山中温泉の歴史と独自の温泉文化について、パネリストで地元の由緒ある温泉寺にあたる国分山医王寺の鹿野恭弘住職が報告した。

山中温泉に貢献した人物として4人が挙げられる。最初は行基上人で、温泉発見物語の主人公である。その温泉発見から絵巻に描いた医王寺所蔵の『山中温泉縁起絵巻』の中に白山信仰の修験者が出てくる。おそらく山中温泉の開湯には加賀の霊峰・白山への信仰にかかわった人たちが関与したのであろう。

次は、武家の時代になって鷹狩りの途中、山中温泉の荒廃していた泉源を見つけて再興したといわれる能登の地頭・長谷部信連で、12人の家来を伴っていたというのは、薬師如来と12神将をなぞらえたものであろう。

三人目が本願寺の蓮如上人で、山中温泉を訪れて入湯したのは500年以上前の一方向一揆の時代であった。そして四人目が松尾芭蕉である。芭蕉の逗留以後、文人墨客の山中来訪が増えた。芭蕉は宿にした泉屋の若い主・久米之助に「桃妖」の号を与えて、俳諧の道

の精進を期待した。以降、桃妖は金沢や各地の俳人・文人との交流を続け、明治になって芭蕉堂ができる、多くの俳人が来訪するようになり、山中温泉の知名度はさらに高まった。

山中温泉で育った者にとっては、共同湯の「総湯」が小さい頃からなじみの場である。山中の温泉は断層線に沿って湧出し、泉源に限られて周囲の旅館に分湯できないので、身分や老若男女を問わず唯一の入浴場所である総湯を共同利用してきた。共同湯の場を通じて地域住民や訪れる人との交流が生まれ、その中から山中節も生まれた。共同湯の総湯が文化の発祥の地でもあった。

### 3 ゆげ街道の店舗活性化へ地元の合意づくり

次に、パネリストの桜井比呂之氏から、ゆげ街道の町並み整備の経過と地元の取り組みについて報告がなされた。

#### (1) 本業+山中らしいもう一品

ゆげ街道については1993（平成5）年頃、当時6mしかなかった道路を13mに拡幅したいという話が石川県のほうから出ていた。ゆげ街道の商店街は30店ほど。主に山中の伝統工芸である漆器を売る店と旅館産業が基幹であった。山中温泉では地元商店での購買率が40%ぐらいだったのが14%にまで低下しており、近隣に大型店舗が2つもでき、街の活性化が問題になっていた。

ゆげ街道の拡幅の話きっかけに、地元ではまず勉強会を立ち上げ、古い町並みの活性化に成功した滋賀県長浜市や大分県の由布院温泉の取り組みなどを視察に出かけた。1995（平成7）年に実施した観光客散策調査結果をみると、山中温泉の宿泊客の半数は宿から温泉街に出ていないことがわかった。そして出た人のうちその半数は鶴仙溪の名所であるこおろぎ橋とあやとり橋を訪れているが、せっかくその間にあるゆげ街道の商店街には立ち寄っていないこともわかった。

そこで1カ月間地元で模擬店舗実験をしてみた。今までなかったお茶漬けやコーヒーを出す店、伝統漆器の店などを出して、そのときアルバイト派遣ではなく、旅館の主人や女将に店番・接客をしてもらった。そうすると売上げもよく、みんなが「これなら行けそうだ」という実感をもったのが大きい。

道路を拡幅した場合、地元の店舗を残すにはどうすればよいか、ということから、まず店舗の営業時間帯については、城崎温泉のように何カ所もの外湯巡りが盛んな兵庫県城崎温泉などとは異なり、山中温泉の特性から営業時間を日中に徹しようということになった。そして営業品目を「一店舗二業務（業態）」、つまり本業を大事にした営業品目に加えてもう一点、山中温泉らしい芸術文化性の高い品目・業態を付け加えようということになった。

#### (2) 温泉街の景観形成

たとえば、酒屋なら本業の酒品目に加えて漆器でつくった酒の器をそろえる。漬物店でも漬物だけでなく漆器を並べる。八百屋さんが野菜に加えて主人の趣味のペーパークラフトを見せる、といった具合であった。人々が安らぎに訪れる温泉地の街並みはやはりきれいでないといけない。そのために各店舗も努力しようということであった。

山中温泉は歴史があるが、1931（昭和6）年の大火で焼失し、蔵などは残っていない。蔵などがあればそれに合わせた建物や町並みにしていけるが、このままでは放っておくと何が建つかわからない。そこでゆげ街道の建物は高さ規制（17m）、色（暖色系）、看板の大きさをそろえることにした。周囲に木を植えたり、花を増やしていくこともそうである。従来の店舗・建物を直すときには「景観形成審議委員」の許可を得ることにした。

温泉街には音の要素も大きい。ゆげ街道では土日に限って山中節を流すことにした。こうして町並み整備に努めており、入込客も1日あたり2600人～3000人に増えてきている。食文化という点では、通りにまだ食べ物

屋が少ないので、滞留時間が限られてくる。ところが空き店舗がないことなど、課題はまだまだ残されている。

#### 4 山中温泉女将の会、2つの事業

次にパネリストの吉本加代子氏が、山中温泉の女将の会である「ぼたん会」の活動について報告した。

温泉地で大切なおもてなしの全面に立つのは女将で、ぼたん会は50数年前に誕生した。母に代わって入った頃は30数人が参加していたが、旅館の減少とともに現在では女将の居る宿は12軒。会員も10人になった。ぼたん会は歴史は古いが、以前はイベントや広報活動のお手伝い、親睦会的な集まりだった。高速道路ができると、山中温泉は最奥にあたり、観光客は近くでそれぞれががんばっている山代温泉や片山津温泉止まりで、山中温泉まで足を延ばしてくれない。山中に来てくれるためには、男たちだけにまかせておけない、女性の感性でがんばってみようと、ぼたん会として二つの事業を立ち上げた。

一つは、桜の植樹運動。山中温泉には桜が少なく、地元の人もよそに花見に行っていた。それをお花見にも来られる温泉地にしようと、シーズンオフ対策を兼ねて取り組んだ。年間200本の桜を植樹してとりあえず10年やってみようという計画を立て、地主への交渉から始めて1994（平成6）年3月に第1回植樹祭を開催できた。そして2003（平成15）年には「300年みどりの会」を立ち上げた。300年というのは「永遠に」という意味で、町民だけでなく他県の方も参加できるボランティア活動で植樹と夏には下草刈りを継続してやってきている。

二番目の事業は、タウン誌の発行である。自治体からいくつか広報誌は出ているが、内容はばらばらであるし、温泉地の地元から生きた情報を発信して、山中温泉に関心、興味をもってもらうことが目的である。これは100万円単位の予算が必要だし、発行には反

対意見も多かった。そこで町長に直談判したり、広告集めをしたりして発行にこぎつけ、春夏号と秋冬号の年2回発行して今年の秋で30号の記念号を迎えることになる。

温泉地に旅する人は目的を持って訪れる。そのときはいろいろと感動されたり、満足されるが、時間が経つとそうしたものは薄れてくる。しかし旅の途中や温泉地で人と出会った喜びはいつまでも残っている。だからたとえば「お散歩号」に乗ってもらって、土地のなまりのある言葉でボランティアガイドが説明してくれたのが印象に残ったというようないい人の出会い、思い出をつくれるようにがんばっていききたい。

#### 5 地元ボランティアガイドの活動

シンポジウム後半に参加された観光協会長の上口昌徳氏を除く3人のパネリストから以上の報告、提起を受けて、会場からの発言をまじえて活発な論議がなされた。

先の報告にあった「お散歩号」への地元の取り組みについて、以下の補足説明があった。バスの運行はすでに9年ぐらいいになり、一緒に巡るボランティアガイドのメンバーは商店主、旅館主などで、応募してもらって研修会を実施している。現在60人くらいが登録。ガイドは午前と午後（4時間）に分かれ、各自月に1〜2回当番となる。ガイドはそれぞれの思いで案内すればよく、鹿野住職は山中節を披露してもてなし、客に喜ばれている。そのほかにも加賀市全体のボランティアガイドの支部で山中温泉担当がある。上口昌徳氏からは、「お散歩号」は町の人、旅館経営者が直接客と対話する目的で始めた。自分たちの勉強になるし、初々しさが客には好評。今後もマンネリ化をさけるために工夫をしていきたいという報告があった。

ゆげ街道については、完成して1日に観光客が歩く人数が3倍に伸びたという追加報告があった。シンポジウムの当日朝、そのゆげ街道で車の事故があったことを受けて、会場



から、街道の旧い町並みに宿が廃業したままになっている状態の打開や街道の車の行き来について質問があった。上口昌徳氏から、温泉地は何より人が安心できる場でなければならない、子どもも年寄りも安心して歩ける街にしたいので、まだ私見だが大学キャンパスのように車の時速を6キロにできれば、という提言がなされた。

## 6 天与の源泉を共同で守る

山中温泉の泉質は石膏泉（カルシウム・ナトリウム-硫酸塩泉）で、芭蕉が詠んだ「湯の匂い」にかかわっている。鹿野氏が、山中温泉では共同湯の総湯をぜひ体験してほしい、総湯は深さと広さがある、胎内回帰の印象がある、ゆっくり入って欲しいと提起された。会場から「総湯の入浴料は420円で安くない。宿泊者にはせめて半額にするなりしては」という意見が出され、その総湯の維持管理面や温泉資源を守ることに、前山中町長の田中實氏、鹿野氏、上口氏の三氏から発言があった。

田中實氏の報告は以下のとおりである。

2000（平成12）年あたりまで旧山中町民は無料で、朝、昼、就寝前の3回入って、夜は暖房も要らないというありがたさ。行政もそれを続けようとしてきたが、諸般の事情から町民は年間2000円、1回50円で利用している。山中の源泉の湯量は多くなかったので、思いきって2004（平成16）年に1300m掘って、12号源泉を得た。今まで40数度と比較的ぬるめだったが、58度の高温泉で湧出量は2000石（毎分当たり250リットル）を確保。これをもとに女性浴場の下に従来の源泉とともに集めて、総湯と各旅館に分湯し

ている。源泉は財産区で運用している。

鹿野氏は、「見えないものへの思い」を大切にしたい、温泉は利害だけでなく、温泉への感謝の気持ちを持ち続けていきたい、と意見を述べた。

上口氏の発言は次のとおりである。

温泉は基本的には私有物ではなく、天与のもの、地域の共同の財産であると考え。そのため、源泉を地下の施設にいったん集めて、同質の温泉を分湯するため、現在では市が湧出量を常に点検している。こうして大事な資源を枯渇しないように後世に伝えたい。天与の温泉にもとづく温泉地というのは「運命的に共存してきた」歴史を持つ。地域全体が繁栄してこそ、宿をはじめ温泉地の繁栄がある。

昨今は、旅館を買い集めて、利益が出なければまた売って、出ていってしまうというやり方が流行っているが、自分たちはみんなで富を分配し、宿命的に子孫に、未来に残していく仕組みを考えていかなければならない。温泉地はコミュニティーであり、運命共同体。そして山中温泉にはものをつくる人、伝統工芸にいそしむ人たちがいる。そうした人たちが生きているかぎり、町は滅びないだろう。山中温泉には何百年も変わらず自然や緑が生きていることはすばらしいこと。そうした風土を守り、「旅人の喜びが糧」を共通の理念として、温泉地を守っていきたい。

山中温泉観光協会長の上口氏の発言は、温泉地本来のありかたを深く問うもので、歴史と文化を長く育んできた北陸の山中温泉でのシンポジウムを意義深くしめくくるものとなった。

（文責・石川理夫）

## 書評

## 日本温泉協会編：「温泉図鑑－自然編－」

企画・発行 (社)日本温泉協会 50頁 2009年2月

1,500円(頒価)

本書は、(社)日本温泉協会が(財)日本宝くじ協会の助成を受けて発行してきたシリーズの第4集である。これまで、第1集『温泉－自然と文化－』(2006年2月発行)、第2集『温泉－歴史と未来－』(2007年2月発行)、第3集『温泉－自然遺産と文化遺産－』(2008年2月発行)が発行されている。本の体裁は、これまで通りA4版で大型であるが、ハードカバーでなくソフトカバーになり、手になじみ易く、重さも約300gと半分になり、持ち運びに便利である。『温泉図鑑』と銘打っているように、これまで以上に多くの図や写真がオールカラーで載っていて、見ていて楽しい本である。読み進めていくと、知らず知らずのうちに、自然現象としての温泉、あるいは自然科学から見た温泉について、いろいろ勉強になる本である。

シリーズ第1集から第3集では、まず、温泉の自然や歴史・文化を総論として述べ、次に温泉資源の保護と活用、温泉と健康、温泉地の地域振興について述べ、さらに、各論的に自然遺産、文化遺産として計62件の温泉に関わる自然現象や歴史的建造物等について具体的に記述している(「温泉地域研究」第6号、9号、11号に書評あり)。

本書は、温泉の自然現象に関する図鑑であるので、図や写真の解説という形式ですすめられ、山の温泉、川の温泉、温泉湖、海の温泉、自噴泉、間欠泉、蒸気井、噴泉塔、石灰華、地獄、泥火山、色のついた温泉、温泉沈殿物、スケール、温泉微生物などの項目の他に、人の健康との関連で、温泉分析書、温泉医学などの項目が加わり、それぞれ1頁から4頁に簡潔にまとめられている。

私たちにとって、山や海、湖を眺めながら温泉につかることはなによりの楽しみであ

る。この図鑑を眺めながら、行ったこともない温泉が、まだたくさんあることを知るであろう。しかも、実際に温泉に行ってみると、間欠泉や100℃近い源泉など予想外の情景に会うことがあろう。本書では、これらの現象が地球の地下深い熱源にあることがわかりやすく示されている。

世の中に温泉愛好家は多いが、温泉沈殿物やスケールの話となると敬遠する人もいるに違いない。しかし、蜂の巣のような石灰華(松代温泉)やドーム状の石灰華(夏油温泉)、温泉卵のような玉状スケール(長湯温泉)の写真を見ると、自然界の不思議さを感じざるを得ないであろう。また、温泉には白濁した温泉や、青や緑色、褐色、赤色など色のついた温泉がたくさんある。この温泉図鑑は、その要因が温泉のマイクロな化学成分やその存在状態にあることを示すとともに、こうした温泉の美しさをよく表現しているといえよう。また、温泉を好むのは、人間ばかりでなく、バクテリアや藻類など「温泉微生物」も好んでいることも顕微鏡写真で示されている。

以上のように、これまでのシリーズより、さらに親しみやすく身軽になった本書は、温泉を愛する多くの方々に読んでいただきたいと思う。しかし、これまで同様、一般書店では販売されていないので、(社)日本温泉協会へ申し込めば入手できる。

製作協力者としては、相川嘉正、東威、今橋正征、大山正雄、甘露寺泰雄、綿抜邦彦の各氏、それに評者の長島がそれぞれの分野を担当している。

巻末には新旧泉質名の対照表、適応症と禁忌症、掲載温泉地の地図が載っていて便利である。(長島秀行)

資料

島原半島の観光認知

池永正人 (長崎国際大学)

1 調査の概要

本稿は、火山・温泉・キリシタン史跡などの観光資源を有する長崎県島原半島の観光認知について、訪れる側の観光客と受け入れる側の地域住民の相関を試みたものである。

観光認知に関する調査は紙面によるアンケートとし、2007年7月に長崎国際大学、長崎県立大学の学生195名(男性112名、女性83名)と、同年10月に地域住民(雲仙市、島原市、南島原市)82名(男性53名、女性29名)から回答を得た。回答者の属性を示すと、学生は男性が女性よりやや多い57%(112人)であり、1年生が半数近くを占め、上級学年に移行するにつれて少ない。地域住民については、雲仙市、島原市、南島原市の3市でほぼ均等の回答者数であり、男

性が65%(53人)で女性より多く、年齢は20代から60代と幅広い構成になっている。

なお、本稿は筆者による受託調査成果の『島原半島観光資源評価業務 報告書』(2008年3月)、国土交通省九州地方整備局長崎河川国道事務所の一部を提示したものである。

2 観光認知の相関

【指標① 島原半島のイメージ】

- ・学生と住民に共通する島原半島のイメージは、温泉地(18%、21%)、島原の乱があった場所(15%、16%)が最も多い。
- ・両者の相違点については、学生が火山のある場所、国見高校サッカー部、住民は火山災害があった場所のイメージを抱く人が多い。

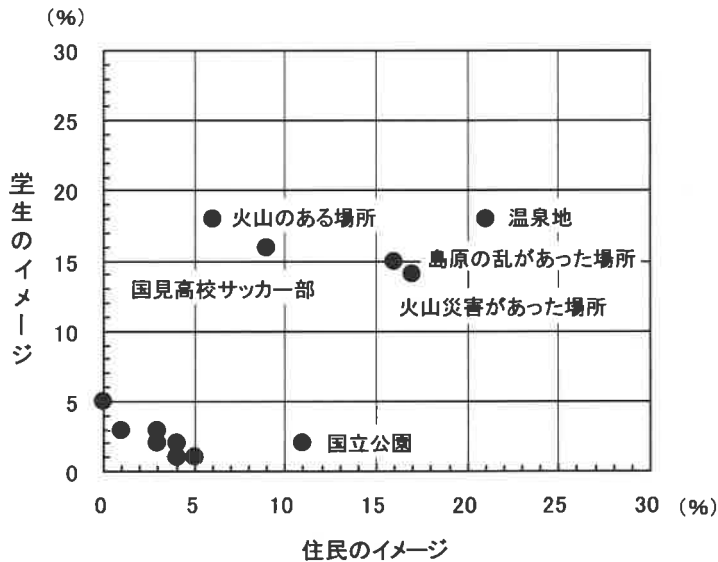


図1 島原半島のイメージの相関

(注) 筆者作成。

【指標② 訪問した観光施設】

- ・学生と住民の両者に共通する訪問観光施設等のうち、雲仙温泉（28%、22%）と小浜温泉（24%、23%）が高い比率であるが、ほかは低い訪問率となっている。
- ・両者の相違点については、愛野展望台は住民が22%の訪問率で学生よりも高いが、地域住民の割に低い訪問率である。

【指標③ 島原半島の観光に望むもの】

- ・学生と住民の両者に共通する希望は、アクセス交通の整備（18人、40人）であり、特に住民の希望が多い。
- ・両者の相違点は、学生が自然保護と観光発展の調和、温泉街の整備・活性化、特産品・郷土料理の販売、住民は観光関連施設間の連携を希望する人が多い。

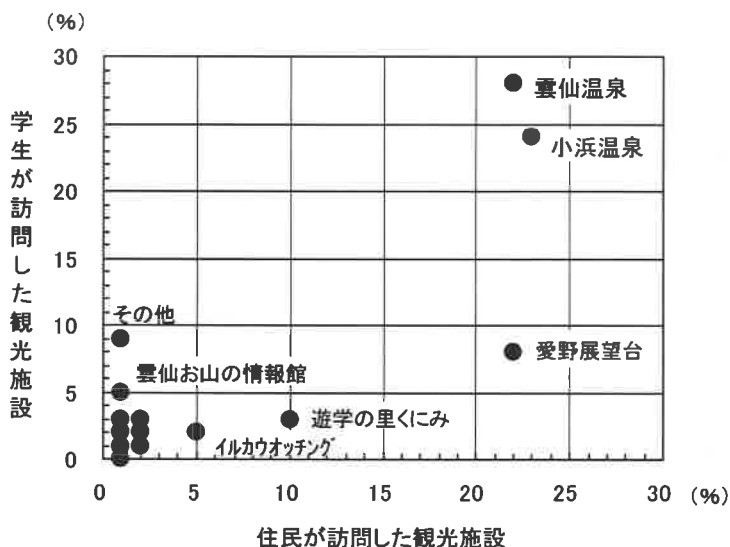


図2 訪問した観光施設の相関

(注) 筆者作成。

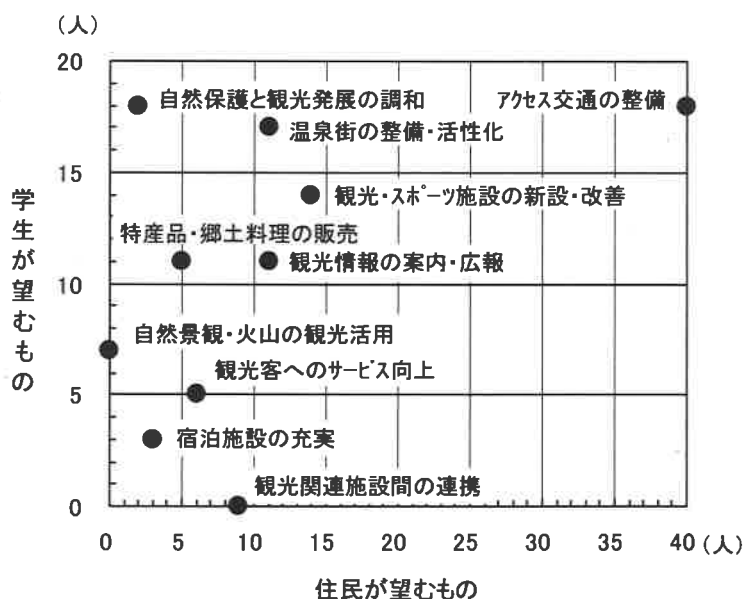


図3 島原半島の観光に望むものの相関

(注) 筆者作成。

## 温泉地情報①

# 温泉と鮎とタケノコの里 —興津川流域の地域おこしの事例—

新田時也 (東海大学)

### 1 はじめに

筆者の住まう静岡市清水区には、全国的に鮎釣りで有名な「興津川」がある。興津は、歌川広重の版画にあるが、現在では、その白砂は埋め立てられ、コンテナターミナルとなっており、当時の面影をとどめていない。なお、広重図には「田子の浦」の表記があり、この一帯が当時は「田子の浦」と呼ばれていたことが明らかである。

この興津川は、鮎釣りで有名であるが、その清流が育むタケノコも、また、品質の良さで全国的にも有名である。かつ、興津川の上流部には良質の温泉も湧き出しており、興津川では、鮎釣り解禁、タケノコの季節になると、温泉地に集う多くの人々で、にぎやかである。

とはいえ、興津川の鮎にしろ、タケノコにしろ、温泉にしろ、これらは、「全国的に有名」ではあるが、「知る人ぞ知る」地域の資源であり、まだまだ、「全国区」というわけではない。そこで、昨今、「鮎」と「タケノコ」と、そして、「温泉」の三点をワンセットとして、この興津川の地域を全国区に「売り込もう」とする動きが、まだ小さいながらも、現れてきた。

本稿では、温泉の魅力に、地域の「食」資源をあわせて、大きな相乗効果を生み出そうとする興津川流域での「地域おこし」事例を紹介する。そして、その活動の中で、他の地域の「地域おこし」にも適用できると思われる普遍的な方法論についてを考察する。

### 2 民宿「あこがれ亭」の取り組み

事例のひとつとして、民宿「あこがれ亭」

の取組を見ていく。この民宿では、毎年、鮎釣りの解禁の時期になると、常連の釣り客を含めて、多くの泊り客が訪れている。中には、首相経験者や釣り漫画の作者、なども、この民宿の常連客とのことである。この民宿では、鮎釣りの初心者には釣り教室を開催している。その他、そばうち、陶芸教室などの体験も提供しており、足湯の設備も整える予定である。また、地場製品の展示、販売もしており、精力的に、興津川の自然、鮎、食、などを発信することで、地域の魅力を活かした取り組みを行って。この民宿のHPでは、「当館の横には興津川(写真1)、ここはまさに鮎釣り天国、食べても最高です。お食事は、自然の風味を大切にした手造り料理。心ゆくまで楽しめます。興津川を眺めながらゆったり入浴できる川の畔の露天風呂も自慢」と、紹介している。

### 3 温泉「やませみの湯」の取り組み

事例の二つ目は、温泉「やませみの湯」(写真2)である。正式には、「静岡市清水西里温泉浴場「やませみの湯」」である。この温泉は、民宿「あこがれ亭」よりも興津川の上流に位置しており、まさに、竹、タケノコの産地に開かれている温泉である。そのため、この温泉では、「竹炭」を利用した温泉を提供している。つまり、竹炭を温泉に浮かべることで、温泉の濁りを取り、肌をつややかにし、湯冷めのしにくい工夫をすることで、利用客に好評である。また、屋外の多目的広場では、竹馬体験、竹とんぼ体験、など、竹にちなんだ遊びが体験できる。そして、タケノコの季節になると、地場の品質の良いタケノ

この水煮やタケノコ料理を館内で販売しており、この温泉を利用する人々は、年中、竹づくしのサービスを提供されている。この温泉は協議会により運営がされており、協議会として、竹を活かしての地域おこしを目指している。

#### 4 考察

民宿「あこがれ亭」の取り組みも、温泉「やませみの湯」の取り組みも、両者に共通することは、「地場産品の有効活用」である。前者では、鮎釣りの季節の「興津川の鮎料理」、後者においては、タケノコの季節の「タケノコ料理」を活かしながら、「温泉」とあわせて、その地域の魅力を発信している。そして、もうひとつ、両者に共通することは、「地域の文化の体験を提供している」ことである。前者では、鮎釣りの手ほどきやそばうちの体験、後者においては、竹を使った遊びの体験や竹炭を利用した温泉にはいるという体験、である。

昨今、「体験」が観光客に好評であり、訪れた地域をよりよく知ってもらうためにも、「体験」は、とても効果的である。本稿で事

例として取り上げた民宿「あこがれ亭」と温泉「やませみの湯」であるが、両者とも、効果的に「体験」を提供することで、単に、温泉の魅力だけではなく、何倍にも、興津川流域の地域としての魅力を、訪れた人に提供することが出来ているように思われる。このような「体験」を通して、訪れた人も、地域のひととの交流が深まることが期待でき、温泉地で、さまざまな体験を提供することは、これからの温泉地の活性化にも大切で有効的なことであろう。その意味で、これらは、好事例といえるのではなかろうか。

#### 参考 URL

あこがれ亭

HP <http://akogaretei.burari.biz/index.htm>

やませみの湯

HP <http://www.city.shizuoka.jp/deps/norin/soumu/yasuragi/yamasemi.html>

#### 調査協力

あこがれ亭女将 柿澤文字子氏

やませみの湯 静岡市清水西里温泉浴場  
運営協議会会長  
吉川津代至氏



写真1 あこがれ亭より興津川を望む

(注) 筆者撮影。2009年5月31日。



写真2 やませみの湯

(注) やませみの湯 HP より。

## 温泉地情報②

### バース訪問記

赤池勇治 (静岡県庁)

#### 1 はじめに

ロンドンから鉄道で1時間半ほど西へ向かうと、「Bath Spa」駅に到着する。そこで下車し、5分ほど歩くと「The Roman Baths」(ローマ浴場博物館)、「Bath Abbey」(バース大修道院)や「Thermae Bath Spa」(サーメ(またはテルマエ)・バース・スパ=温泉施設)が集まるバースの中心地区に出る。

バースの最盛期は18世紀である。その頃の建物(ジョージアン様式:左右対称な窓の配置が特徴)が良く保存され、また、ローマ式浴場と女神スリス・ミネルヴァを祀る神殿の複合施設跡の価値が認められ、1987年に「バース市街」が世界文化遺産として登録されたのである。

#### 2 The Roman Baths

バースには先住のケルト人が集落を築いていたが、西暦43年にローマ人がこの地に辿り着き、ローマ式浴場と神殿を建てた。その遺構が「The Roman Baths」である。ここでは、ガイドブックなどでも良く知られる「The Great Bath」(ローマ浴場跡)、今も温泉が流れるアーチ型の温泉排水口や、微温浴室に使われた床下暖房跡などを見学できる。



「The Great Bath」。後方が「Bath Abbey」。

「The Great Bath」には「King's Spring」という源泉から今も温泉が注がれている。温泉を口に含んでみると、若干の鉄分が感じられた。意外と温度も高く、40度は超えているようであった。バースには源泉が3本あり、平均泉温は46度、湧出量は110万リットル/日、43種類のミネラルを含んだ温泉の主成分はカルシウムと硫酸塩、副成分はナトリウムと塩化物である。源泉は無色透明であるが、温泉熱及び日中の陽射しを受けて育った藻の影響で、浴場に溜まった温泉は緑色に見える。なお、残念ながらここでの入浴は1976年で終わりを告げた。



「The Great Bath」にて

ところで、「The Roman Baths」には、18世紀に社交場として賑わった「Pump Room」が隣接している。今はランチやアフタヌーンティを楽しむレストランになっているが、この中に、King's Spring 源泉を使用した飲泉場がある。グラス1杯の温泉水が0.5ポンドで、「The Roman Baths」の入場チケットを提示すれば無料。ここでは、鉄分に加えてわずかな塩味を確認できた。ちなみに、温泉水を使った「Spa lemonade」(温泉水、砂糖、レモンで作るレモネード。2ポンド)などを試すこともできる。

### 3 Thermae Bath Spa

続いて訪れたのは、「イギリス唯一の天然温泉」を謳う「Thermae Bath Spa」。当初の予定より4年ほど遅れて2006年8月によりやく開業した日帰り温泉施設で、3つの浴場（「New Royal Bath」「Cross Bath」「Hot Bath」）、ビジターセンター、レストラン及び関連商品販売ショップなどで構成される。



「New Royal Bath」の屋上プール

今回は「New Royal Bath」の「2-hour spa session」（22ポンド）を選択した。2カ所のプール（屋内・屋上プール）とスチームルーム（ユーカリやラベンダーなどが香る4種のカササウナ）を2時間利用できるシンプルなコースである。日本の類似施設の利用料と比べると、かなり高額であるが、それでも、週末はかなり混み合うので、平日利用がお勧めである。

また、「New Royal Bath」とは別棟、別料金となるが、「Cross Bath」には楕円形の露天プールが1つあり、貸し切りも可能である。プールサイドではCross Spring源泉から引いた温泉が噴出する様子を眺めることができる。他に、火傷しそうになることから名づけられた「Hot Bath」もあるが、そこは現在、伊豆天城の船原温泉などでも行われているアクアセラピー「Watsu」（ワッツ）や各種スパトリートメント専用の場所として使われている。



「Thermae Bath Spa」。左が「New Royal Bath」、右手前が「Cross Bath」。

なお、「New Royal Bath」は、別角度（建物の裏側）から見ると、一面ガラス張りの現代的な造りで、建物のコンセプトは「水とガラスと石のシンフォニー」である。ガラス張りにすることで夜には建物が光り、蜂蜜色の石灰岩を使用した周囲の伝統的な建物の魅力を一層高められるのだそうである。

### 4 おわりに

バースでは、ボランティアが案内する「Free Walking Tour」（市内散策の無料のツアー）が毎日行われ、バース市内を2時間かけて巡る。ツアーは、「Bath Abbey」から始まり、三日月形に弧を描いた共同住宅「Royal Crescent」などを回り、「Thermae Bath Spa」の前で終わる。英語での説明だが、バースの歴史や温泉について熱心に語ってくれた。

また、「Spa Visitor Centre」には、有料（30分で2ポンド）のオーディオガイドが用意されており、こちらは日本語でわかりやすく解説してくれる。現地の案内ツアーがあると、訪れた温泉地の印象がぐっと高まり、長く心に残る。歴史ある日本の温泉地でも、地元ガイドによる個性的な案内を期待したい。

【訪問：2009年7月、1ポンド＝160円】

【イラスト：赤池キョウコ】



## 学会記事

### ●日本温泉地域学会第14回研究発表大会・総会

来る11月20日(金)・21日(土)の両日、日本温泉地域学会第14回研究発表大会を栃木県那須町那須湯本温泉で開催します。下記のスケジュールで実施しますので、多くの会員の参加を希望します。

### 日本温泉地域学会第14回研究発表大会・総会スケジュール

開催温泉地：栃木県那須町那須湯本温泉

開催日：平成21年11月20日(金)～21日(土)

発表会場：那須湯本温泉「ホテルサンバレー那須」 TEL. 0287-76-3800

宿泊施設：同上

懇親会場：同上

視察会集合：11月20日(金) 13:00 JR東北新幹線那須塩原駅

受付：11月20日(金) 17:30～ホテルサンバレー那須

11月21日(土) 8:30～ホテルサンバレー那須

参加費：一般会員・賛助会員2,000円、学生会員1,000円

懇親会費：会費5,000円(学生3,000円)。学会指定宿泊施設(ホテルサンバレー那須)を利用する場合、懇親会費は宿泊費に含まれます。

宿泊費：学会指定宿泊施設を利用する場合、懇親会費・朝食込みの1室2名利用の1人当たり料金は1万2,000円です。

研究発表大会に参加される会員は、下記の参加形態によって郵便振替で学会事務局宛に相当金額を10月31日必着で前納してください。振込によって学会参加申し込みとします。

視察会参加者は振替用紙通信欄にその旨を明記して下さい。

学会指定宿泊施設+学会参加：12,000 + 2,000 = 14,000円

懇親会参加+学会参加：5,000 + 2,000 = 7,000円(学生：4,000円)

視察会・学会参加のみ：2,000円(学生：1,000円)

振替口座番号：00190-6-462149

加入者名：日本温泉地域学会

なお、研究発表大会不参加の会員で、本年度年会費未納の方も送金をお願いします。

### 日程

11月20日(金) 13:00～16:00 視察会(無料) バス利用で那須温泉郷を見学します。

那須塩原駅～那須湯本温泉～温泉神社～鹿の湯～大丸温泉～宿泊施設(予定)

18:00～20:00 懇親会

11月21日(土) 9:00～12:00 研究発表

12:00～13:00 昼休み

13:00～14:30 交流会・温泉関係書籍展示

**交通案内** : JR 東北新幹線那須塩原駅下車、那須温泉行き東野バスが運行しています。

11月21日の交流会終了後、JR 東北新幹線那須塩原駅へ送ります。

## 研究発表大会・総会プログラム

11月21日(土)

**自由論題** 発表時間：20分(発表15分、質疑5分)

座長：浦 達雄(大阪観光大)

9:00～9:20 内田 彩(立教大大学院)：近世後期の有馬温泉における滞在行动についての一考察

9:20～9:40 井上晶子(立教大大学院)：温泉地におけるランドマークの役割  
—飯坂温泉の事例—

9:40～10:00 池永正人(長崎国際大)：雲仙古湯地区のファサード整備

10:00～10:20 新田時也(東海大)：「海」の体験と「山」の体験を取り入れた温泉宿について—静岡市「三保園ホテル」と「油山荘」の取り組み—

10:20～10:40 休憩

座長：浜田眞之(日本温泉地域学会)

10:40～11:00 陳 晶(フェリス女学院大)：日本と中国の温泉地開発の比較研究

11:00～11:20 長谷戴子：トルコ・アイデル(Ayder)における温泉を核とした保養地の現状について

11:20～11:40 長島秀行(東京理科大)・後藤 淳(太田女子高)：群馬県立尾瀬高校とのパートナーシップ・プロジェクト—群馬県内の温泉と河川の水質調査—

11:40～13:00 昼休み

13:00～14:30 「温泉・温泉地」に関する学会員相互、学会員と地元観光業者・地域住民との交流会

○温泉関係書籍展示

- 日本温泉地域学会第13回研究発表大会は、平成21年5月24日(日)・25日(月)の両日、石川県加賀市山中温泉で開催されました。山中温泉観光協会・旅館組合、加賀市山中支庁など地元観光関係団体のご支援のもと、視察会・研究発表会・シンポジウムが行なわれ、地域住民の参加もあって盛会のもとに終了しました。

視察会では、観光協会・地域住民の皆さんのご尽力のもと、山中漆器伝統産業会館の見学に始まり、山中温泉の広場でもある共同湯「菊の湯」や新設された女性用共同湯・足湯・山中座、大規模な温泉地修景が実施された「ゆげ街町並み保存地区」、さらに大聖寺川の溪流にかかる「こおろぎ橋」や鶴仙溪を経て、「あやとり橋」・「芭蕉堂」などを巡り、最後に「医王寺」で住職による山中温泉の歴史講話をいただきました。

懇親会では宿泊施設の女将による「山中節」の披露もあり、会員は懇親を深めました。

研究発表会では、多様な内容の自由論題の発表があり、午後は石川副会長の司会のもと、まちづくりに尽力されてきた地域住民の参加を得てシンポジウム「山中温泉における共同湯を核とした町並み整備」が開催され、活発な討議が行われました。

- 学会誌「温泉地域研究」第14号（平成22年3月31日刊行予定）の論文・研究ノート・書評・温泉地情報などの原稿を募集します。投稿希望者は学会誌第12号に掲載している投稿規程を順守のうえ、平成22年2月15日（必着）までに学会事務局へ投稿してください。

なお、次回研究発表大会（平成22年5～6月予定）での発表希望者は、3月31日までに発表者名・発表タイトル・内容（100字程度）を葉書に書いて申し込んでください。

- 日本温泉地域学会では、学会案内、活動状況、研究発表会の日程などを本学会ホームページ上で常時お知らせしています。日本温泉地域学会で検索すると、最初に掲載されていますので、ご覧下さい。
- 「温泉地域研究」第12号掲載の石川理夫氏論文中、表4・表5を下記のように訂正してください。

#### 4頁の表4

誤

表4 浅間温泉の温泉入浴施設・外湯

有料開放	非開放		計
	市営／民間施設	外湯	
2	4	11	17

（注）筆者作成。

正

表4 浅間温泉の温泉入浴施設・外湯

有料開放		非開放		計
市営／民間施設	外湯	外湯	外湯	
2	4	11	17	17

（注）筆者作成。

#### 4頁の表5

誤

表5 上諏訪温泉の温泉入浴施設・共同浴場

市営／公共温泉施設	開放（有料）	非開放（温泉組合員・住民のみ）			計
	民間温泉施設／共同浴場	市管理源泉配湯による共同浴場	自家源泉等の共同浴場	その他	
8	8（民間3＋共同浴場5）	52	18	2	88

（注）2007年4月諏訪市役所調べほか。

正

表5 上諏訪温泉の温泉入浴施設・共同浴場

開放（有料）		非開放（温泉組合員・住民のみ）			計
市営／公共温泉施設	民間温泉施設／共同浴場	市管理源泉配湯による共同浴場	自家源泉等の共同浴場	その他	
8	8（民間3＋共同浴場5）	52	18	2	88

（注）2007年4月諏訪市役所調べほか。

# 日本温泉地域学会入会申込書

平成 年 月 日

会員種別	一般	学生	賛助 ( ) 口
ふりがな 氏 名	印 (満 歳) 男・女		
団体名・商号 代表者名	印		
勤務・所属先名称			
所在地	〒		
	電話	( )	
	FAX	( )	
E-mail :			
現住所	〒		
	電話	( )	
	FAX	( )	
	E-mail :		
研究・関心分野			
メールでの対応	可能	不可能	
研究会誌送付先	勤務・所属先	現住所	

\* 学生会員は学生証の写しを同封してください。

事務局受付日： 年 月 日

申込書送付先

〒 299-2862 千葉県鴨川市太海 1717  
城西国際大学観光学部山村研究室内  
日本温泉地域学会事務局  
(yamamura@jiu.ac.jp)

電話：04 (7098) 2839

FAX：04 (7098) 2805

郵便振替：口座番号 00190-6-462149 加入者名：日本温泉地域学会

## 日本温泉地域学会役員

会 長	山村 順次 (城西国際大学)	
副 会 長	石川 理夫 (温泉評論家)	
理 事 長	濱田 眞之 (日本温泉地域学会)	
常務理事	長島 秀行 (東京理科大学)	
	〃 辻内和七郎 (箱根温泉供給)	
理 事	池永 正人 (長崎国際大学)	市原 実 (聖学院大学)
	浦 達雄 (大阪観光大学)	甘露寺泰雄 (中央温泉研究所)
	菊地 莊悦 (東鳴子温泉まるみや)	首藤 勝次 (竹田市長)
	只野 公康 (妙見温泉どさんこ)	中澤 敬 (草津町長)
	布山 裕一 (日本温泉協会)	古田 靖志 (下呂発温泉博物館)
	松崎 郁洋 (黒川温泉ふもと旅館)	森 繁哉 (東北芸術工科大学)
	八岩まどか (温泉評論家)	山田 等 (聖徳大学)
	由佐 悠紀 (京都大学名誉教授)	
監 事	中山 昭則 (別府大学)	谷口 清和 (温泉地活性化研究会)
幹 事	新田 時也 (東海大学)	小堀 貴亮 (前別府大学)

任期：2009（平成21）年5月25日～2012（平成24）年春季大会

### 温泉地域研究 第13号

2009年9月30日発行

編集・発行者 日本温泉地域学会

〒299-2862 千葉県鴨川市太海1717  
城西国際大学観光学部山村研究室内  
(yamamura@jiu.ac.jp)

電話 04 (7098) 2839

FAX 04 (7098) 2805

振替 00190-6-462149

名義 日本温泉地域学会

印刷所 株式会社 こくぼ

〒260-0843

千葉市中央区末広3-3-10

# Journal of Studies on Spa Region

No.13  
2009.9

## contents

### Articles

- Another Case of a Historic Community Bath "SOYU" under Government of Uesugi-shi  
— Ohyu Onsen in Niigata Prefecture — ..... Michio ISHIKAWA ( 1 )
- The Behavior of Tourists who Enjoyed Many Spas Located in One Area  
— A Case Study on Hakone Spas in the Late Edo Period — ..... Aya UCHIDA (11)
- On the Changes of the Space and the Image of the Place in Iizaka Spa,  
Fukushima Prefecture ..... Akiko INOUE (21)
- Current Business Trends of Small Sized Ryokan (Japanese Inn) in Wakura Spa  
Region, Ishikawa Prefecture ..... Tatsuo URA (33)

### Research Notes

- Consciousness Survey on Chinese Views of Japanese Hot Spring  
.....Jing Chen Lin He (41)
- Consideration of Similarity and Bathing Culture between Sea Bathing, Sea Water  
Hot Bathing and Hot Spring, II .....Kazuko SHINDO (47)

### Symposium

- Development and Maintenance of Town Landscapes around Community Bath in  
Yamanaka Spa ..... (53)

### Book Review

- Japan Spa Association ed.『Hot Springs Illustrated—Nature—』  
..... Hideyuki NAGASHIMA (57)

### Material on Spa

- Recognizing Shimabara Peninsula Tourism by Tourist and Inhabitants  
..... Masahito IKENAGA (58)

### News on Spa

- Hot Spring, Ayu Fish and Takenoko Bamboo Countryside along the Okitsu River  
in Shizuoka Prefecture ..... Tokiya NITTA (60)
- Visiting Bath Spa, England ..... Yuji AKAIKE (62)

- Notes and News ..... (64)

Regional Science Association of Spa, Japan

c/o Department of Tourism, Josai International University, Kamogawa 299-2862, Japan